芸能・娯楽

はじめに

今回の調査を通じ、妙義町に伝承されている民俗芸能の中で、特に特徴的な存在と思われるものについて、述べてみたい。

まず、八木連、下高田本村に見られる二人～三人立ちの、神楽獅子の存在である。一人立ちの獅子舞は、本県でもその数が多く、妙義町地内でも、大牛・中里・行沢・菅原・八木連・下高田本村などで、行われていたという。二人立ち系のものは、県内でもその数が少ない。したがって、妙義町での存在は、貴重なものといえる。現在、上演が中断されているので、今回の調査でも実見することができなかったが、しかし、八木連では実演の経験のある話者の入たちの協力により、その大要を把握することができた。神楽獅子の場合、演目が興舞（神をなぐさめる舞）のときには、後ろ足の役になるものが、道化た演技をして、観衆を笑わせるのを普通とする。八木連の神楽獅子の演技も、かなりこの部分が強調されているようである。

つぎに、これも八木連や下高田本村に伝承されている万才について特筆したい。実演経験者も大勢いて、現在でも上演可能な状態にある。これまでの県内での民俗調査では、万才のことも出てきたが、それは、門付芸としての三河万才が「初春になると、村にやってきた」という類のものであった。だが、当地区の場合は、ムラ人自身が、鎮守の祭日などに上演しているのである。こうした例に接したのは、筆者としてもはじめてであった。県内に伝承されている民俗芸能として、貴重な存在であるといえよう。また、演目も多彩であり、「道化万才」と称されているように、その内容も、道化の要素を十分に発揮しているのが特徴である。当地への伝播経路の明確化、また、全演目の内容について記録作成の必要を感じた。

つぎに、義太夫や村芝居も盛んであったことをあげたい。この二つは、かっては県内でも殆んど全域にわたって盛んであった。しかし歌舞伎芝居を演じるには、その演目によっては義太夫語りをぜひ必要とする。この両者が組むことが必要である。その点、当地では義太夫を語れる人がかなりいた。八木連では芝居以前に義太夫が盛んであったとさえ聞かれている。また、大正の頃には阪東菊五郎（本姓萩原）と称するプロ的な役者が一座を組んで、住んでいたことがあり、竹本鳴門大夫と称する地元（大久保）の人が、この一座の専属の義太夫語りになっていたという。また高田本村には横尾某という太夫の元締めがいたようである。したがって、右の菊五郎一座等が、地元の義太夫や芝居の普及に、大きな役割りを果していたことは確かであろう。もちろん、この一座の存在以前から、この当地にはそうした素地があったものと見てよい。

また、村の鎮守の祭日に、神楽や獅子舞とともに行われてきた万才の演目等の間に、忠臣蔵などの、歌舞伎芝居の一場面が、ムラ人によって演じられている。例え一場面ではあっても、これは即席ではできない。かなりの地芝居の体験的素地を必要としょう。こうしたことから見ても、かっては義太夫や芝居も相当盛んであったことが想像される。

また、民謡関係としては、越後口説きにその源流を見るといわれる「とのさ節」が本報書に採録することができた（この唄は、今回の調査以前に、磯貝みほ子によって採集されていたものである）。また、今回、新しく祭文の系統といわれる「ちょぼくれ」も歌詞とともに、曲節も採譜することができた。また、いわゆる八木節と呼ぶ以前には、当地でも「源太節」と称していたこと、また、曲節も現在の八木節とはやや異っていたことも明らかになった。

また、中里に伝承されているお菊伝説を、「八木ぶし・お菊一代記」と題して、八木節用に用意されたものを、本報告書に収録できたことも、今回の調査の収穫であった。（金子緯一郎）

一、獅子舞

八木連の獅子舞　一人立で系統は景雲流といわれている。荒獅子でなく、静かに舞うのを特徴としている。

由来・沿革は詳かでない。昔から旧高田村の村社足日神社の祭日に行われていた。祭礼の日は、以前は九月十五日であったが、大正の末頃から十月十五日となった。大正末期以降で獅子舞が演じられてきた年をあげると、大正十四年・昭和八年・昭和十七年・昭和二〇三年であったという。以後は現在まで中断されている。かっては大久保の人も獅子組に入って、一緒にやったことがあるという。獅子組は「トモエ組」とも称していた。

獅子カシラは男獅子二つ、女獅子一つ。普通、横に並んだとき、中央に位置するのが子獅子。その左右に位置するのが男獅子。男獅子には「ホウガン」とかの特別の名称は伝承されていない。男獅子は角二本（二頭とも）もち、塗りの色は黒。女獅子は頭部にホウシュの玉がついていて塗りの色は赤。いずれも重箱型でなく、丸味をもっている。また黒色の長い髪の毛をうしろになびかせているのが特徴で、実演の前には、村中の家から黒色のオンドリの尾の羽根を集めて、さしかえたという。

構成・楽器・主な道具についてみると、獅子三頭で舞う。楽器は獅子の持つ腰太鼓、笛（若干人）、道具はマンドウ（六尺縁り。四周には、鎮守祭礼、天下太平、家内安全、五穀豊穣などと書いた）、剣（演目「ツルギ」のとき使用）などで、笛は六穴である。

演目はニハ、ササ、ハナスイ、ツルギ、ライデンギリ、メジシカクシなどである。

服装は舞手はジュバンを着て、下はカラサン（下方をしばる）。また白足袋でわら草履をはいた。

獅子舞に関係する者は、この村の長男が主体となった。他の二、三男の者は神楽や万才を担当した（神楽と万才については後述する）。

まず、本番までの日程をあげると、つぎの通りである（以前、九月に演じた時のもの）。

九月一日に会議を開く。下八木・上谷戸・新堀の三つの地区から二名ずつ出ている当番（年番）の者が中心となり祭りに関する相談が進められる。また祭りも、この当番が中心となり運営される。

以後、二日から練習がはじまる（日程・場所等は後述する神楽の練習と一緒）。練習は十二日までつづけられるが、五日と九日の二日間は休む。練習会場は、前記した各地区の当番の家が戸口まわり（順番）で当てられる。

十三日は「花つくり」といって万灯の花を作ったり、その他の準備をする。十四日は「ブッソロイ」といって、一同が揃い、本番の日をひかえての総仕上げをする。

十五日はいよいよ本番の日で、一同はこの日の朝、フリダシの宿となる当番の家に勢揃いする。フリダシの宿は、前述した下八木、上谷戸、新堀の三地区の宿が交替で年毎に当ることに決められている。次

は下八木地区の当番（年番）の家が、出発の宿となった場合の例である。

まず、出発の宿で演目の一つである「ニハ」をフッて（舞って）、神社（足日神社）へ向け歩き出す（神楽連も同行）。道中の笛の曲は「道中シャギリ」。神社の入口にさしかかると、曲は「ヘイガカリ」となる。そして一同は神社の社殿を三回まわる。まわり終ってから、神社の庭で、いくつかの演目を舞う。舞は神楽舞と交互に演じるが、このときの演目は「ニハ」、「ツルギ」「ハナスイ」などである。

神社で舞い終ると、一同は上谷戸の当番の家（当番は二人いるが、そのうちの一人の家）へ移動し、ハナスイなどを舞ってから同上谷戸の氏子総代の家に行って同様に舞う。つぎに新堀の当番の家と氏子総代の家に移動し、上谷戸の場合と同様に舞う。そして朝出発した下八木の宿にもどり（フリコミ）、そこでメジシカクシなどを舞って、この日の行事は終りとなる。終りは夜の十二時頃になるという。

十六日はドジョウバライといって、村中の者が寄って、祭りのあと始末をしたり、酒宴を催した。

獅子舞唄は「ニハ」の場合、二回ずつ位入った。また他にも唄が入った演目があったというが、すでに伝承が薄れ、今回の調査の時点では、つぎの一つだけが採集された。

まわれやまわれ水車　おそくまわりてせきに迷うな
おそくまわりてせきに迷うな

これは演目「ツルギ」のときの唄。三頭の獅子が舞いながら大きく移動し、それぞれの位置に停止して、刀をもらう前に入る唄であるという。刀は二尺七寸位の日本刀で、男獅子二頭が、それぞれ一本ずつ歯にくわえさせてもらう。そして女獅子をうばい合う舞いを演じる。

稽古の仕方についてみると、満十四歳になると、青年会に入った。この年令から師匠や先輩に稽古をつけてもらった。これを「新ゲイコヲタテル」といった。はじめは腰太鼓をつけない。師匠が後ろから抱くようにして手をとり、太鼓のたたき方や足の踏み方などを教えてくれた。新稽古の者は、ちょうど人形使いの扱う人形のような状態になって稽古をしてもらった。そして、ニハ、ササ、ツルギだけは、一年で覚えた。

笛は先輩の後ろに立って、指使いを習った。先輩の指のうごきを見ながら、その通りに自分の指をうごかして行ったわけである。

また、稽古の日程と稽古宿になる家は前述した通りだが、宿にきまった家と、部落の四、五軒ずつでお茶番と夜食づくりをした。稽古が終って帰る頃はいつも十二時頃になった。でも翌朝は眠い目をこすりながらでも早起きして朝草刈りに行ったものだった。

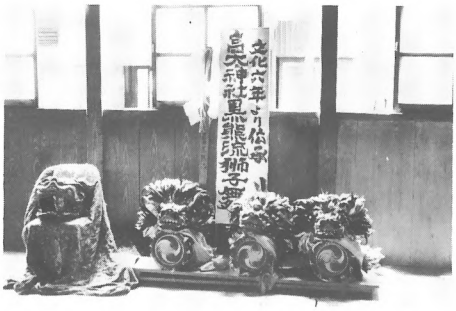
また、獅子舞の者は座敷の上で座ぶとんを敷いて坐れたが、神楽の者は土間か庭先にネコを敷き、その上に控えていたという。（八木連）

下高田本村の獅子舞　本村に住む総領の青年が演じてきた。高太神社の春秋の祭りに演じられた。春祭りは三月十五日。秋祭りは以前は九月十五日、その後は十月十五日になった。

由来は詳かでないが、秋畑より伝わったといわれている。また流派は黒熊流といわれ、一人立ち獅子。三頭（男獅子二頭、女獅子一頭）で舞う。

楽器は大太鼓・笛・しめ太鼓・そして各獅子の持つ腰太鼓である。

演目としては、十六庭あっ



獅子舞の獅子頭（右より３頭）と太鼓（本村）両端は男獅子、中央は女獅子。左端は神楽の獅子頭（撮影　磯貝みほ子）

たが、花吸い、道笛、幣おおい、女獅子かくし、庭くずし、剣、大庭、まり掛り等を主として演じていた。

獅子宿から出て高太神社境内で上演し、（新光寺へ行ったときもある）本村の南裏を西から東へ行き、北表へ出て西へ進み、公会堂で演じた。（下高田字本村）

下十二では、昔獅子をしたので神社が流れたのだという話がある。それは、下十二には道具もないのだから、他所から借りて来てやった時のことだろうといわれている。（上高田字下十二）

大牛の獅子舞　四月十五日と十月十五日に行なった。昭和三十年頃までは毎年やった。家々の庭を巡り、そこでおどった。雄獅子二、雌獅子一、オトウカ（狐）一の四人一組に、祭世話人が四人ついてまわり、世話人が出された神酒や金一封を受けとる役だった。獅子舞をした夜ドーギョーバレエをした。フマ（葬式）のつづいた家では、特別にたのむと、座敷に上っておどってくれた。（大牛）

行沢の獅子舞　鎮守波己曽神社の秋祭りにシシ舞を出した（春ジシは火にたたるという）。大正十三、四年ごろ、獅子舞が復活して、昭和八年、十七年、二十四年、二十九年、三十年、三十四年と続いて、終った。獅子頭は羽根ジシで、白たびにぞうりばきの姿で、世話番の家の台所（土間）に入ってフッタ（舞った）。十二ニワあるうち、六ニワ習った。幣がカリ・お宮参り・花吸い（寺の前でスル）・マリガカリ・笹ガカリ・綱ガカリ・ツルギなどの種目があった。女ジンガクシは歌が多いのでできなかった。歌は十二首あり、笛休めに歌った。「シシノ子ハ生マレテ落チルト頭フルナ、ヒートリアー」「ヤマガラガ山ガウイトテ里ニ出テ……ハネヲ休メル」「オイトマ」「ウサギ」「奥山ノ松ニカラマルツタフジモ縁ガ切レレバホロリホグレル」などの歌詞があった。笛のショウガは手帖に書いてある。

笛はシノの横笛を作った方が、太いいい音が出る。買った笛は高い音が出てしまうので獅子舞には向かない。

行沢の獅子舞　黒熊流で、タカモリカイエン流（?）ともいい、もとは秋畑から来たという。頭は古立から来たもので、ここの流派は中里に伝わっている。

また獅子舞はオ稲荷（トウカ）・前ジシ・中ジシ・後ジシ（アト）の四人組でやる。オ稲荷は先導役で、鈴・幣束を持ち音頭取りをする。前ジシは身長の一番大きい人、中ジシは小さい人がなる。曲は宮参り、笹ガカリ・綱ガカリ・マリガカリ・幣ガカリ・ツルギなどがある。（行沢）

中里の獅子舞　演目は、はなすい、へいがかり、つるぎの舞、め獅子がくしなど。

場所―①春　妙義神社、秋　十月十五日、諏訪神社（行沢）②昔はしやぎりをやりながら、村中を一巡した。その又昔は、各農家を回ったともいう。③菅根堂（公会堂）　④お菊様の庭

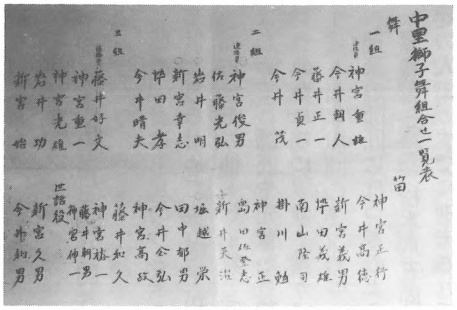
行なう理由―悪魔払いが主だったが妙義神社に頼まれることも多かった。

その他―秋畑流だと伝える。おとなしく、ぞうりばきである。

昔は村の大世話人が預り扱っていた。それは、家が大きく村人を集めて見せるのに都合がよかったともいう。

昔、獅子好きの人がおり、その人（清水太十郎、五〇年前）の葬式には獅子を振ったことがあると伝える。（中里）

菅原の獅子舞　菅原の宿の部落でした。丹生から教えにきた黒熊流というのだそうだ。（菅原）



中里獅子舞組合せ一覧表（中里）

二、神　楽

八木連の神楽獅子　系統―神代磐戸流と称している。また㊀系ともいわれている。二人ないし三人立ちの、神楽獅子の系統と見られる。

由来・沿革―ともに詳かでないが、昔から獅子舞とともに、旧高田村村社の足日神社の祭礼日に演じられてきた。

カシラ―桐製。高さ約四十五センチ。赤のうるし塗り。鼻が大きく目は金色(しんちゅうまなこ)。耳は中が赤色で周囲は黒色。歯は金色。なお一メートル余のタテガミがついている。製作年代は不明。

構成・楽器―神楽使い一人。その後方に、シリモチ、またシリフリなどと称されている助手的な役をする者が一人、はげしい踊りのときは二人、獅子カシラの後ろについている布の中に入る。布は紺地で「山」の字が染めねいてあった。長さは一丈以上あった。囃子方の楽器は、笛・太鼓(平太鼓・オケド・ツヅミド各一)

服装―袂の着物を着て、白足袋をはいた。

演目・持ち物―ヒラ・ガク・ホライリ・ランギョクなどがある。ヒラは村の民家で、ガクは神前で舞う。曲は同じであるがヒラは幣束と鈴を持ち、ガクは剣と鈴を持つ。

ホライリは、曲技的な要素を持った舞で、小道具としてマリやボタンの花などを使う場面もある。また野中の一本杉とかサガリフジと呼ばれる場面もあり、いずれも曲技的な要素をもち、神楽舞の終りに近いときに舞う。これにつづいてランギョクとなる。ランギョクはテンポの急な、はげしい舞で、これで神楽舞は終了する。

日程・実演―本日(以前は九月十五日。その後は十月十五日)までの準備や練習日程、会場、また本日での実演場所は前述した獅子舞と同じである。ただ獅子舞は村の長男が行うが、神楽の方は二男以下の者が主体となって演じられる。神楽を演じる者は「神楽打ち」などと呼ばれていた。

社前で演じるガクの舞いは、つぎのようにして、「舞い出し」となる。

師匠「天の岩戸を押し開き、神をいさめる千代のみかぐら」。囃子が入る。

師匠「身は三尺のつるぎを抜いて、悪魔払ろうはめでたいな、太平楽世とあらためて」。囃子が入り、舞い出しとなる。

稽古・その他―獅子舞と同じく、満十四歳で青年会に入り、そこではじめて、師匠や先輩から稽古を受ける。神楽使いの者は、最初、カシラのかわりに、カイコカゴやメケイなどを使って、練習をしたという。

神楽の師匠にはつぎのような人がいた。

黛倉蔵(舞)、松本八五郎(囃子)、吉田馬十郎(笛)。いずれも八木連の人で、すでに逝去されている。

また過去に、神楽をつぎのような村や町に教えに行ったことがある。明治七年(上高田村)、明治十一年(下高田村)、明治末年(碓氷郡土塩)、大正の頃(下仁田町小坂)。下仁田町小坂へ行ったのが最後であるという。

下高田本村の神楽獅子　獅子舞と同じ日に(春、三月十五日。秋、以前は九月十五日。最近では十月十五日)演ずるが、獅子連でなくて、里神楽連の人が演ずる。大きな獅子頭を一人かぶり、その下の大きな布に一人～二人が入って、神楽のお囃子に合わせ、悪魔払いをする。その後、里神楽を神社の神楽殿で奉納する。(下高田字本村)

里神楽　獅子舞と同じ日に、高太神社の神楽殿で上演する。曲目はっきりしないが、おかめ面やひょっとこ面をつけた。信州の戸隠神楽系といわれている。しかし一ノ宮の神楽によく似ているともいわれている。(下高田字本村)

太々神楽　城上コーチでしている。ここの神楽は諸戸から教わった。(菅原)

石神さまには、もとは太々神楽があった。上十二だけでやっていた。（上高田字上十二）

三、万　才

八木連及び下高田字本村に伝承されており、「道化万才」と称され、現在でも上演可能な状態にある。

以下、八木連での調査を中心にに述べていく。

由緒　伝播経路等については不詳であるが、八木連では以前から、獅子舞、神楽とともに、旧高田村の村社、足日神社の祭礼の日に、同神社の境内や当番の家で行われてきた。祭礼日は、昔は九月十五日、大正末期の頃から十月十五日となった。（現在、祭礼日での上演は中断されている。）

上演者は神楽を担当しているムラの人たちである。つまり、ムラの次男以下の人たちが中心になって演じられる。長男は獅子舞を担当する。満十四歳になるとムラの青年会に入り、先輩たちに稽古をつけてもらう。この辺のところは、前述してきた獅子舞や神楽舞と同様である。

獅子舞や神楽の間に「道化」として演じられ、祭りに参加しているムラ人たちを笑わせ、祭りの楽しい気分を、いっそう盛り上げるのに役立ってきたという。

登場人物名、人数、服装、持ち物等は上演する演目によって異なる。以下、これまでに演じてきた主な演目名を列挙しよう。

●ケヤキ万才　●タバコヤタバコ　●サイトリサシ　●七福神　●宝蔵入り（●東海道・ハシラダテ）（括弧内は下高田本村で聞かれたもの。他は八木連と共通。）

なお、つぎのような歌舞伎芝居などの一場面も演じられた。

●忠臣蔵　●寺子屋　●安達ケ原　●いざり勝五郎

右の芝居の一場面は、他の出しものの間に、「間つなぎ」として組み込まれ、演じられていたという。登場人物に応じた扮装はしなかったが、道化としてでなく、本格的なセリフのやりとりでもって、演じられていた。

つぎに、さきにあげた万才の演目の内容について述べる。これについては、調査の際、話者の人たちに、いくつかの演目について、ところどころ実演してもらったり、また内容のあらすじ等をお聞きして、その大要をつかむことができた。しかし、演目の数も多く、北較的長篇でもあり、調査時間の関係もあって、セリフや所作等の細部について記録することができなかった。後日、正式に上演される時等の機会に、全演目について、これを録音テープやビデオなりにとり、時間をかけて文字化し、保存をしておく必要を感じた。

しかし、「さいとりさし」だけは、今回の調査で比較的全体を採録することができたので、つぎに紹介することにする。

さいとりさし　この「さいとりさし」は万才の演目の一つではあるが、いわゆる太夫と才蔵との二人が、掛合い形式で演ずるものとちがい、集団で登場した踊り手が詞章をリズミカルに唱えながら踊るのを特徴としている。一種の「囃子舞」の系統と見られるものである。囃子舞とは「周囲の者にはやされ、詞章を舞人自らが唱えながら、物真似の手ぶり面白く舞う舞」とされている（演劇博物館編『芸能辞典』）。

八木連の場合は、揃いの浴衣様のものを着て、豆しぼりの手拭いを頭にかぶり、鳥さし棒と菅笠を持った踊り手（十人～十五人）が登場して演じられる。踊り手の唱える詞章の最後の部分か全体を囃子方の者が受けてくり返し、つぎの詞章をうながす形式でもって、演技が進行していく。つまり、踊手「天気よかれな」囃子「天気よかれな」……踊手「一つひよどり、ひのきの枝に、おとまりなすか」囃子「おとまりなすか」という調子で演技は進行する。

以下、調査の当日、八木連の人たちによって演じられた「さいとり

さし」の記録である。（詞章のみ。囃子方のくり返えしの部分は省略。）

出の唄（囃子方が歌う）

〈こんど、さいとりさしをいいつかり、もちのかれぬに、刺そよ鳥

（とりさしの者、登場。つぎの詞章をリズミカルに唱和しながら所作を演じる。）

●さいとりさしを見っさいな。なんでもあいつをさしてくりょ。（太鼓のリズムに合せて、これをくり返し唱えながら登場してくる）

●天気よかれな。

●日和もよかれな。

●一つひよ鳥、ひの木の枝に、おとまりなすか。

●二つふくろ。三つみみずく、みかんの枝に、おとまりなすか。

●四つよたか。よたかという鳥は、味じな鳥で、七つさがるとお江戸の宿を、ござをかかえて、枕をさげて。あ、しょんなりしょ。しょんなりしょ。しょんなり、しょんなり、しょんなりしょ。

●しょなっくところを、さいとりさしが見つけて、なんでもあいつをさしてくりょ。

●もちがかれた。

●腰なる印籠もちを、たらたら出して、口へと入れて。

●むしゃ、やしゃかんで、やしゃ、むしゃかんで。

●かんだるもちを、うら棒へとくっつけて、元の方へつっこんで、うらの方へつっこいで、あ、こいたりしょ。こいたり、こいたり、こいたりしょ。

●もちがぬれた。さいとり棒にかんまいて、なんでもあいつをさしてくりょ。

●竿はみじかし、小鳥は遠し。

●これじゃゆかぬ。

●長竿でやっとくりょ。

●おぼやもだまりな。かいこのはねぬいてやる。

●子どもしゅうもだまりな。赤いちんげぬいてやる。

●さいとり棒にかんまいて、なんでもあいつをさしてくりょ。

●さそと思たら、パァーと舞ってった。

●これじゃゆかぬ。

●きつつねけんで、やっとくりょ。

●こんちきや、こんちきや、あ、こんこんちきや、こんちきや。

●小鳥がもどった。

●手づらまえでやっとくりょ。

●おさえた、おさえた。

（囃子方）何をおさえた。

●おさえにゃ、おさえたが、ヘソの穴おさえた。

●これじゃゆかぬ。

●笠ぶせでやっとくりょ。

●いたぞ、いたぞ。ふせるがだいじ。

●いたぞ、いたぞ。ふせるがだいじ。

●（語調は急におごそかな唱えごと風に改まり）おおさんや、おおさんや、よろこびあえや、よろこびあえや。わが思うところの小鳥は、どこへと、ここよりほかは、やらじと思う。

（ここで三番叟の笛）

ヒィーヒャーヒャール　トロリラヒャヒャール　ヒイヒャール

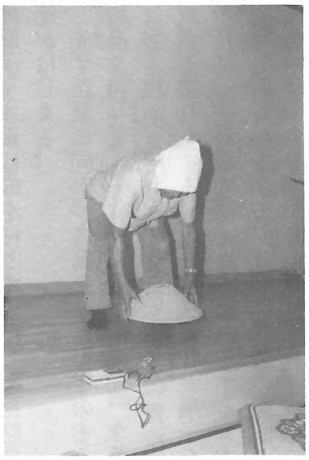
ヒィヒィ

（登場者一同、三番叟を踊る。）—終り—

以上が「さいとりさし」である。ちなみにこの囃子舞は鳥取県東伯郡三朝町にも伝承されている。（仲井幸二郎編『日本民謡辞典』他）。

「出かけた　出かけた　出っかけた　さいとりさしが出っかけた

きのうも天気　きょうも天気　天気続いて　さいとりさしが出っかけた……」



①三番叟の型（八木連）
万才「さいとりさし」の最後に踊る。（撮影　金子緯一郎）

②三番叟の型（八木連）
（撮影　金子緯一郎）

③三番叟の型（八木連）
（撮影　金子緯一郎）

④三番叟の型（八木連）
（撮影　金子緯一郎）

という調子ではじまる。詞章の最初の部分の発想、また演じる様式等は、八木連のものと共通するところが多い。

さて、八木連の万才の一部を記録したものとして、安藤重太郎氏（八木連）の著者『続・うつり変わる農村と私の記録』がある。この本の中には、さきの「さいとりさし」と、「ケヤキ万才」及び「タバコやタバコ」とが記録され、その実演の状況が活写されている。セリフのみでなく登場人物の所作まで書かれているので貴重な記録である。今回、同氏の諒解を得て、このうち「ケヤキ万才」（七福神を含む）と「タバコヤタバコ」を左に収載させていただくことにした。

ケヤキ万才　欅万才とも言い七福神の御えん（縁起）儀をしたのでこれまた祭の万才にはなくてはならない一つだった。扇子を広げ静かにあおぎながら、先ず太夫さんが「一寸一人きな粉餅」と歩きながら出て来る。ほかむりの才蔵「今坂羊甘行くよ餅」と言いながら鼓を持ってつづいて出て来る。

「これはねんねん早かった」と扇子で頭をピシャリ。「来るより早く痛かった」「ところで才蔵近頃見なかったが何処へ行ったかな」「ズズずうと東京へまかり下ったねえ」扇子で又ピシャリとたたく。太夫「このべら棒めえ、下ったんではなく上ったんだろう」「オ、その上ったよ」太夫「東京へ行って何か面白いことがあったな」才蔵「東京へ行けばいなかのはなし、いなかに来れば東京の話」太夫「なる程」才蔵「東京の話、田舎の話さておいて」太夫「なる程」才蔵「去年の盆の正月に」扇子でまたピシャリ。太夫「このべら棒めえ盆の正月なんてことがあるもんか。春の正月だろう」才蔵「オオ、その春の正月に太夫さんの家にし年始に出掛けた」またピシャリ。「し始年ではない御年始だろ」「オオその御年始よ」太夫「御年始に行って何かいい事があったかな」才蔵「おかみの言うことに才ぞうや才ぞうや、よく来たな、さ、もちでもぬいで下駄でも焼いて食え、こう言ったねえ」またピシャリ。「このべら棒めえ。下駄でもぬい餅でも焼いて食え。こう言ったんだろう」才蔵「オオそのその通りよ」太夫「食べたかな」才蔵「食べたねえ太夫さんの身上（しんだいまたは財産）のよがむ程食べたねえ」またピシャリ。「このべら棒めえ、才ぞうが食べた位でこの太夫の身上がよがむもんか」才蔵「そ

れでも帰るときみたら裏の木ごや（掘立小屋の炊木を置く場所）が一寸よれてたよ」「それからどうしたな」才蔵「酒も馳走になり餅を食べてゴロリとねたねえ」太夫「それからどうしたな」才蔵「この才ぞうがねているとおかみさんの仕ぐさがよかったねえ」太夫「なる程それはどんなことかな」才蔵「おかみさんが布団をこの才蔵にかけて、この才ぞうの耳もとにそーと来て、才ぞうや才ぞうやしない、しない、もち上げない」と「こう言ったね」。太夫一寸怪訝顔で太夫「そりゃあまた何を」才蔵「枕よ」。

才蔵「ところで太夫さんの所じゃあ最近ご普請なさったね」太夫「普請したよ」才蔵「表の合梁も欅だね」太夫「表の合梁も欅だよ」才蔵「裏合梁も欅だね」太夫「裏合梁も欅だよ」「表玄関裏玄関又弟玄関夫婦玄関みんな欅だね」太夫「そんな玄関あるもんか」またピシャリ。才蔵「おかみさんもけやきだね」またピシャリ「人間に欅があるもんか」才蔵「それでも」才蔵「ここの所」と右鬢をさし「禿はどうしたんですか」と今まで扇子で度々たたかれた仕返しに才蔵は「おまけにビンカでヂャンカ、ジャンカ」と手で太夫の頭をたたく。太夫「この大勢の人中でたがいに恥をさらすより祭のことだ。才ぞうここらで七福神の御縁起でも致そうではないか」才蔵「それはよい思いつきで」両人一緒に「さらば仕度に掛かろうか」したくも何も要らない、太夫は扇子を才蔵は鼓を持って、出て来た時のままだが、その一声で一応座がはじまる。

先ず正面に向かって緊張した姿でのぞみ、太夫が扇子を中段に開き胸高く持って「一に一天治まるみ代」才蔵鼓を肩にポン「二には二階に届く程兜鎧もいかめしい」太夫「毘沙門さんではないかいな」才蔵威張る振りをする。太夫「三に杯」扇子を広げ「さえっ」と又胸のあたりに、才蔵鼓で酒をさすまねをする。太夫扇子で「おさえつ呑む程に」と呑む形をする。才蔵「布袋の腹もふくれけり」才蔵は鼓で腹の大きい形をする。太夫「四つ四手の早籠に」扇子を持っていささか気取った格好をし、「ヒクリとめした福禄神」太夫「五つ何時でも忙がる手飼の鹿に打ち乗って」と鹿に乗る姿をし「寿老神の里帰り」。才蔵鼓を頭の上にのせ、太夫は廻り腰をかがめて走る。エッサッサコレワイサ、ヨイヨイヨイと。鼓を頭の上にのせ、才蔵「頭の長いのにゃ困まった」才蔵は、しなやかな格好をして袖を口にあてやさしい声で「六つ無体のあで姿、かけひきなさのはりあいなさ」（これは弁天さまを言うので、本来弁天神は真裸のものとし、立琴で其処をかくす。その恥ずかしさを表す所）太夫「七つ難波に名の高き」と扇子をつぼめたまま西方を指し「西の宮わが恵比須」太夫「八つ屋敷を押し広め」扇子を広げながら、才蔵「大黒神もにこやかに」太夫「九つ小倉もおったてて」才蔵「一寸」と股の附近に鼓を立て「もおっ立て」と笑わせる。太夫「十で常若ご万才」、才蔵「ご万才」太夫扇子を広げ静かにあおぎながら「ご万才とはお家もかみえも萬千寿よ」才蔵後に続いて鼓をポンとたたき「ませんずよ」太夫「いよいよめでたくそうらえば」この辺りから太夫が先に歩みだす。才蔵「そうらえば」で太夫扇子を一層大きく振りあおぎながら大股に歩き出す。太夫「まことにめでたくそうらいけれ」と悠長な姿でさもえらそうに歩く。才蔵後から太夫の脛あたりをけりながら才蔵「太夫ける太夫ける」と太夫・才蔵舞台を歩き元の所に一廻りして正面に、太夫「痛てえじゃねえか」それでも太夫が待をけれと言ったので待をけらなければならないと思い太夫「才ぞう『候けれ』とはそうあってくれと言うことなのだ」両人一緒に「まことにおそ末で」と礼をし再び「おめでとうございます」後の方ではトロヒョロ〳〵でしゃぎり出し次の出しものをととのわせる。

○煙草屋たばこ　大きな包を肩にむねのあたりでこれを結びほほかむりした男が「たばこやたばこ、たばこたばこ、たばこやたばこ」と言いながら歩いて出てくる。後から手拭いを例のかわら版売り風に頭にのせ、後でむすんで一本差の者が出て「たばこや」「たばこ屋」と呼ぶ。振りかえって「アア誰かと思ったら獄門の庄兵衛さんでしたか」「誰

れかと思わねえでも俺あ獄門の庄兵衛だ」「時に庄兵衛さん、たばこの勘定お払いなすって」と腰をかがめる。「人中へ出るたんび出るたんびたばこの勘定、たばこの勘定って、一ていいくらになるんだ。特にこの間のたばこなんざあ臭くってむさくって吸いも、はたきもされやあしなかったぞ」「そうでげしょうあのたばこは二階の隅に放り込んでて吸いもはたきもされねえから庄兵衛さんのうちに持ってったんで」「太え野郎だ。払うから一てえいくらになるんだ」たばこ屋「ありがとうございます」とそろばんをはじくふりをして「みんなで三円三十三銭三厘になりますが」庄兵衛「裸でまけろい」「裸でまけろい」「へえ裸ぐれえな所なら」「裸でまけろい」「裸ぐれえの所なら」「それじゃあはらうぜ」と肩を一振り袂に手を入れ手を出して庄兵衛「じゃあ払うぜ」とたばこ屋の手につかませる。たばこ屋は手の中のかねを見る。「庄兵衛さんみんなで三円三十銭三厘の所をたった三厘とは」「でも裸でまけると言ったじゃあねえか」「へえ裸ぐれえの所なら」「でも裸で」「裸ぐれえな」「グズグズ言うと手を見せるぞ」と腰の刀に手をかける。たばこ屋は尻もちついて「ああ仕方がねえ。清水の舞台からとびおりたか高けえ橋からころがり落ちたとあきらめるべえ。へえようがす、ようがす」「じゃたばこのかん定すんだで」

庄兵衛声をやわらげて「ところでたばこや、このあいだの日本橋の喧嘩を見たか」「へえ見たような見ねえような」「それじゃ見ねえな」「見ねえような見たような」「じゃあ見たな」「見ねえような見たような。ま見ねえといたしゃんしょう」「じゃあ見ねえな」大声で「日本橋の真ん中で相手は黒船忠衛門、相手にとって手強い奴」たばこ屋は庄兵衛のせりふの身振りをまねる。庄兵衛の姿も猛猛しく「ぐっと胸倉引捕え目より高く差し上げてステンどぶん」たばこ屋、庄兵衛の前に出て、指で庄兵衛をさし、「ところが庄兵衛さんが放りこまれたねえ」「じゃあ見たな」「見たの見ねえのじゃあねえ、放りこまれてアップアップしてから小石でもあったらたたきつけてやろう。長芋でもあったら、つっこんでやろうと思っているうちに、あいにくむこうの岸に這づり着いてへいその時はどうも」庄兵衛「太え野郎だ」。

「ところでなたばこ屋」少しやさしく「今日は実はその仕返しに行かなけりゃなんねえんだ。喧嘩の仕返しにゃあ下げえこがかんじんだ。その相手になってくんねえか」「へえ」と力のない返事。「この庄兵衛がドリャア行こうかい、と出かけるから呼び止めてくれ」「そんな事あぞうさのねえ、ようがんすようがんす」「じゃあたのんだでえ」庄兵衛は脛あたりのすそを一寸めくり、軽く脛をたたき大股に「ドリャ行こうかい」と歩き出す。たばこ屋はやさしい声で手招きして「庄兵衛さん、庄兵衛さん」と呼ぶ。庄兵衛は引きかえし「それじゃあ喧嘩にならねえ」「この庄兵衛がドリャ行こうかいと出かけたら、若えの一寸待ってもらおうかいと強く呼び止めてくれ」「ようがんすようがんす」「たのんだぜ」「ドリャ行こうかい」「赤けえの一寸まってもらおうかい」庄兵衛引き返し「あけえじゃあねえ若けえのだ」「そうですかい庄兵衛さんが何時も赤い顔なんだからね、つい。わかりました」「じゃ頼んだぜ」「ドリャ行こうかい」「若けえの一寸待ってもらおうかい」庄兵衛引き返えし「待ったが何ぞ用があるのかい」たばこ屋は「用なんてちっともね」「こうれたばこやそれじゃ駄目だ。この庄兵衛が待ったが何ぞ用があるのかいと言ったら『オオ、用と言って別儀ねえ、みそか（晦）の夜に紙入れ落としその紙入れゃあいらねえが中にへえってる嬶の起請（神仏に誓願を立てた文書）がもれえてえ』とこう言ってくれ」「ようがんすようがんす」「じゃたのんだぜ、ドウリャあ行こうかい」「若けえの一寸待ってもらおおかい」「待ったが何ぞ用があるかい」「おお、用と言って儀別でねえ紙入れの夜に晦を落としその晦はいらねえが中にへえてるかかあのふんどしがもれえとえ」「こうれたばこや。全く話にならねえ。紙入れの夜じゃあねえ、晦の夜だ。晦の夜に紙入れ落としその紙入れはいらねえがふんどしなんてことがあるもんか。その紙入れはいらねえが中にへえっている嬶の起請、起請だぜ。

中にへえっている嬶の起請がもらいてえ。こう言うんだぜ」「ようがんすようがんすそうだらそうだとよく言って呉れりゃあええんだ」「じゃたのんだぜ」「待ったがなんぞ用があるかい」「おお用と言って別議でねえ晦の夜に紙入れ落としその紙入れは要らねえが中にへえてる嬶の起請がもらいてえ」「おおその起請は持ってるが取りたくば腕でも脛でも取って見ろい」庄兵衛振り返って仁王立ち。たばこ屋逃げ腰で庄兵衛さんの腕や脛を取った所で何になんべえと知らぬ顔。「たばこやそれじゃあ喧嘩になんねえ。この庄兵衛が腕でも脛でも取って見ろいと言ったら『そんならサッ』と言いながらくるりと廻ってめえむいてくれ」「何だそんなことでがんすか。ぞうさもねえ。くるりとまわってめえむきゃあいいんだね。ようがんす、ようがんす」「じゃあ頼んだぜ」「その起請を取りたくば腕ずくでも取って見ろい」と刀を抜いて正眼に構える。たばこ屋はくるりと廻ってあかんべえして庄兵衛に向って腰をまげてにらめる。「こうれたばこや、めえ向けて言うのは、目を剝くちゅうことや。あかんべえする事じゃあねえ。そんならさっと、くるりと廻ってまえを向き右手を差しのべ刀に向って構える姿勢。かまえ形のこと」だと構えの形を教える。「そうですかそうですか、わしゃあ目をむけと言うからこのほそい目を指に力を入れて泪まで出して一生懸命あかんべえやったんですが、そんな事だら楽のもんだ」「じゃあたのんだぜ」「待ったが何ぞ用があるのかい」「オオ、用と言うて別儀でねえ、晦の夜に紙入れ落とし、その紙入れは要らねえが中にへえてる嬶の起請がもらいたい」「おおその起請なら持ってるがほしければ腕ずくでも取って見ろい」「そんならさっと廻って」と右手を伸ばし庄兵衛刀を振り上げる。たばこ屋クルリと廻って右手を伸し、受け姿勢をとる。「そこだ」と思わず庄兵衛さけぶ。たばこ屋「どこだ」「どこだ」と庄兵衛の周りや舞台を何か捜して歩く。庄兵衛「こうれたばこや、どうしたのだ」たばこ屋せいを切りながら「庄兵衛さんがそこだと言ったから何か宝物でもあるのかと汗をしって屁を流して何かいいものでもあるかと捜したんで」「何にさあ、あんまりたばこやの構えがよく出来たので思わずああさけんだのさ。さあこれで下準備は出来た」「だが喧嘩に行くにゃあ下稽古に、立廻りもかんじんだ」「このさやを渡すから立廻りしてくれ」たばこ屋さやを高く上げ、上を向いてぐるぐる「立廻り立廻り」と庄兵衛のまわりをまわる。庄兵衛「どうしたんだ」「立廻れと言ったから」「立廻りとは打合いだこの庄兵衛が構えているから打って来い」「いいんですか」「うってこい、うって来い」「うってきますよ」「うってこい」たばこ屋突然「こんちゅく生、こん畜生」と腰と言わず足と言わずめったやたらと庄兵衛を打ちのめす。庄兵衛「あいてて〳〵」とにげ廻りながら「たばこや止めろ」「止めろ」と大声で泣きおとして逃げ廻る。やっとたばこ屋も気付いて止めた。庄兵衛「ああ痛い」「ああ痛てえ」と言いながら腰や脛をさすり「そんな者は役に立たねえ」と、おこり顔。「時にたばこや、向こう」と言いながらすかし見るように、「隅に蚊が一疋」両人一緒に「にわかにわかで（賑で賑での意もあろう）おめでとう」これで一幕は終り。

さて、「ケヤキ万才」は太夫が扇子を持ち才蔵が鼓を持って登場するもので、いわゆる本格的な万才の系譜を踏むものであろう。今回の八木連での調査では、最初の部分が、つぎのようになっていた。

（太夫、扇をひろげ、あおぎながら出てきて、まず口上をのべる。）

「……千年、年あらたまり、刀はさやに納め、弓は袋に納め、よろいかぶとを着初めしご祝儀なれば、才蔵にちょっと、見参申そう」

太夫「あいつめ、クルカイ、クルカイ、クルカヤ」

才蔵「クルトモ、クルトモ、九里も十里も参って候。太夫さんの前へ出しゃばって候」

太夫、扇子で才蔵の頭をたたく。

太夫「これはネンネンはやかった」

才蔵「くるより早く、いたかった」

また、才蔵が太夫の家をほめる所では、「天王柱もケヤキだね」「マアセン棒もケヤキだね」「馬もケヤキだね」などのセリフも入って、道化万才に見られる変化自在のおもしろさを見せていた。

下高田本村では「これは(万才は)、いっぱいやらないとできないが、獅子舞はいっぱいやるとできない。万才はおよその筋はきまっているが、セリフは、お客の顔を見てからいうものだ」と聞かれている。なお同村でも獅子舞、神楽とともに高太神社の祭日（十月十五日）に行われてきた。演目は前述したとおりである。

また「タバコヤタバコ」は寸劇風な万才である。八木連の人たちの話によると、ふつう庄兵衛は太夫役の者がやり、タバコ屋は才蔵役の者が演じるという。また、タバコ屋の役の丸がむずかしいと語っている。つまり、主役が太夫でなく才蔵に代る内容の演目である。一般的にいって、万才の演目にはこのような系統のものもあり、むしろこの方が、一そう道化化されてきて、人気を博してきたといわれる。「才蔵づくし」といわれる演目もその一つであるという（日本ナショナルトラスト編『日本民俗芸事典』）。

八木連でも「……づくし」という演目も練習したことがあるという。とにかく、八木連に伝承されている万才の演目は、多彩である。

また、上高田では八木連の万才について、つぎのように、今回の調査では聞かれている。上、下八木連の人が道化万才をやる。神楽のようであるが神楽ではない。秋の祭りのとき昼間は神社で、夜は当番の家の庭でやる。服装は鉢巻、ほほかぶりなどで、例えば次のようなことを唄いながらおどる。『妙義山にハアテがする。碓氷峠は鏡の如く氷ったね』。

四、村芝居・義太夫

芝居は正月とか三月の村祭りの日に、上八木、下八木などの青壮年の者が盛んにやった。明治の末頃、警察の取り締りがきびしかったので、土蔵の中で、かくれて練習をしたこともあった。

大正の頃、阪東菊五郎と称する役者が、一座を組み、八木連に住んでいたことがあった。また萩原長太郎さんはこの人の長男で、やはり芝居をした。この一座が、大正三年に忠臣蔵の通し興行をしたことがある。小屋掛けでやった。地芝居では太閤記や安達ヶ原などをやった。

義太夫も盛んであった。竹本鳴門太夫（岩井藤十郎）という人が大久保にいて、菊五郎一座の専属で、義太夫チョボを語っていた。大正の頃、新田郡世良田の秋祭りには、必ずこの一座は興行に行くことになっていた。また、世良田だけでなく、東毛方面へはかなり興行に出かけたことがあるという。座員は全部で十二人ほどいたという。また高田本村には横尾某という義太夫の太夫の元締めがいた。また、八木連には松本牛五郎、高石嘉市という太夫もいたという。また松井田からは小島ダイという三味線ひきも村に来たことがあるという。八木連では、義太夫は昭和のはじめ頃までやっていたという。また、芝居より義太夫の方が早くから盛んになっていたとも聞かれている。（八木連）

地芝居も盛んで、農事のひまをみては習っていた。富岡に地芝居の役者で萩原ちょうさんというおかみさんがいて、子どもを連れて教えに来た。この人から衣装や小道具など借り芝居も習った。三味線弾きの師匠は富岡に居た人、菅原生れの横尾だいさん等が来た。中には弟子入りした人もいた。地方まわりの地芝居の一座が来ると村の人たちも混じって芝居をした。

上演目は千代萩、安部宗任、忠臣蔵妖婦伝などであった。（下高田字本村）

義太夫熱は盛んで師匠として中野谷の鶴沢とり子（鶴沢とり太夫）がよく教えに来た。

多くの人が弟子になった。（下高田字本村）

義太夫は大正の頃、八木連に師匠がいて、その人に習った。三味線太夫もいて、一時は盛であった。（下高田）

コモ張り芝居　大正七、八年頃、お菊芝居を三日三晩も行った。本職の人もいたが、地元の者もおどった。これをコモ張り芝居と呼んだ。オジユウヤ（菅根堂）でおどった。（中里）

五、民　謡・その他

盆踊り唄　八木節の流行する以前（明治の頃）から盆の十三日の晩から夜っぴて（夜どおし）公会堂や公会堂の前で盆踊りをした。また寺や神社の境内や広い庭の家などでも踊った。八木節に似ている口説節の国定忠治、白井権八、巡礼おつる・継子三次、鈴木主水、お菊由来などで踊った。踊りは手踊りであった。お菊由来は、中里の衆が本村まで来て踊った。それからしばらく経って源太節が流行し、八木節と名を変えた。八木節の先生は芝居役者の萩原長太郎さんだった。（下高田字本村）

源太節　大正七、八年頃、八木節を盛んにやった。この頃は八木節というより、源太節といっていた。春の花見時期にやることが多かった。囃子には笛、鉦、鼓、いたみだるを使った。演目は国定忠治、継子三次、鈴木主水、学校騒動などであった。佐波郡東村から萩原長太郎という人が、大正頃、八木節を教えにきた。この人は堀込源太の弟子であった。現在、富岡市に住んでいる。

踊りには手踊り、手ぬぐい踊り、花笠踊り、スゲ笠踊り、唐笠踊りなどがあった。

また近郷へも出かけて行った。松井田の松楽座、富岡の富岡座と中村座、また一之宮の一之宮座などにも行った。開催地の主催者から招待状がきたとき出かけるのであるが、「優勝」と染めぬいた優勝旗をもらってきたこともあった。また兵隊の慰問にも行ったことがあった。

なお、源太節が入る以前、ここではどんな盆踊り唄を歌っていたか不明である。最近の八木節は「ハァー」の歌い出しの部分を、「ハァーア、ア」と切っているが、源太のは切らない。前述した萩原長太郎氏からは、源太の歌い方を習ったという。（八木連）

源太おどり　下高田に田村辰五郎という人があり、源太についていっしょに廻って踊った。大正四～五年のころからこの地方でもさかんになり、妙義の方へもいって盛んにやった。戦時中とだえた。（下高田）

八木節「お菊一代記」　つぎに、中里を中心に伝承されているお菊の伝説を、八木節用として詞章化されたものを紹介しよう。

お菊一代記　　宝積寺住職　西有穆堂師校訂
　　水沢天外散人作

国は上州に其名も高き
妙義山にて向うは砥山
北は赤城山に榛名をみなし
こゝに横野の人見が原よ
それに連る中里村の
お菊由来をたずねてみれば
昔天正十四の年に
小幡領主は上総の守よ
頃は九月の菊花咲り
今を去ること三百余年
村の郷士は菅根の正治
月は六さい小幡のつとめ
一人娘にお菊というて
年は十八花ならさかり
きりやうよいこと数万にすぐれ
四季にたとえて申そうなれば

春は桜に夏ならあやめ
秋の尾花に冬さざんかよ
唐で楊貴妃日本で小町
お菊評判地頭に聞え
おみや使いにお菊をあげと
いやといわれぬ泣く子に地頭
親に連れられ小幡へ参り
氏はなくとも乗る玉の輿
十二ひとえの衣裳をきなし
殿の気に入り万事につけて
お奥様ほか女中衆までも
お殿様にと皆うらまれりゃ
女心はたとえの通り
部屋にうちよりささやきはなし
あのやお菊をしくじらせんと
ある日お菊の給仕の時に
そのや御飯に絹針いれて
知らぬ顔してお菊に渡し
後の難義は夢にも知らず
お奥様へと差上げなさる
お奥様には手にとりあげて
見れば不思議のこの有様に
これは何ぞとお菊に向い
そちは妾をたくらみしかと
お菊きくより仰天いたし
何とお詫びをいたさんものと
こゝにお菊はなき臥すばかり
死ぬる命はいとわぬけれど

もはや吾身も四月とあれば
腹のおやつにふびんがまさり
お殿様をばござろうなれば
こんな難儀はあるまいものを
いかに奥様朋輩衆も
情けないこと致してくれた
ぜひに及ばぬ吾身の因果
こゝにお菊は詮方なくも
きついごうもんおしきを受ける
裏のお庭の松木へつるし
半死半しょの責めにとなして
すぐに城下へおふれを廻し
蛇やむかでを取りよせさせて
それをもろとも桶へと入れて
南山なる熊倉さして
行けば程なく轟村よ
寺の地内とはやなりければ
お菊思うに心の内で
むかし古人のたとえをきくに
いかに大罪悪人とても
寺の方丈の願によれば
きっと一度は許しになると
こゝでお菊は願いをあげる
わしの一生のお願いなれば
ぜひに山門お通したもと
慈ひじゃ情けじゃ役人様と
いえば役人情けの言葉
そちの願いは許してくれん

こゝに山門通るも更に
寺のお慈ひも仏の法も
何のことばも今更なけりゃ
もはやお菊も覚悟をきわめ
寺を見返る無念の涙
これを見送る其人々は
袖に涙の流るるばかり
死出の三途の水越川を
行けば程なく無常の谷よ
登りつめれば釈師が平
ここがこの世の見おさめなりと
故郷見返るみ船のひらよ
行けば程なく熊倉下の
針の山なる血の池地獄
又もここにて蛇ぜめ受ける
これをきくよりお菊の母は
なげき悲しさ狂気の如く
こけつまろびつ熊倉山へ
行けばお菊は生死のさかえ
母は見るより娘にすがり
菊よ菊よと呼わりければ
耳に通じて娘のお菊
今は苦しき声はりあげて
もうし母様よう来てくれた
わたしゃ一言いいたいけれど
耳もきこえぬもう目も見えぬ
苦しながらも声細々と
わたしゃ親への不幸のものよ

御恩返しもいたさぬ内に
親に先だちゆるしてたべと
是非に及ばぬ我身の因果
きくに母親泣き入るばかり
たった一人のいとしの娘
先に立たせて老いたる此の身
何と此の世にたのしみあろぞ
母も後からしたうて行くよ
死出の山路や三途の川の
道に迷わず成仏せよと
性があるなら此胡麻はえろ
土に向いていりごまなげた
共に我身も池へと沈む
なげたいりごま今にとはえる
これはさておき熊倉山の
峠向うは小柏領よ
殿は狩にと供をばつれて
通りかかればはるかに向う
何かごう〳〵物音すごく
はては不思議と近より見れば
石のかろうと怪しきものよ
刀こじりでこじあけ見れば
哀れお菊は絶命いたす
蛇やむかではちり〴〵ばらに
今の世までも小柏様は
毒蛇守りと其の名は残る
其の夜泣声国峰御殿
お菊おりんやう煙のように
姿うつりて怪火さっと
たつと思えばまた真の暗
細い声して絹さくように
恨なき声御殿にひびき
屋鳴りしんどう物音凄く
お奥様ほか女中衆までも
家中悪人とり〴〵までが
ふるえおののき御殿の内を
あちらこちらとうろたえ廻る
無実天罰あら恐ろしや
其後寺へと不思議がござる
方丈居間へとまどおの声や
お菊姿がうらめしそうに
たつと思えば又消え失せる
変化変化の物音すごく
不思議〳〵のその数々に
ここに寺へと火災が起り
本堂山門皆やけ失せる
さても其後のお菊の家は
次第〳〵に皆死絶えて
茶とう手向けも皆あと絶える
其後安政五年の年に
国は信濃の埴科郡
真田様とて十万石の
そのや御家中に知縁があれば
むかし小幡でそねみの上で
数多の女中に責め殺されて
無念魂ぱく此世にあれば
たよるとこなきお前のところ
ぜひに葬り下されませと
お菊しうねん現れければ
家内残らず仰天いたす
すぐに殿へと言上いたし
いとま願うて仕度をなして
国の浅間をうしろにみなし
碓氷峠の権現様も
いそぎ通りて上州の国へ
妙義ふもとの中里村の
名主たずねて始終を語り
金子わたして石碑をたてる
東小幡の宝釈寺へと
寺をたずねて回向をなさる
ここにお菊を金比羅様と
寺の鎮守にまつられければ
小幡領へも宝釈寺へも
もはく恨はいたしはせじと
万仞禅師に夢にて知らす
其後むととせ大正の御世に
ここにお宮を再建いたし
今の御禅師御供養なさる
お菊霊神あらたかなれば
これへ参詣する人々は
悪魔外道は退散いたす
祈る吾等の家繁昌よ
子孫長久蚕も当る
目出た〳〵で日にちを送る――終り――

（この「お菊一代記」は現妙義町大字中里に伝承されている「お菊」の伝記にもとづいて作られたものである。十五センチ×八・五センチ判。十四ページの活字本になっている。同本の奥付によると、大正十一年二月二十五日発行。著作者、水沢天外散人。発行者、小沢字作〈北甘楽郡小幡村〉。発行所、岡村盛花堂〈東京市浅草区柳橋通り〉。正価金十五銭とある。なお、筆写に当って、漢字は新書体に、かなづかいは、現代かなづかいに改めた。）

とのさ節（やきもち）　明治の後期頃、この辺で「手合わせ歌」として、流行していたものである。とのさ節は「トノサエー」ではじまるが、ここでは「やきもち」と題して、「げんがおばあは……」ではじまる。とのさ節は中篇の越後口説き系の一種いわれている。越後のごぜなどによって各地へ運ばれ、あめ屋などが歌って、さらに広めたという。

「やきもち」は手合せ歌として歌われていたので、わらべ唄として取り扱う考えもあったが、一応、ここでは「民謡」の中に組み入れた。歌詞はつぎの通りである。

げんがおばあは　やきもち大好きで
ゆんべ九つ　けさほど七つ
一つのこして　たもとに入れて
馬にのろうと　ことりと落した
はねやがれやきもち
とびあがれやきもち
とるははずかし　すてるはおしし（下高田字新光寺）　楽譜①

なお、これとよく似たうたに、最上口説や　伊那の源五兵衛踊がある。このうたと同じメローデーで歌詞は少々違うが富岡市、甘楽町などにうたわれていた。今でも富岡市東部から甘楽町へかけて「烏どこゆく」という手合わせうたとして残っている。なおこのうたは、今回の調査より約二十年～三十年以前に採集（採集者・磯貝みほ子）されたものである。

俗謡　「畑にヂシバリ　田にはビリモ。虻田に源兵衛　なけりゃよい」。この中の源兵衛は戸長だった人。具体的に「なけりゃよい」の内容はわからない。

「高田よいとこ　女のよばい
男後生楽　寝てまちろ」。（下高田）

地ぎょう唄　「つるは千年　エンヤラヤァエ　やれこの　エンヤラヤァエ」　（下高田字新光寺）　楽譜②

祭文語り　むかし、八木連に『きっちゃん』と呼ばれた番頭がいた。新潟から奉公に来た人だが祭文語りが上手だった。あまり上手なので村の若衆が幕を作ってやった。「雨が三年、日照りが四年……」などという唄を歌っていた。聞いている人はゼニをやり、手ばたきをしてやったという。（八木連）

ちょぼくれ　ちょぼくれは祭文と同系統の、一種の口説き調の唄、あるいは語り物と見てよい。つぎのちょぼくれは、下高田字新光寺で採集されたものである。

びんぼうしんぼう　とちねんぼう
ならびにかたずく　すりこきぼう
ぎりぎりかうのは　しんばりぼう
朝のぼうずが　ねぼけぼうずで
昼のぼうずが　ひょろぬけぼうずで
いっていぜいてい　のらくらぼうずで
仕事がきらいで　お酒がすきで
大酒のんでは　檀家に憎まれ
ぼうずは　寺の大門出るときに
小さな木魚を　手に持ちとびこめ
たずなははりこめ　娘はしゃれこめ（下高田字新光寺）　楽譜③

屋台　昔は行沢でもいい大工が屋台を作って、ハヤシも教えたので、

春祭りに屋台を出した。大正七、八年ごろが屋台の真最中だった。（行沢）

六、わらべ唄・子もり唄

まりつき唄

正月え　障子あければ万才が
つづみうつやら　歌うやら　歌うやら（妙義町全域）　楽譜④
あんたがたどこさ　ひごさ
ひごどこさ　くまもとさ
くまもとどこさ　せんばさ
せんば山には　たぬきがおってさ
それをりょうしが　鉄砲でうってさ
煮てさ焼いてさ　食ってさ
それを木の葉で　ちょいとかくす（旧高田村全域）　楽譜⑤

羽根つき唄

ひとりきな　ふたりきな
三人きたらば　よってきな
いつきてみても　ななこのおびを
やのじにしめて　ここの文のたびを
ちょうどにはいて
ぐるっとまわって　いっかんしょ（妙義町全域）　楽譜⑥

お手玉唄

一にたちばな　二にかきつばた
三にさがりふじ　四にししぼたん
五ついやまの千本ざくら
六つむらさき　七つなんてん
八つ八重ざくら
九つこんめを　ちらしに染めて
十で殿様　しっちょごけ
だんごしょ　だんごだんご　だんごしょ（妙義町全域）　楽譜⑦
おじゃみー
日清戦争　猿飛佐助　義経辨慶
五条の橋見て　おむぎのたたかい
なってんしょ
おてしゃみおろして　おっさらい
おひだり　としゃりこどん
なかよせつまよせ　おっさらい
お手のひら　おっさらい
おゆびのまた　おっさらい
小さなはんしょ　くぐりゃんせ
おっさらい（妙義町全域）　楽譜⑧
一つがんがらみ　二つふきのとう
三つみかんの木　四つよろずの木
五ついちょうの木　六つむくれんじゅ（むらさき）
七つなんてんの木　八つやしおの木（やえざくら）
九つこんめの木　十でとおがらし（妙義町全域）
（　）内のことばでも歌われている　楽譜⑨
おえべすさまと　いうひとは
一にたわらを　ふんまえて
二ににっこり　わらって
三に酒を　つくらせて
四つ世のなか　よいように
五ついつでも　にこにこと
六つ無病息災に
七つ何事　ないように

八つ屋敷を　広めて
九つ紺屋を　おったてて
十でとうとう　福の神（妙義町全域）　楽譜⑩
一番はじめは　一の宮
二また日光　中禅寺
三また佐倉の　宗五郎
四またしなのの　善光寺
五つは出雲の　大やしろ
六つは村々　鎮守さま
七つは成田の　不動様
八つやはたの　八幡宮
九つこうやの　こうやさん
十で東京　博覧会（妙義町全域）　楽譜⑪

子もり唄

お月さんいくつ　十三、七つ
まだ年しや　若いね
男のくせに　あかごを生んで
だれにだかしよ　おまんにだかしよ
おまんはどこいった
油買いに
油屋の前で　すべってころんで
油一升こぼした
その油どうした
太郎どんのいぬと　次郎どんのいぬと
みんななめちゃった
そのいぬどうした
太鼓にはって　あちい向いちゃ　ドン　ドンドン
こちい向いちゃ　ドン　ドン　ドン（旧高田村）　楽譜⑫

もりっこは楽なようで　つらいもの
おかみさんにゃじきまれ　子にゃ泣かれ
ねんねんねこのけつ　がにがへえこんだ
やっとこさっとこひきずり出したら　また
へえこんだ
そらそらすいかの皮でも　とっとけつけときな
晩のおかてがないときゃ　よっぽどちょうほうだ
（旧高田村全域）　楽譜⑬

「子もりうた」について

譜にかいてあるものは、富岡市でうたわれているものと全く同じである。歌詞は、子守りが次々に即興的に作り出して行く。特に背中の子がうるさい時には陽旋法でうたう。つい悪口もきく。例えば

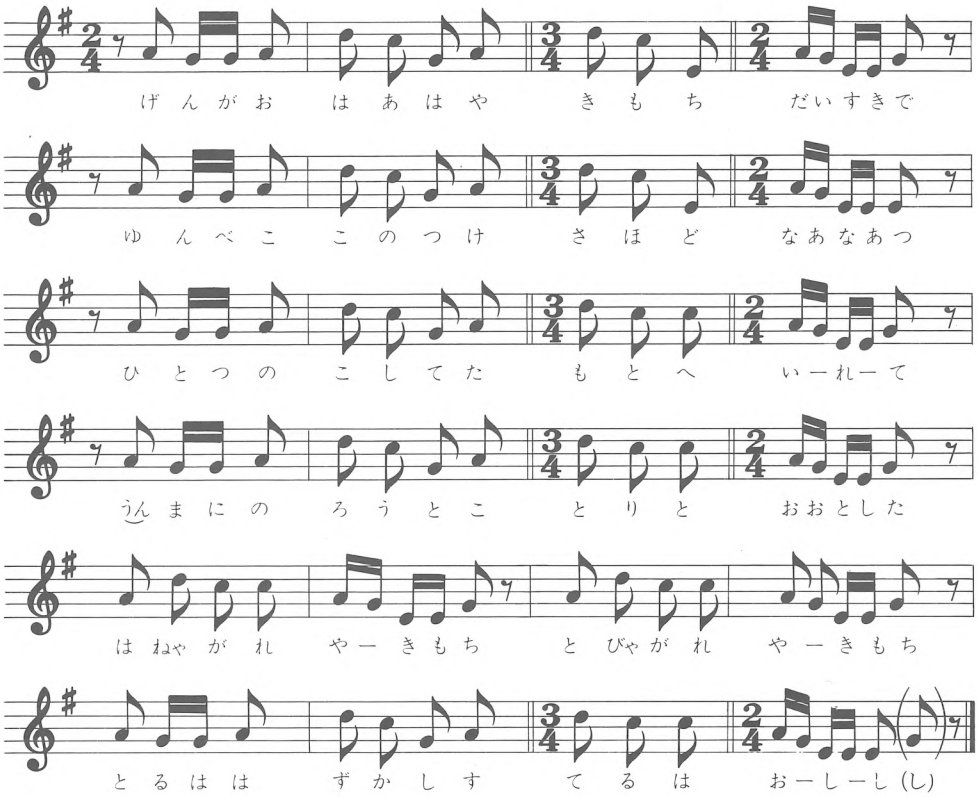
ねろってば　ねねえのかこのガキメ
ねねえと　ねずみにくわせるぞ

人の見ていない時には背中の子のしりや頭をはたいてうたう時もある。

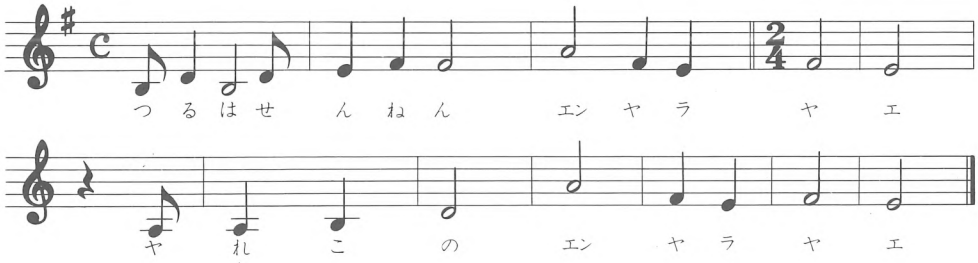
妙義地区では以前、流行した子もりうたに次のようなものがあった、

あの山の　光りものは　月か　蛍か　灯か

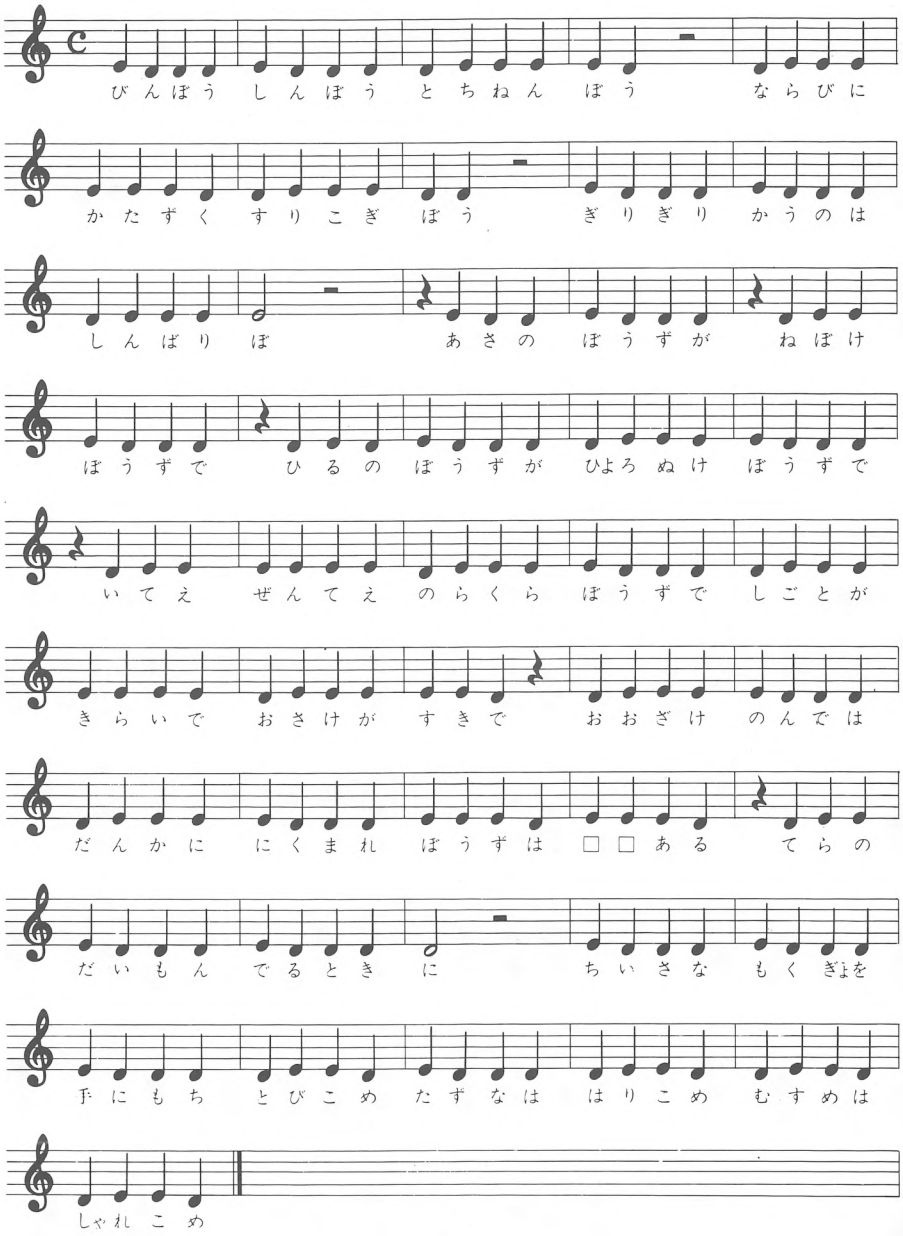
楽譜①　　**やきもち**（とのさ節）　　下高田字新光寺



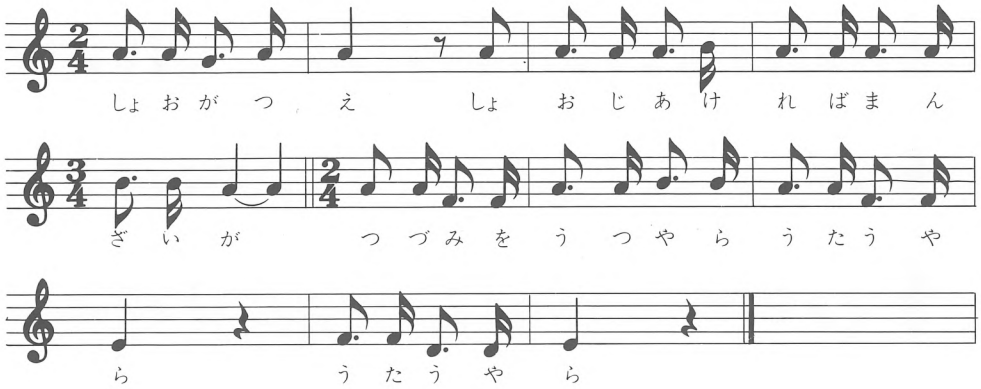
楽譜②　　**地ぎようううた**　　下高田字新光寺



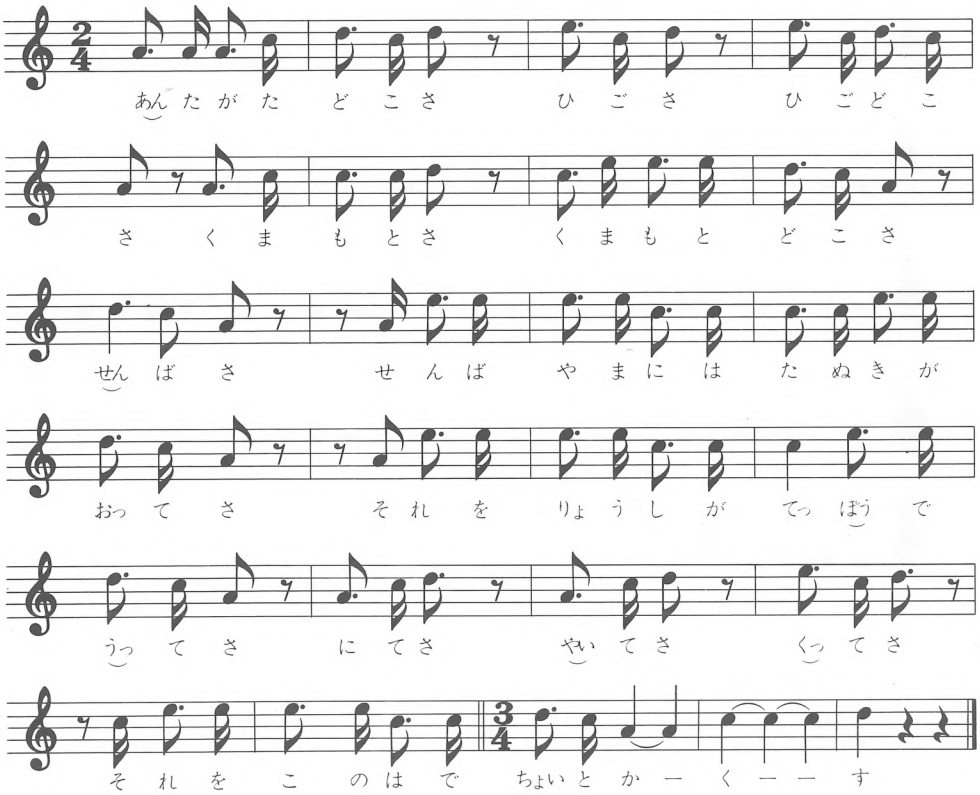
楽譜③　　ちょぼくれ　　下高田字新光寺



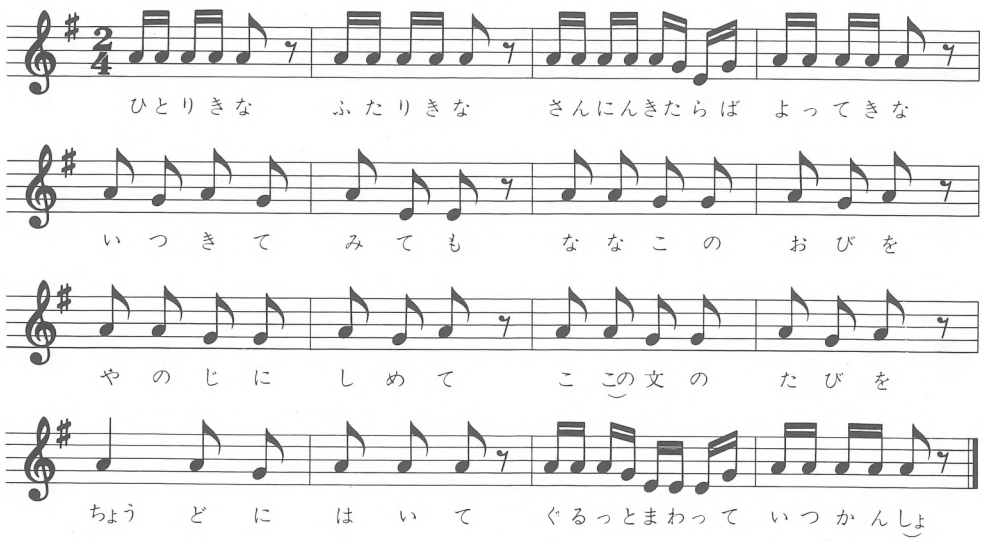
楽譜④　　**正　月　え**（まりつき）　　妙義町全地域



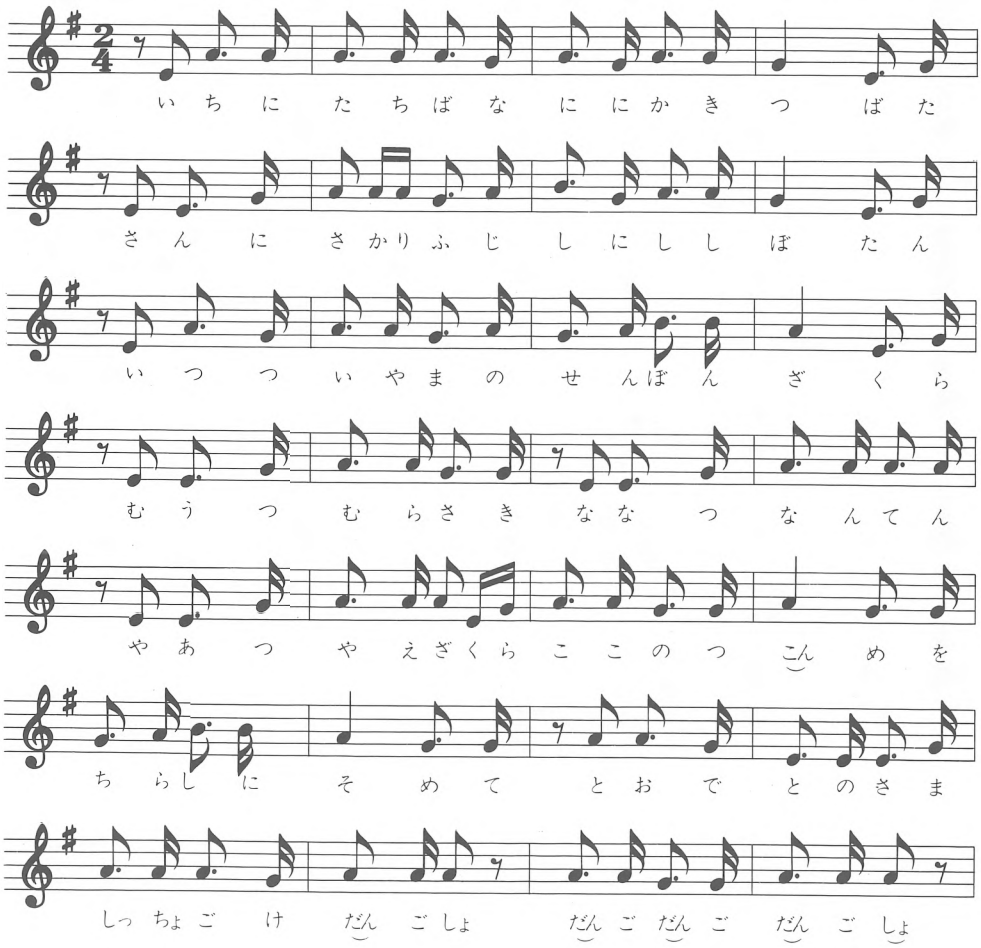
楽譜⑤　　**あんたがたどこさ**（まりつき）　　旧高田村全地域



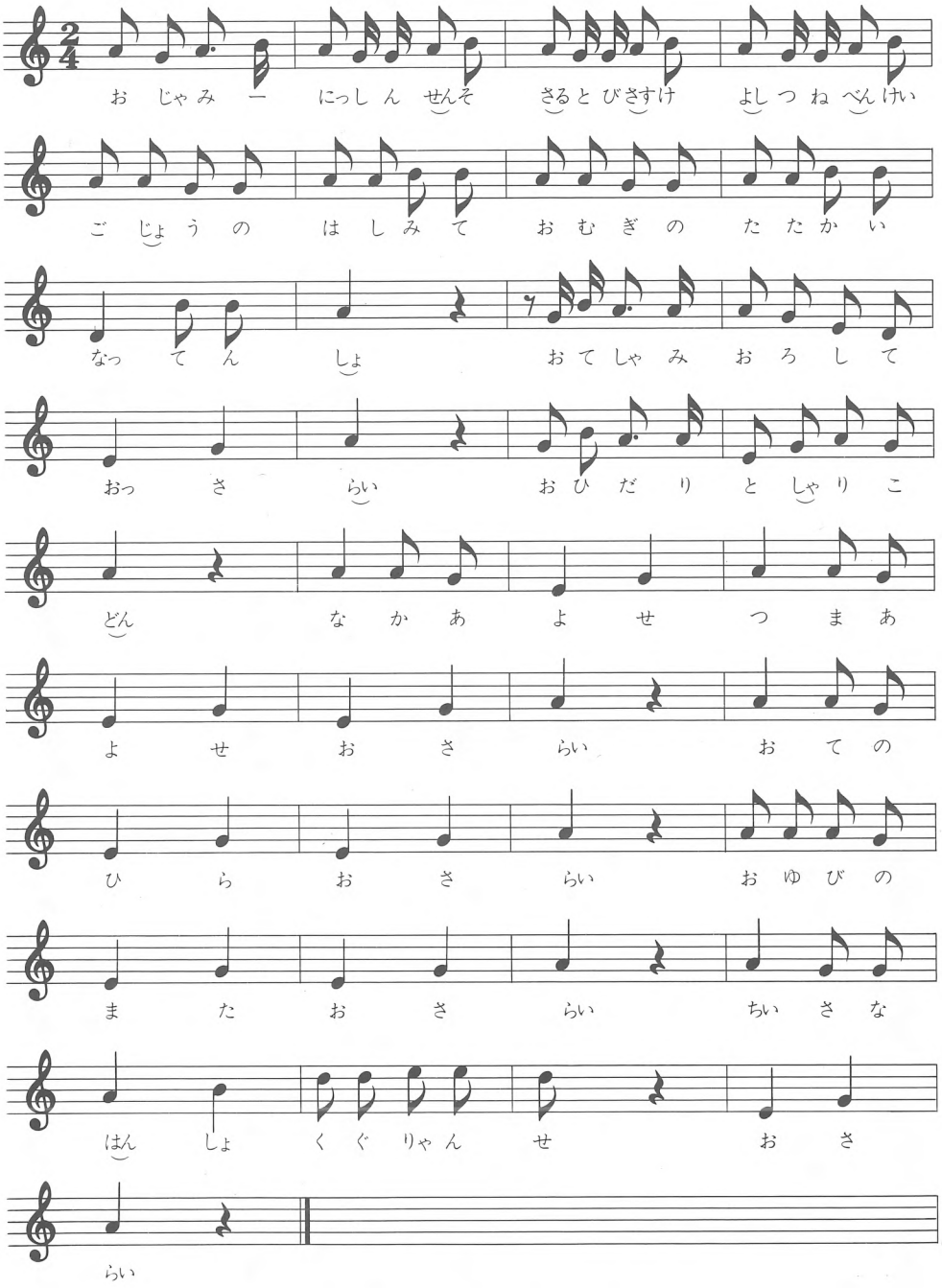
楽譜⑥　　一人来な（はねつきうた）　　妙義町全地域



楽譜⑦　　いちに橘（お手玉うた かぞえうた）　　妙義町全地域

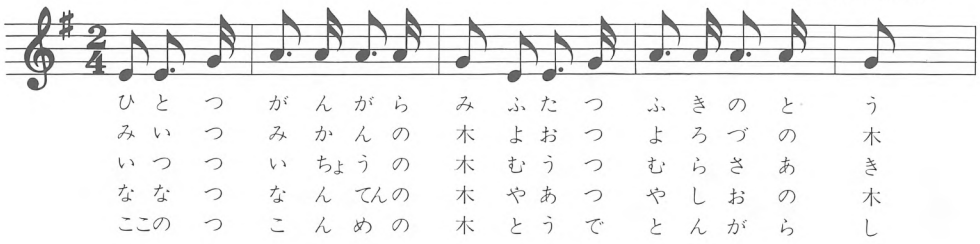


楽譜⑧　　**おじゃみ**（お手玉うた）　　妙義町全地域



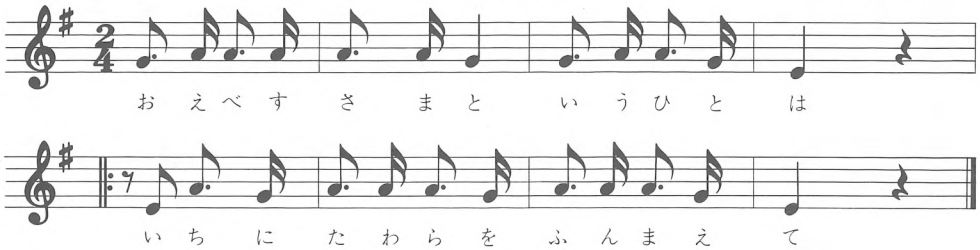
楽譜 ⑨　一つがんがらみ（お手玉うた）

妙義町全地域



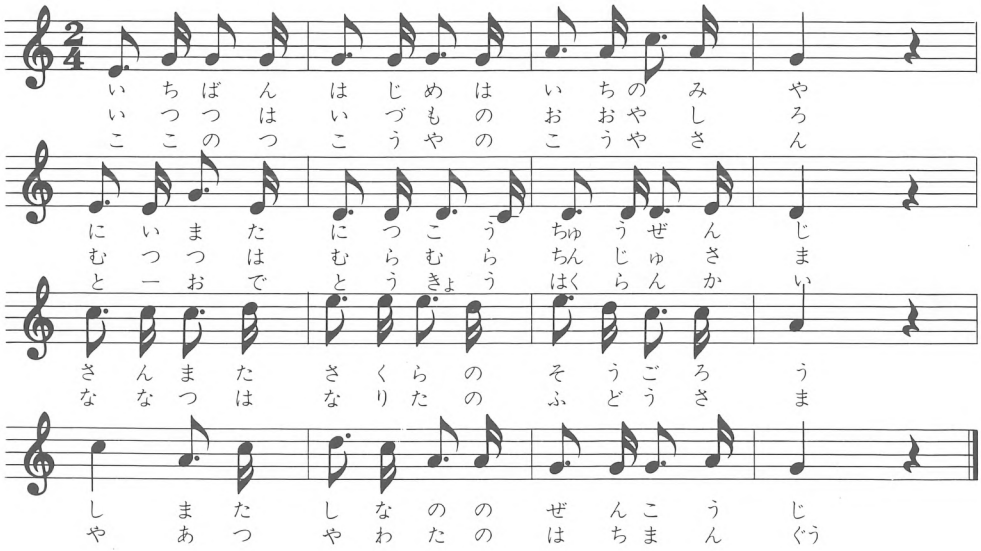
楽譜 ⑩　おえべす様

妙義町全地域

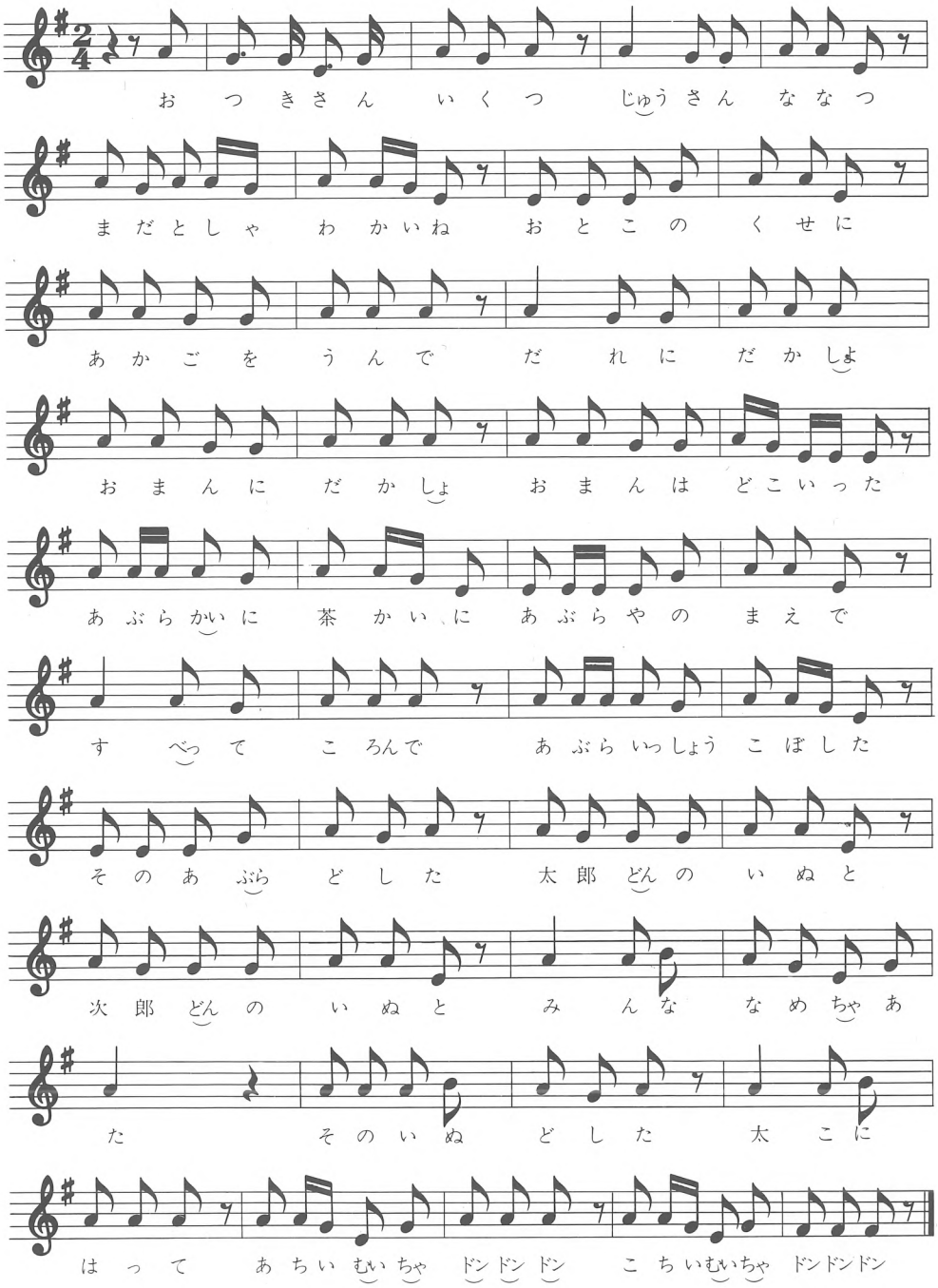


楽譜 ⑪　一番初めは一ノ宮（お手玉）

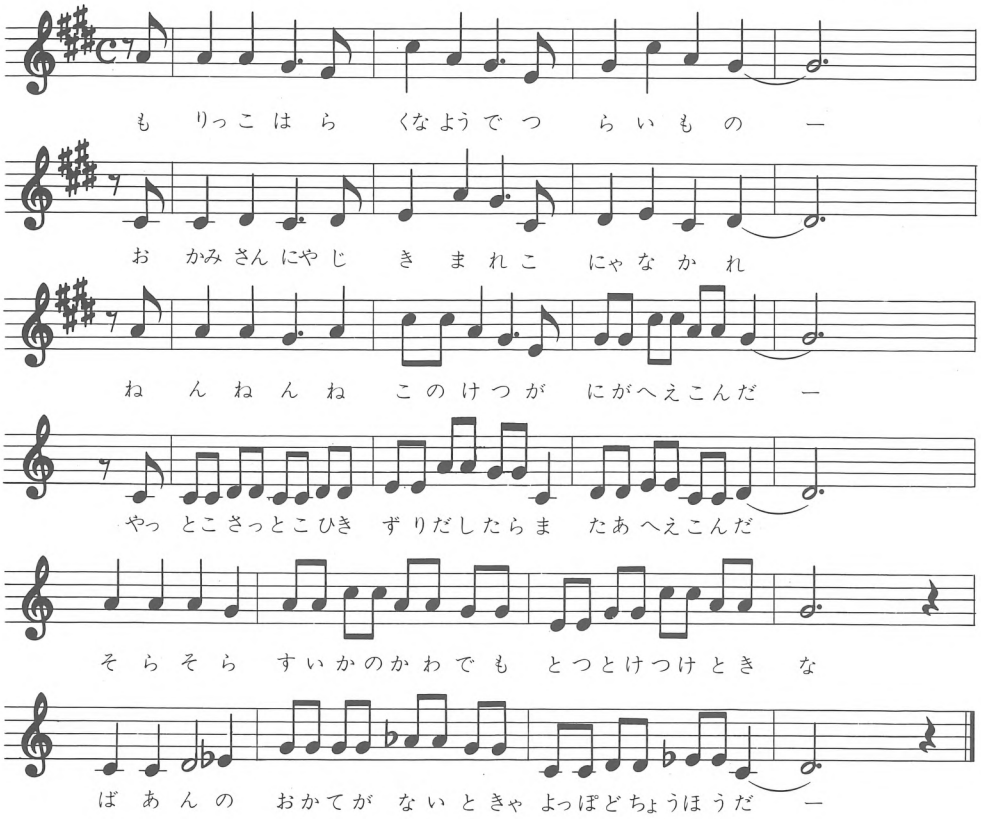
妙義町全地域



楽譜 ⑫　　お月さんいくつ（子もり あそばせうた）　　旧高田村



楽譜⑬　　子もりうた　　旧高田村全域



七、子どもの遊び

子どもの遊び　女児がひようたんおに、かくねっこ。まりつき、おひいと（お手玉）やりながら、火を燃したり、おまんまたきの真似をしたりした。おはじき、たけなんごして遊んだ。男児はたけんま、シンゴ（片足跳）かいて天秤かつぎ、かつぶしけずり、こま・ねっくい・ぱちんこなどして遊び、魚捕りではよぼりしたり、ドロッパヤ・ガラッパヤ・ギノス（めだかより少さく味がいい）などとった。

おにむしはももやくぬぎ、ならに多い。

ぼんどんぶ（あかとんぼ）・おおやまどんぶを捕って遊んだり、あぶらぜみ・みんみん・おおしんつく・ひぐらし・じいじいなど蟬とりをした。

しのでつぎ鉄砲を作り、ギンギンダマをつめる。（菅原）

竹馬　片方の竹をかついで、シンゴカイタ（片足跳をした）。天秤かつぎといった。（菅原）

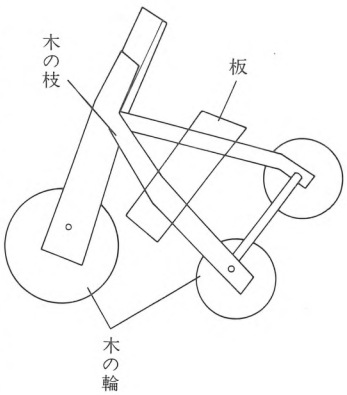
川魚　ドロッパヤ（ガラッパヤ）ギノス（めだかより小さい）がいた。（菅原）

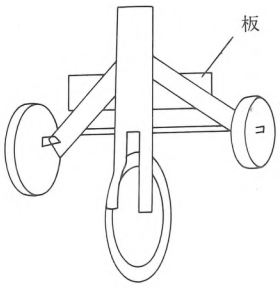
子供の遊びでは、石けり、なわとび、手作りのこま回し、竹馬があった。

こまには、ジゴマというのを手作りした。芯にかわを巻いて回して遊んだ。（妙義）

三輪車　明治時代よりあった三輪車。木の又を見つけて作った。坂を下るのに作って遊んだ。手製のもので盛んに作ったものだという。坂の多いところでおもしろかった。（妙義）

鬼ごっこ　大きな農家の表庭や神社の境内などで鬼ごっこに使う範囲を決めその中でする。鬼でない子の休み場も決めておく。大てい樹木か、抗か大石が休み場となる。チッカ（ジャンケン）で鬼を決める。





鬼が一番先につかまえた子が次の鬼になる。（上・下高田）

かくねっこ　現在のかくねっこと大体同じ。鬼を一人決めるのはチッカで決める。人数は五・六人から十人前後、隠れる範囲も大体決める。鬼が樹木か、壁などに向って両目を自分の両手で隠し、五十くらいかぞえる中で鬼でない子は物陰に隠れる。鬼に一番早く見つかった子が次の鬼、鬼に見つからないうち、鬼の体に触れると、その子は次の鬼にならなくて良い。（下高田字本村、新光寺）

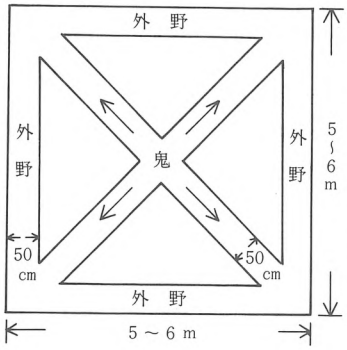
なわとび　段とびは荒なわ一間から二間の長さのものの両端を一人ずつの子が持つ。腰の高さから始まり、片手を背のびしてのばした一番上迄の高さのものを、はじめは高とびの要領でとび、高くなると、縄に向って走りながら縄の下で体を後ろに向けながら脚をあげつま先で縄をひっかける。とべなくなると縄持ちになる。

なわとびは長さ一～二間の荒縄の両端をそれぞれ持ち同じ方向にまわす。この時みなでなわとびうたをうたうのにあわせる。廻っている所へ一人飛びこみ縄をふまないようにピョンピョンリズムにあわせて飛び、うたで「出る」合図があると飛び出す。つっかえると縄持ちになる。（上・下高田）

け出し　平らな石を以前は使った。その後、け出し用のソーダガラ

スの直径四チセンくらいのものを店で売るようになった。庭の地面などにろう石で線と丸を書く。手前の丸の中へけ出しを入れ、片足せんぎょで、縁をふまないようにその丸の中へ入り、石をけ出す。次々に遠くの丸へ入れてはけり出す。全部けり出せばあがり。（下高田字本村、新光寺）

ぞうりとり　庭などに下図のような陣を描く。人数は一〇～一五人程度。チッカで鬼を一人決める。二番負けから三～四人は鬼の所に自分の片足の履物を置き片足でシンゴをかく。残りの子が鬼の所へ行って仲間の履物をとりに行く、鬼につかまると片足の履物を置いてシンゴをかく。外野には鬼は来られない。両足の履物をとられると鬼。（上・下高田）



羽根つき　手製の長さ三十チセンくらい、柄が十チセンくらいのものを板から作る。羽根はもくれをじゅの実に鶏の羽根をさして作る。

一人でつく羽根つきと、二人でつく羽根つきがある。

羽根つきは、羽根つきうたにあわせてする。（上・下高田）

ビー玉　市販のソーダガラスの直径一・五チセンくらいのものを地面にころがす。三～四人がチッカの順番でこの玉を打つ。うまく打てるとそれが自分のものになる。打ちそこなうとその場所に置き、他の誰かに打たれれば、とられてしまう。（上・下高田）

まりつき　まりの芯は半がわきの芋がらをぬき糸などでよくしばる。その上を何回もぬき糸でしばり、まりにする。割合よくはずんだ。地面などにはずませたり、上へ揚げたりした。この時、まりつきうたにあわせる。（上・下高田）

おはじき　市販のソーダガラスのものが買えないときは山の木の実（かしの実、ドングリ等）を使った。屋内でも屋外でも出来た。下へどんぐり等を片手でこすりながら勢いをつけて広げ、近い距離にあるものをはじいて自分のものにした。一度に二つ以上はじくと自分のものにならない。（上・下高田）

人形あそび　昔は人形がかってもらえなかった。もろこしの実の皮で顔の部分を作り、毛を頭髪にした。余り布や端切れを着物の部分にこしらえた。（上・下高田）

おひーと　お手玉を余り布をもらって縫った。中に小石を入れた。たまには、大豆やあずきのかすも入れた。

おひーとは一人で何個も上にあげて遊ぶのと、床や畳の上にまとめて置いたのをとって遊ぶのと二通りあった。両方共、お手玉うたにあわせて遊んだ。（上・下高田）

凧あげ　凧は竹を割って骨を作り、和紙の障子紙をはって、尾はかつ糸の紐を付けて作った。これはお正月の頃、西北の風をうけて、田んぼか川原であげて遊んだ。（上・下高田）

竹馬　高いのは塀などから乗ったが、普通四～五尺の直径三～五センチの竹を二本切って来て節の適当の所へ足ののる台として長さ二〇チセンくらい半径三～四センチくらいの薪を割ったものをゆわえつけて、そこへ足をかけ竹の上を持って歩く。（上・下高田）

メンコ　店で丸形のメンコを買って来て「本こ」をした。土の上に一人が置くと、他の子が順々にそれを裏返そうとして自分のメンコを風を出しながら地面にうちつける。はんてんを着て行くと風がよく起ってよくメンコが起きた。（上・下高田）

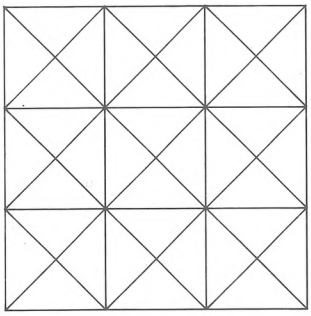
こま廻し　こまも以前は自分で作った。ずんぐりごまは、松の木を削って乳（ち）を作ってひもをかけて廻わした。

はんしょうごまは竹のやや肉の厚い所を六センチくらいの輪に切り、上下に板をぶっつけ芯に棒を入れ、ひもで廻すと良い音がした。

こまは本この時は二個以上を廻わしながらぶっつけ、はじかれたらとられた。（上・下高田）

ネっ釘　一寸五分くらいの釘を力一ぱい土にぶっつけてさす。二番の子はこの釘を倒そうと同じ長さの自分の釘を相手の釘にぶっつけて土にさす。先の釘が倒れれば後の子に取られる。（上・下高田）

サスガリ　下図のようなものを紙、または地面に描く。相手と自分の豆を互違いに並べておく。順番に一つずつ動かす。線上ならどこへ動いても良い。自分の豆が三つ直線に並べば勝ち。（上・下高田）



八、娯　楽

賭博　六〇年位前のこと。原が丁半の場所だった。雨の日は傘をさしてやっていた。知らずに村の人が草刈りに行き、見たもので口留料として一円五〇銭もらって来た。大正末頃だったという。大正七・八年頃は口留料が二十銭だった。子供でもメジロ取りに行って見たので口留料をもらった。

原は場所がよく、通行する人が見えるが他からは見えない場所で高いところだった。

ムラの中で暗号があり、首の曲げ方、上げ方ですぐに通じていたらしい。雨で仕事が出来ない時に行なった。じゃの目傘などさして行なった。「あれは甘酒屋だあ」などといってごまかしていた。

時々、手入れもあったらしかった。田畑もこれで動いたらしい。（中里）

昔は、サイコロばくちを盛んにした。バクチ場は、八幡様の境内や山の人目につかない所等場所を変えてした。バクチ打ちが来て、テラ銭をとった。金をはった。負ける率が多かった。金かしが来ていて、負けたらすぐ金を貸したり、返せない人には、證文を書かせ、良い田や畑、山などどんどんとられた。（下高田字新光寺）

草競馬　安中、磯部、富岡、下仁田などでやった。このあたりでも、とびうま（競走馬）を飼っていたうちがある。（菅原）

鉄砲馬場というのがあって、直線にして五百米位で、走って行くだけの馬場だった。年三回は競走を行なった。馬場作りもいらないので簡単に出来た。町中の人が集ったし、他の町村の人も来た。初午がはじめであった。

大正頃になって回り競馬になったが、昭和二年に二回やったのが最後だった。（古立）

稲荷さんの所の麦畑を馬場にした。直線の鉄砲馬場を作った。春麦の芽が出る頃だった。（下高田字本村）

戦前までは冬の農閑期になると芝競馬が盛んに行なわれ、馬の体力によって大関・小結などのように格を付け競争させたものである。馬場は、陽雲寺の裏や行沢の田んぼで、古立にもあった。馬場の種類には直線の鉄砲馬場と一定の場所をまわるまわり馬場があり、富岡の一の宮（貫前神社の北側）にはほとんど定設のまわり馬場があった。競馬のことはトビウマともいう。（菅原）

力わざ　一升枡の上にのぼって、両足の親指を、みごでしばって、米俵をかつぐ。力を入れても、みごを切らない。十六・七貫ある。（菅原）

遊び　昔の遊びといえば、食うこと、飲むことが中心だった。食いくらでは、キンツバがあった。当時百個も食ったが、今の二百個分にもあたる量だった。

ヨウカンを山からわざわざ買いに行って食いくらをした。酒の飲みくらもあった。これらは共同作業など村中が集まるような場合に行な

われた。

相撲もあり金品をかけて勝負した。いわし一箱とった事もある。（妙義）

九、村へ来た芸人

人形芝居　大型の人形は松井田の八城のを何回も買った。小型の豆人形は小野村藤木のものを買った。大きな家の縁側から庭に向って幕を張り台を据えて人形の舞台にした。義太夫語りは中野谷の鶴沢とり太夫や菅原出身の横尾ダイさんや高田村内にもいた。（下高田字本村、新光寺）

八城の人形を村で買って演じた。（下高田）

芝居　いろいろな所から芝居の一座が来た。終戦後まで来たのは黒岩歌舞伎だった。

旅廻わりの役者の萩原ちようさん一家が仲間を連れて来ると、村内の人も一座に混じって芝居をした。近くの村に、素人で半気違いくらい芝居好きの人がいた。芝居がかかると来て混じって芝居をした。出しものは、お軽勘平、安部宗任、千代萩、お菊由来記、妖婦伝、二十四孝、阿波鳴門など。（上・下高田）

春駒　お正月に馬の首の部分を形どって作ったものを左手に入れ、右手で手綱を引きながら、春駒のうたをうたった。これは、お蚕のよく当るように、との予祝である。（上・下高田）

俵ころがし　俵みたいなものを持って来て、家の中へころがし込み、ついている紐を引いて俵を戻し「大黒様という方は一に宝をふんまえて……」などという歌をうたった。（上・下高田）

祭文　坊さんみたいな服装で、手に錫杖みたいで上に丸い蚊帳のつり金みたいなものがついたものを振りながら、人の家のトボグチの前に立って、「デロレン　デロレン」と唱え、次に一つの物語みたいなものをうたった。（上・下高田）

獅子　神楽獅子のような大きな頭に布のついたものを持って、一軒一軒訪れ、トボグチの外から内へ向ってこの獅子の口をポンと開けてしめる。つい先頃まで来ていた。どこから来たのかわからない。（上・下高田）

ゴゼ　大正九年頃まで来ていた。電燈のついていない頃のことである。この村には大正九年に丹生電気がともった。電柱を立てるオテンマに十日も二十日も出たものであった。ゴゼは昼間は門付をし、夜は懇意な家を宿とし、そこで唄った。（上高田）

越後からのゴゼが二～三人一組できた。泊るのは懇意な家で決まっていて、昼間は門付けをし、夜は宿で歌や語り物をうたった。大正初めのころである。（下高田）

越後から来たらしい。盲目の女の人が三～四人一かたまりになって、中に一人目あきがいて手引きをして来る。

宿は決まっている。本村の堀田さんの家などである。

演目は多かったが今覚えているのは「葛の葉子別れ」くらいである。（上・下高田）

猿廻し　えぼしとちゃんを着けた猿が、飼主の言葉に反応した。一軒一軒家を廻った。（上・下高田）

講談　新光寺に講釈師がどこからか来てしばらく住んでいた。弟子になる人が何人か本村、新光寺にいた。その時の講談本がある。

侠客ものや野狐などを口演した。（上・下高田）

人の一生

はじめに

鏑川の支流高田川が妙義山に発し、その流域の旧高田村と旧妙義町が昭和三十年に合併した町であるが、旧両町村は、前者が富岡市、安中市に近く、後者が松井田町、下仁田町に近い文化・経済圏の中にあった。従って民俗の中にもその影響が見うけられ、その間に地域的相違があるのも自然であろう。以下通過儀礼について概観する。

妊婦が火事、不祝儀に会うと胎児にアザができるということは、県下ほとんどの地域でいわれ忌まれているが、死者を見ると黒アザができ、このアザは死者の墓土でなでることによって除去できるということは、死者の「生まれ代り」の場合の呪術と相似ているが、その間に何か関連があるのであろうか。

安産信仰はこれまでの調査地域より淡白のようであった。この地域は県内でも産泰信仰は割合に淡く、町には勧請されておらず、女性のなかには聞いたことがないとさえいう。そして一部では高崎の産泰様、小祝神社まで出かけている。また水沢観音をお産の神としているのも珍らしい。地域的なものとしては、上高田字下十二の二十二夜様信仰がみられる。下高田から隣の下十二の二十二夜様までお詣りに行ったという反面で、下高田ではその碑が在りながら老女のなかには、それが何であるか認識せずまた信仰もない部落さえあったのは、時代の変化を知らされたものである。子授けについては、碓氷・甘楽両郡に広い信仰圏をもつ小桑原（旧甘楽郡小野村―現富岡市―）の観音信仰（仏母観音ともいう）が盛んである。ここの本尊は十一面観音、納められている石仏を借りて途中寄り道をせずに真直ぐ自宅に帰り、拝み抱いて寝ると子供が授かるといわれ、願かなえば二体にして納める。また子供を恵まれない人は底のあるひしゃく、安産を祈願する人は底抜けひしゃくを供えることもしている。昔は拝みに来た人が赤布（赤褌）を一枚ずつ進ぜた。その墨書からみると近在のほか磯部、安中、多野郡新町、高崎、桐生、東京と広範囲にわたっている。

お産はコンニチ様に罰を当てられないようにと、うす暗いナンドで産んだり、デエの畳をはいでムシロ、ボロ布を敷き、ヌカ袋、布団、ヤグラによりかかっての坐産で、トリアゲバアサンに取り上げてもらった。後産の始末は、玄関・トボグチ・部落で決められた場所・アキの方向等に埋めた。これらをみると人によく踏まれる所であって、相反する意味づけをしているようである。そして後産を水引で結えメンパのシッタを半分抜いたのを一緒に埋めるというのは、何を意味するのであろうか。

産後の食事は、ここでも以前はひどいものであった。主食はお粥、副食はカツオブシ味噌はいい方で多くの制限があった。力米のことは一部で聞かれたのみであった。県下ほとんどの地域にあった習俗だが、既に失われてしまったようである。

ウブタテゴハンは一升たいて神棚・先祖様・オボスナ様に供え、近所の人、出産に立会った人、親戚の人など多くの人にたべてもらう。こうした共食の習俗はあるが、赤城南麓一帯にみられるウブタテメシの膳に石をのせることは、この地域には全然みられない。

生れて初めて外に出る儀礼としてのセッチンマイリは、生後三日目と七日目の地域がある。お詣りして便所を借りた家と嫁の実家などをお茶よびする。先ず地縁的血縁的に身近い人に承認してもらうのであろう。そしてお七夜の命名を「セッチンメエリに間に合うように」（下高田）というのは、これで神詣りに「名」をもったいわば生れて一人前になる資格の一つを具えてということであろうか。

産婦は産忌みとして別火生活をしなければならないが、産婦の用いる別火を一挟みイロリに雑ぜることで、この火の忌みが解かれたとし、ヒアガリといっている。安中市秋間地方と同様である。産後二十一日、この間部屋から出られず、橋と川は渡るなといわれ、もし止むを得ず外に出るときは、頭に手拭をのせた。そして一般には二十一日で産忌みがあける。お宮詣りは碓氷郡、安中市、甘楽郡、富岡市では男児三十一日女児四十一日に行うのが多い。妙義地区もその例である。この日母親の実家から贈られた広袖、紋付の産着を着て詣り、赤飯をふかして供え、途中会った人に頒けたり、親戚をよんで共食する。またこの頃近所の女衆を招き赤坊を披露し仲間入りをするわけである。

初誕生には、日向では仲人が着物一式つくって贈った。上高田ではこの日仲人が呼ばれて御馳走となり、これを「仲人との別れ」という。おそらく夫婦の結婚に仲人した人も、初子が生れると仲人としての役が一先ず終ったとするケジメをあらわすものとみられる。その他の誕生祝いの儀式は他の地区と概ね同様で、一升餅を風呂敷に包み、数を次第にふやして背負えなくなるまで背負わせたり、尻に餅をぶつけることは、単に成長段階の祝いだけでなく、鍛練すること、それによって子供を丈夫に育てようとする周囲の者の願望がある。

二歳になると妙義神社に詣る「二つ子詣り」の習俗が碓氷・甘楽一円には古くからあった。これは火伏せ信仰と関連があるようであるが、他に類例がみられず、何故二歳なのか判らないが、三歳位までチン毛を残して坊主頭にし、転んだときに神様に起してもらうこと、七つ坊主などのように、あるいは初誕生の次の年齢上の区切りの儀式の一つかもしれない。

厄年の人の厄落しに、富岡市上高瀬の北向観音（祭日は一月十八日）に詣った。なかには長野県別所の北向観音まで行く人もある。

青年会には十五歳～三十五歳の者が入っており、会では梅林をもっていて、その収入を運営費としていた。会としては夜番を行ったり、村民の結婚式に提灯をもって警戒役をするなど、以前の若衆組の名残りを淡いながらもとどめており、若衆の夜遊びも隣接町村から四キロ四方位までで、なかには旧碓氷郡九十九村まで出掛けたものもあったが、富岡にはあまり行かなかったという。

結婚は村内か村外でも隣接町村同士で行うのが一般で、以前は従兄弟姉妹というのが割合にあった。経済的心理的理由によるもので一方には親戚が増加しないねらいがあった。そこには親の意見が大きく働き、本人の意志は全然考慮されていないのが普通であった。

嫁が婚家に入るとき青竹またはタイマツ（麦わらあるいはオガラを燃したもの）を消したのをまたぎ、オガラの鳥居をくぐり、姑と親子盃（カドサカズキ）を交す。お待女房は既婚の婦人または夫婦に、嫁を引き立てる役として頼む。中宿で嫁を待ち受け、トリムスビの席にも立会った。以前は式の晩に嫁方の兄姉叔母あるいは仲人が、ミトドケ役として泊った。そして翌日は里帰り前に嫁のお茶よびをして仲間入りをするが、里帰りから帰ってオミヤゲを贈って仲間入りをした。また新夫婦はケイヤク、石尊行などのときの仲間入りより広範囲の人々に挨拶して仲間入りする。一方嫁は天神講のとき挨拶して女衆の仲間入りをした。こうした幾重もの仲間入りは、特に新に村に来た嫁にとっては大切なことであった。

結婚後嫁が実家に帰るのは、儀礼的な意味とともに骨休みとしての意味を持っている。高田地区では八朔節句について聞かれなかった。聞いたこともなくしたこともないという女性がいた。そのなかでショ

ウボン、秋上げの習俗は行われていたという。

人の死を予知するシラセは不吉なことで、而も科学的でないことが多いが、各地概ね同様なことがいわれている。そして死に頻した人の蘇生を願うこともまた人情で、お百度詣り、魂呼びが行われている。死者の枕かえしをするとき新しい俵を敷く例は注目すべきものであろう。死の穢を忌む意味で枕団子（オダンス）枕飯、湯灌の湯（湯灌をモクヨクといい別火で庭でわかす）などすべて別火で煮る。また葬家ではカマドが使えず、他家で食事をつくってもらい、葬後に炉の灰を新しくするなど、その忌みは強く守られている。なお、一七日のときのオダンスは両面から押して凹みをつけ、葬儀の際のものとは異っていた。葬儀の際のつきあいをみると、大久保地区では村中で手伝うが、その中にウチジュウ（男女二人出る）とホーベイ（一戸一人出る）のつきあいがあった。また旧高田村では葬家に近い組が受付、勝手元、内回りを分担し、他の組がツゲ、穴掘りを分担する。八木連、諸戸、菅原では村中で四人ずつ順番に穴掘りを分担し、近親者のときは番をくりこしてもらうことになっている。なお一般に穴掘り役に対する特別な処遇はみられない。

出棺に先立って僧侶の読経が始まると、組の者が鉦、太鼓をうって村中を廻り知らせる。これをシラセといい、この合図で村人は見送ってくれる。一方オクリ念仏を受けながら墓地に行き、その念仏組は帰ってからも唱えてくれた。なお棺はデエの縁側からオガラの鳥居をくぐって出る。そして寺の庭、墓地、あるいは川原、インドウバで左回りに三回回って読経、葬儀が行われ、墓上にはメッパジキが立てられて、四十九日までそのまま置かれた。翌日は寺まいり、ゴクロウ呼びである。この日餅をつき念仏を唱え、呼ばれていく人は小麦粉一升を鉢に入れて持って行き、施主は餅（念仏玉）を入れて返し、これをオハチ返しといった。念仏玉というのはこのとき念仏を唱えたことによるものであろう。大久保部落では前述の「ホーベイ」は葬後の墓詣りや四十九日の供養には参加しないし、香典も「ウチジュウ」の三分の一位であり、このゴクロウヨビに呼ばれるのは、「ウチジュウ」のつきあいの家である。これらをみると一七日と四十九日の供養念仏が葬儀の翌日に行われるようになって、両者の習俗が一つになってしまったきらいがうかがわれる。四十九日は忌あけであって儀式の一つの折目であり、餅をついて近所親戚に配る。同じく餅をついても配る数は不幸が偶数、祝儀は奇数である。死者の魂はこの餅がつかれるまで家の棟を離れないといい、これまでは祝餅はつけないことになっている。そして墓参に際してのオダンスも一七日のとき同様に、上下から押して凹みをつけたもので、もらった人は家に持帰って仏檀に供えたのち家族で食べる。こうした忌明けに対して、四十九日の頃葬式のあった家の全家族を近親者が家毎に呼んでごちそうした。これをキアケヨビといった。九州の一部にヒアキといってこのような習俗があるが、いかなる意味をもつのかもっと類例を調査したい。

親が死ぬと施主が中心になって葬儀を行うが、その経費は兄弟姉妹が出し合う。この子供達が分担するのをハリキンという。昔は米一駄分といったという。吾妻郡高山村でいうオンシン米と同様である。負担する金額に差はあるが、こうした場合施主は気楽でナベカシゴフコウという言葉さえあった。そして位牌分けのとき、位牌に対する線香代といって、ハリキンの一部は返したものである。一方親が死ぬと近所の人がお見舞をする。あるいは施主以外の子供達にも香典を出すのをシュウトミマイという。また嫁に来た者が実家の御不幸に行って帰ると、近所の女衆がお見舞にくるのをヒアケという。このように親の葬儀を兄弟姉妹が助けあって行うことは、本県では利根郡、吾妻郡、多野郡などにみられ、類型は甘楽郡南牧村にもあり、シュウトミマイは富岡市周辺でも聞かれる。ハリキン、シュウトミマイ、ヒアケは、甘楽町秋畑、藤岡市上日野でいう兄弟別れとともに、位牌分けに関連がある。これらは葬儀の基本的意味を解明する一つの手掛りを秘めて

いると考えられるとともに、北毛山村にみられる習俗が、多少の変化はあるが離れて西南毛にも存在することは興味深いことである。

三十三年忌の別れ塔婆、エダ塔婆、ステ塔婆（木はシデ、モミ、ナラ、杉、松、エゴと種々である。）を墓に立てるのに対し、上高田、山下などでは三本辻に立てるのが注目される。これが仏事の最後で先祖の仲間入りをするといい、また三十三年忌を終えた霊は屋敷を守る神となるという（新光寺）のは、屋敷神になることであろう。ここでもこれが自然石で祭られているが、富周周辺では若宮八幡といわれて、屋敷神同様に祀られている。こうしたところから屋敷神、若宮八幡、おしりょう様の関連がみられるかもしれない。（池田秀夫）

一、誕　生

㈠　妊　娠・出　産

妊娠告知　一ばん始めに旦那様に話し次に姑に話す。（諸戸字日向）

ツワリの薬　ツワリがひどい時、コンロの土でもいい、土ボウロクの欠けた土でもいいが少し水に入れて飲むと治る。食物が落着かずゲエゲエする時、一度のんですぐ治った。

次のお産の時も飲んだが、二回ともすぐ治った。不思議だった。（諸戸字日向）

妊娠時の禁忌　妊娠中に火事を見ると胎児に赤あざ、葬式をみると黒あざが出来るのでこれを防ぐ為懐に鏡を入れておけ、といった。

兎の肉を食べると三つ口の子が生まれる。

柿の木の下をくぐってはいけない。

しりもちをついてはいけない。

高い処のものをとってはいけない。乳腺が切れるからなどいわれた。（下高田字本村、新光寺）

妊娠中に火事にあうと、子どもに赤い痣が出来る。不祝儀にあうと青い痣が出来る。出来ないようにするために、妊娠している時は、いつ会うか判らないからいつでも鏡の小さいのを、袋に入れておいた。（菅原）

妊娠中火事を見ると腹の子に赤アザができる。死人を見ると黒いアザができる。然しその人の墓の土をとってきてアザをなでるととれるという。妊婦はいつでも鏡を帯の間へ入れておけ、と言われたので小さい鏡をいつでも帯の間へ入れておいた。こうすれば悪いものを見てもアザが防げるといった。（諸戸字日向）

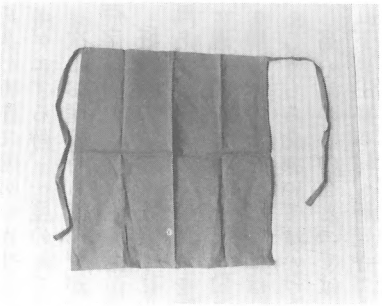
妊娠中の食物　辛いものはいけない。兎の肉を食べてはいけない。三つ口になるといわれる。（菅原）

五カ月前は辛いものは悪い。タコ、生イカは悪い。イカなど猫にくれるとテキメンに流産する。イカの生寿司を食べたあと流産したことがあった。（諸戸字日向）

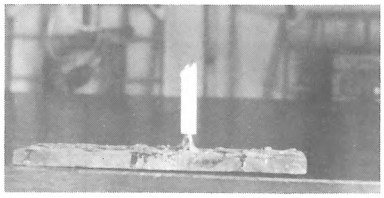
妊娠と夫　妊娠中夫は死んだんぼをかついではいけない。その子が弱い。（諸戸字日向）

安産祈願　下十二の二十二夜様は、お産の神様だといわれ、女の人たちにおがまれている。安産の願かけをする妊婦は、二十二夜様からオコシ（腰巻の恰好を型どった小さなもので、色は赤と白とある）とロウソクを借りてくる。オコシは妊婦が肌につけているか、一度肌につけてから神棚にあげておく。ロウソクは燃やし残りのもので、これが燃えきらない位の短い時間に、お産が軽くすむようにと借りてくる。お産が済むと、オコシも、ロウソクも新しいものに、借りてきた古いものをそえて返す。

祭りは一年に春と秋の二回行う。気持の合った人とか、自分の嫁がお産をしそうな母などが集まった。講というほどのものではなく、特別な世話役はいなかった。（むかし、世話をした人がいたそうであるが、亡くなってしまってから、そのままになっているという）今ではお産



安産祈願のオコシ（下十二）
安産祈願をする人は、このオコシを二十二夜様から借り、返す時は新調したものを添え、２枚にして納めた。色は白と赤とある。
（撮影　金子緯一郎）



二十二夜様にそなえたロウソク（下十二）安産祈願をする人は、このロウソクの燃えさしを二十二夜様から借りてくる。（撮影　金子緯一郎）

の済んだ人とか、お産になる嫁さんとか、その母親などが話し出してみんなに集ってもらっている。場所は、以前は二十二夜様のまつってある前で行った。今は公会堂でやる。オガンショハタシ（お願をかけ、果した人）の人がお礼に、赤飯、煮しめなど、好き好きのものを持ち寄る。このことを「モヤッテ、話し合って持ち寄る」などといっている。また、会費もいくらか出し合った。二十二夜様の掛軸があり、ロウソクをともし、線香をあげて、念仏を唱えた。このロウソクを妊婦は借りるわけである。（上高田字下十二）

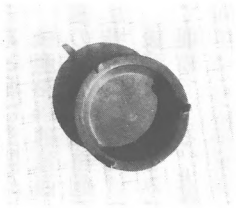
二十二夜様の念仏

きみょうちょうらい　ありがたや
二十二夜まち　まつ人は
しみづあらため　身をきよめ
心の悪心持たずして
しんじんけんごの　身をもちて
ぼさつを拝し　給うべし
によにん　ぼさつの　ごがんには
あまた　女人の　身代りに
血の池ぢごくへ　落ちるおり
すでに入らんとしたまえば
あらありがたや　ふしぎやな
池よりれんげが　現われて
左右のおん手で　みどり子を
いだきあげさせ　給うべし
右のおん手で　招きつつ
われを念ずる　人なれば
血しやく　けっかい　血のやまい
長血　白血のやまいでも
くすりこうのう　ましまさば
たちまち快気　いたすべし
子のない　女人に　子をさずけ

二十二夜様（下十二）
かつては、この前で祭りが行われた。柱には安産祈願のオコシが巻いてある。
（撮影　金子緯一郎）

二十二夜様の掛軸（下十二）
（撮影　金子緯一郎）

産前　産後の大なんも
安産にして　えさすべし（上高田）



念仏の鉦（下高田）
（銘　西村和泉守）
（撮影　池田秀夫）

念仏の鉦（下高田）
（撮影　池田秀夫）

二夜様はお産の神様で拝むといい子が生れ丈夫に育つといった。（日向）

安産のお参りに上の坂の北向観音に行った。（下高田本村）

水沢観音がお産の神だといわれた。産泰様のお札を帯にはさむ。町役場の北、下十二のお堂で二夜様の念仏を唱えた。箒は神様だからまたぐなといわれた。（下高田）

産泰神社の掛軸（下高田）
（撮影　池田秀夫）

高崎市石原の産泰様にオガンショかけ、お守り、護符をもらってきた。（下高田）

東京へ行った人が水天宮様のおふだを受けてきて、お土産にもらうと神棚に上げといて、お産の時にのむ。そうすると赤ン坊がおふだを握って生れてくると言った。そのくらいご利益があるということだ。（日向）

子さづけ　子供の生れない人は小野の小桑観音にお詣りして、そこの石仏を借りてきて拝み、抱いて寝ると子供が生れるという。（下高田）

腹帯　自分でさらしを買ってきて、戌の日にした。犬は産が軽いからという。帯は大事にしまっておいて、次のに使うこともある。腹帯をする時に祝はしない。（菅原）

妊娠すると夫や母親に先ず知らせるが、胎児が動き始める五カ月の戌の日に、サラシを用意しておき、産婆が巻いてくれた。（下高田）

六尺の晒を旦那（夫）に一度フンドシとしてかけてもらったのを腹帯に巻くとお産が軽いと言った。旦那がまたぐ真似をしてからしめた。腹帯は五カ月の犬の日にしめる。（諸戸字日向）

お産部屋　ふだん寝ている所でする。うす暗いナンドでした。コンニチ様にバチを当てられるから暗い所がいいらしい。（諸戸字日向）

出産　昔は初子の時は実家へ帰った。坐産で、デーの部屋の畳をはぎ、むしろの上にサンザ紙やボロ布を敷いた。サンシはやぐらの前でやぐらにつかまって産んだ。トリアゲバーが来た。明戸のおあきさんがうまかった。大正十年頃には産婆で宇田の諏訪部さん、一ノ宮の市川さんが来た。

へその緒を巻いた子はケサガケといって難産だった。名にケサという字をつけることが多かった。（下高田）

おりものが始まっていよいよ生れそうだと思うと取上げ婆さんを頼んでもらう。ここの取上げ婆さんは、くるより早くロクサン除けをしてくれた。このよけをしておくとロクサンでなくてもお産が軽いと言い、仏様に線香を上げておがんでくれた。背中をなでたり、腹をさすったりする。（諸戸字日向）

畳を一枚上げてシビを敷いて、ボロを敷いた上でうんだ。ヌカ俵を回りに置いたり、ふとんを丸めておいたのによりかかって産んだ。坐産で足なんかのばすとおこられた。（諸戸字木戸）

四人産んだがみな坐産だった。ヒザを立てて前の方へうみ出した。（諸戸字日向）

よりかかるのではなく、うつぶせの姿勢で生んだ。産後の食事はカツブシミソで、いけないといわれたのは肉、油物、塩物など。オボタ

テメシはあとでおかゆにしてたべた。（上高田）

安産のお願しをするところはない。お産の時、立合う神様も聞いたことがない。お便所をきれいにすると、いい赤ちゃんが出来る。昔は坐って、藁束につかまってした。寝たんじゃ力が入らない。（菅原）

以前はコトリバアサンがいて、産婦は藁束を横において或はフトンを四つ折にしてそれによりかかって産んだ。そのとき夫が臼を背負って或は裸で家の周りを回るということは聞いたことがある。井戸のツルベのアカを家族にとってもらって、これを飲むと生れるという。（下高田）

一人でお産をして一人で取上げる人もいたそうだ。腹が痛くなるとタライから着せるものから塩（きよめに使う）から全部用意しておいてうむ。うみ終ると自分の体の始末をしておいて、赤子を取上げる。無理をしたためか、産後の肥立ちが悪く死んだ人もいたそうだ。（諸戸字日向）

後産　後産が出ない時はつるべ井戸の桶のふちについた水アカを少しとって飲ませると出る。（諸戸字日向）

後産が出たら太ももにしばっておく。これが出ないで上ると死ぬから、胸の方に上らぬよう腹帯を上の方へあげてきつくしめとけと言った。（諸戸字日向）

あと産は玄関やトボ口に埋める。人が踏むほどいい。（菅原）

後産を以前は西山（山下部落の東）にある燈籠の下に埋めた。今はその場所は稚蚕飼育の共同桑園となっている。久原では墓の隅の決った場所に埋けた。（下高田）

後産は方位をみて鬼門ではないアキのカタの遠くの方へ持って行って埋めてくる。犬に掘られないよう土を深く掘ってうめる。（諸戸字日向）

後産は暦を見て、アキのカタの方向の遠い所へ持って行ってうめた。水引で真中をしばって、メンパのシッタを半分抜いたのを一緒に入れてうめる。（諸戸字木戸・久保）

ヘソノ　男は筆のサヤを割って切った。女はハサミで切る。ヘソノは昔は長く切った。取上げばあさんが左手の四本指に三回まきつけて、残ったのを切った。だからいくらも切る分がなかった。ヘソノが長いからお湯を浴びせる時に大変だった。ヘソノは暖かくしておくと四、五日でもげる。その時泣くので「ヘソノでももげるだんべ」なんて言って、晒でしばった所を見るともげている。もげたヘソノは乾してとっておく。その子の体のくくりだから大事にとっておき、九死一生という時にけずってのませる。嫁に行く時に持たせてやり、死んだ時に棺桶に入れる。（諸戸字木戸・久保）

産後の食事　三日しないとミソ汁もだめだった。おかいにかつぶしミソでも食えれば上等だった。サツマはいいと小さいのをオコジュハンにもらえる。フのおつゆもよかった。（諸戸字木戸・久保）

ゴマあえは目がしゃばるから悪い（くしゃくしゃする）。青物（野菜）は赤子が青いウンコをするから悪い。（諸戸字木戸・久保）

産後十五日間はどうしても寝ていなければいけない。この間はお粥に梅干で、カツオ節味噌はいい方だった。甘いものや小豆は乳が出ないからいけないといい、餅やウドンは乳がよく出るといわれた。火を使ったり煮たきするのは普段と同じ場所で、同様であった。（下高田）

二十一日間おかゆだった。かつぶしにフのミソ汁、またはウバ貝（ミソ汁のだし）か貝のへり、かつぶしミソでもあれば上等で、おかゆも初めは塩だけで食べる。二、三日目からかつぶしが食べられる。おかいは毎日煮るのは大変だから、時期にもよるが三日分ぐらい一度に煮ておいて、一回分を小鍋にとって暖めて食べる。（諸戸字日向）

おかゆ一杯きり食べられなくて腹がへって目が回りそうだった。姑が居なくなってからは何でも食べた。（行沢）

お産と夫　はじめのお産の時家に居ると、つぎつぎくせになるから、はじめは外へ出てろ、などと言った。男は産部屋へ入るなと言った。

（諸戸字日向）

産見舞　近所づきあいで、かんづめとふ（麩）を持って行く。（菅原）

里からの産見舞として、イワシのカンづめとか麩、水アメなど買ってきてくれる。（諸戸字日向）

お産祝　布を八尺とか一丈もらったりやったりした。二軒か三軒でもよって（相談して）反物を一反もらうこともある。また輪麩、きり麩、卵麩などももらう。親せきはカツブシなどを贈った。（諸戸字日向）

お産祝のお返し　赤飯をふかし重箱に一つ返した。南天の葉をのせるが、これはフタにくっつかないし南天の葉は毒消しになると言った。そのお返しは豆を入れたり真綿を入れて返す。真綿は白髪になるまで丈夫のように、という。（諸戸字日向）

㈡　生　児　儀　礼

産湯　産湯を沸かす時は、始めの一回は赤子がウルシにかせないよう、塗りもののおわんかけを燃した。無ければハシでもいい。魔除けになる。（諸戸字日向）

うぶ湯はとりあげ婆さんが入れる。うぶ湯は日向にまいてはいけない。デーの部屋の畳をはいで床下に捨てた。（下高田字本村、新光寺）

ウブタテのごはん　お産がすむとウブタテのごはんをたく。一生マメに暮せるよう一升たいて近所の人が大人数でもらって食べる。大暮しができるようにという。それも始めての子の時ぐらいである。（日向）

ウブタテゴハンを生れた直後に炊き、出産に立ち会った人、親戚の人にたべてもらう。（下高田）

セッチンマイリ　生後三日目にする。ヒタイに犬の字を書いて自分の家と近所の家二軒の便所をかりておがんでくる。豆煎りとオサゴを一諸に紙に包み、おひねりにして持って上げておがむ。おまいりした家では真綿を一枚、丸く少し帽子のような形を作って赤児の頭にのせてくれる。（諸戸字木戸・久保）

セッチンまいりを一週間目にする。ヒタイに犬の字を書き、自分の家の便所と、近所の二軒の家の便所をかりておがむ。豆を煎って紙に包みオヒネリにして持って行って上げる。「セッチンをかして下さい。」と言いあがる所に置く。そのあとお茶を呼ぶ。便所をかりた家二軒と嫁の里などほんとに近い親戚がよばれる。イモの煮つけ、貝のへり、カンピョウでも煮てお茶を出すくらいだった。（諸戸字日向）

セッチンマイリは子どもの額に墨で×印をつけ、自分のうちと、隣三軒の便所をお参りする。（菅原）

お七夜　年寄りが生児を抱いて自家と両隣の便所に、豆、オサゴを白い紙に包んで供える。セッチンメエリという。また近所の人や出産祝い、お見舞をもらった人を呼んでお祝いをする。この日名前をつける。いくつか候補名を紙に書いて小さい子供に拾わせ、そのなかから命名する家もある。セッチンメエリに間に合うように名をつける。紙に書いて神棚に張るものだともいう。（下高田）

出産して七日目を、ヒトヒチヤといった。この日に赤んぼうの頭の毛を剃ってやった。（八木連字大久保）

命名　お七夜に生児の名前をつけた。よいと思う名前を三つえらんで、紙に書き、ますの中に入れて神棚にあげておく。子どもに、ますの中に入れてある名前の紙を、くじをひくように、ひかせた。ひいた名前が、生児の名前となる。決まると紙に名前を書いて神棚に張った。（上高田字下十二）

姓名学の本があって、それを見てつけた。菅原神社へ行って、いい名をつけてもらった。その年によって、いい名を選んでつけてくれた。子どもが多いので、とめとつけたが、そのあとに出来た人もいる。あぐり、けさという名はない。亀吉だが、丈夫に育つように、おかめさんと、女のようにいった。

お七夜に、名を書いた紙を、神棚に下げる。特に名づけ祝としてはない。この日は赤飯をふかし、豆をいる。（菅原）

ヒアガリ　産婦は産後、十一日目まで、家族と火を別にしていた。コンロや鍋など、家族と別なものを使っていた。（上高田字下十二）

子どもを生んで、ふつう二十一日目に、火アガリとなる。それまでサンシ（産婦）は家族とは別の火を使って、オカユなどを煮て食べていた。この火を「ひとっぱさみ」はさんで家のイロリにまぜた。これは姑がやってくれた。これを火アガリといい、この日からサンシは、家族なみの、ふつうの生活にもどれた。またこの日を「トコアゲ」ともいっている。（八木連字大久保）

床上げ　カタイ家では二十一日間はお産した部屋から出さなかった。ごはんもその間運んでもらったそうだ。（行沢）

二十一日間は橋と川を渡るな、と言った。また外へ出る時はタダ頭で出るな。何か頭にのっけて出ろといい、テノゴイ（手拭い）をのせて出たものだ。（諸戸字木戸・久保）

産の汚れ物　みな裏の日の当らない所へ干した。二十一日間は干したら、洗濯物の上にワラを一本のっけとけと言った。すぐ落ちても、ただのっけておけばいい。（諸戸字日向）

お宮詣り　男の子は三十一日、女の子は四十二日に嫁の里から届くうぶ着を着せてお詣りする。広袖の紋付きの重ねや、女の子は柄の友禅など。銘仙やメリンスの着物でお詣りする人もあり家によりいろいろだ。この日赤飯をふかして嫁の実家の両親をよぶ。

男子は三十日、女子は四十日に部落の氏神様に詣る。このとき嫁の実家から贈られた広袖、紋の入った産着を着ていく。（下高田）

男は三十一日、女は四十一日目にする。氏神様にお宮まいりをする。（諸戸字木戸・久保）（北山・菅原）

男は三十一日、女は四十二日、菅原神社にお参りする。（菅原）

お宮まいりは赤飯をたいてオボスナ様へまいる。ここではハコソ様へおまいりする。（行沢）

オボスナ参りといって、生後、男は三十一日目、女は四十一日目に村の鎮守様にお参りをした。このとき、赤飯と、竹づつに酒を入れたものを二本、水ひきでゆわえて持っていき、神様に供えた。また、赤飯は途中で通りかかった人にも分けてやった。（八木連字大久保）

オボヤキ　生後男の子は三十一日、女の子は四十一日お宮まいりをする。嫁さんの実家からもらった紋付きの着物を着せお宮まいりをする。新光寺では稲荷様（オボスナ様）に供えるものは、竹の筒を二本水引きでゆわえ、お酒を入れ、お赤飯を重箱に一つと箸を持って行く。途中いき会う子には一箸ずつ赤飯を配り仲間入りさせてもらう挨拶をする。（下高田字本村、新光寺）

赤ん坊のお茶招び　赤ん坊が生まれてお宮参り頃になると、近所の女衆を招いて赤ん坊を披露し仲間入りをする。この時にはおにしめや赤飯のほかに必らず豆菓子を出す。豆をいって砂糖をまぶしたもので、マメに育つようにという意味という。（上高田字上十二）

クイゾメ　生後百日目にあずき御飯か赤飯をたき、子どもの茶わん、はし、おわんを新しく買いお膳にのせ、茶わんには御飯か赤飯を盛り、皿の上に洗った小石をのせ、一粒でも子どもの口の中に入れる。小石は、歯が丈夫になるようにの意味だという。（下高田）

クイゾメは生後百十日に行う。塗物のクイゾメ用の膳、椀が一組あった。ツボにはおかずとして小石を入れ、椀には汁、茶椀には御飯を入れる。これを神棚に供え、おろして生児になめさせ、御飯を食べさせる。（下高田）

クイゾメを生後百十日目にした。ご飯つぶを、皿にのせた小石のおかずで生児に食べさせるまねをした。これは自宅で、生児をその母親が抱いて行った。小石はどこからとってきたものでもよかった。（上高田字下十二）

クイゾメは生後、百日目にした。子ども用のお膳に「オゼンダテ」をし、生児に米つぶを、一つぶか二つぶ食べさせるまねをさせた。お膳には飯茶椀、汁茶椀、皿、チョコなど、一そろえ、そろっていたが、

小石はのせなかった。（八木連大久保）

食いぞめは男児百日目、女児百十日目。石っころを洗っておぜんにのせておかずにする。石をはしでつついて、ごはんを一つぶ口に入れてやる。（諸戸字木戸・久保）

食いぞめを百十日目にする。箱膳から茶わん、はしなど一揃いの食器を買ってお膳を作る。お頭つきは煮干し、イワシなどをつけ、石を拾ってきて洗って膳の上に置く。歯が丈夫になるようにと言った。おわんは桑の木のを買った。中気にならないと言った。（諸戸字日向）

昔は今日が食い初めだっていうぐらいで、今の人の方が、いろいろ作って売っているので、固くやっている。（菅原）

(三) 育　児

マクリ　ホーズキの木の根っこを掘ってすりおろしてサラシに浸し、丸めて乳首のようにして吸わせた。苦いから変な顔をして飲むという程ではない。腹の中で飲んだ羊水を吐き出すそうだ。（諸戸字日向）

最初の乳をしぼってマクリをくれるものだという。カナババ（胎便）のおりがよいという。また生れると一番先にホオズキをなめさせる人もいた。虫がきれるといわれた。（下高田）

米の粉の乳　乳の足りない時、米をひやしてすり鉢ですり、絹ごしでこして、人肌に冷やしてくれる。井戸の中に牛乳や米のスリコを吊して冷やしておいた。（諸戸字日向）

うぶ着　麻の葉の着物を作る。最初の時は実家から送る。（菅原）

オボ着はおばあさんになる人が買って作る。（行沢）

誕生祝　新夫婦に子どもができると、仲人が着物一式こさえてやる。初正月・初節供にもお祝いを贈る。（諸戸字日向）

初誕生に誕生餅をつき一升ますに三個入れ神棚に供える。誕生餅はお祝をもらった家へは全部くばる。箕の中に子どもを入れ、あんの入った一升餅を風呂敷につつみ一個から段々数を増やし、背負えなくなる迄背負わせる。その後親がしりをはたく。腰がしっかりするようにというわけである。（下高田）

誕生祝には大餅をついて、近所の人や近親を呼び、赤坊を箕の中に立たせ尻をまくり、餅を尻にぶつけ、次で風呂敷に包んで背負わせる。（下高田）

初誕生日に、子どもを箕の中に入れて、塩アンの餅で尻をたたくまねをした。こうすると子どもが達者に育つといわれた。餅のアンを甘くすると「甘く育つ」といわれた。

また、この日一升餅（大きな餅）を風呂敷につつんで、子どもにしょわせた。（上高田字下十二）

赤ん坊の初誕生に餅をつく。あんこを入れてまるめた餅を親せきに配ったりする。また赤ん坊を箕の中に立たせ、ふろしきに包んだ餅をぶつけるようにしてやったがこの役はおばあさんがする。（上高田字上十二）

お誕生モチをつく。アンコを入れて丸めたモチを重箱に入れ、ミの中に立たせた子の尻にこのモチを一つたたきつける。甘くみられるといい、アンコはあまり甘くしない。親せきにもこのモチを配る。（諸戸字日向）

誕生餅をしょわせて、みの中で立たせる。餅で尻をたたく。以前はやっと立つぐらいで、歩くのは少なかった。（菅原）

お誕生餅のお返しにはクツやクツ下、ユダレ掛けなど身につけるものをくれた。今は金をくれる。（諸戸字日向）

仲人との別れ　初子の赤ん坊の誕生日にはお仲人を招いて酒肴でもてなす。仲人との別れという。（上高田）

初節供　嫁の里から坐りビナが贈られる。女の子が行儀よく坐るようにと言う。（諸戸字日向）

初節供は女はおひな様、男はのぼり。女はさくら餅、男は柏餅だが、もとは赤飯だった。（菅原）

端午の節供に男の子は吹流しを貰う。白で裾に模様がありサムライとかショウキ様の絵があり両家の紋を入れる。これに対し柏餅を作ってお返しとした。（諸戸字日向）

ほうそう神送り　おがらで棚を作り、赤いおんべろをさし、三本辻に送り出す。（菅原）

百日咳　三夫婦そろっている家の御飯をもらって食べさせる。しあわせなうちだから、くれてくんないといってもらってくる。（菅原）

百日咳にかかると七日市に、提灯印の家伝薬を売っている店があり、それを買って飲ませると一週間ぐらいでよくなった。ほんとうによくきいた。今はない。（菅原）

夜泣き　八幡様にお参りして、小さい弓を受けてくる。（菅原）

はしくぐり　はしかの時、松井田へ行く途中の橋の下を、子どもをしょってくぐる。（菅原）

十二の原の手前や八城の東の中原に、鹿の爪あとのある橋があった。この下をいっちょうらの着物を着てくぐると、ハシカが軽くすむといった。（下高田）

ヌイマモリ　一つ身の子どもの着物に縫いつけた。背中（うしろ襟中央より約三センチ位下の方）に紅白の糸を使い花ビシ模様などに縫ってやった。またヒコオビのつけ根にもつけた。ヒコオビの縫い目は男の子の場合は下、女の子の場合は上になるよう縫うのがふつうだとされてえいる。（八木連字大久保）

チンゲ　三歳位までチンゲを残して坊主にしておいた。ころんだとき神様がこれをつかんで起してくれるという。また鼻血がでたとき、これをひっぱると止まるといわれた。（下十二）

子守り　明治の始め頃は、美濃から子守りに来た。美濃っ子と呼んでいた。（菅原）

昔は貧困の家から、娘を子守に使ってくれと、大農家へ頼んだ。簡単に人を頼むことができた。（諸戸字木戸・久保）

二つ子参り　妙義神社に、二つになると、丈夫に育つようにと、お参りする。（菅原）

幼児が二歳になると、イロリに転がっても火傷せぬようにと花見の頃背負って、近所の同じような人と四、五人～十人位が一緒に妙義神社に詣り、祈禱してもらってお札、お守りをもらってくる。妙義詣りともいった。（下高田）

体の弱い子　捨て子をする。さんだわらの大きいのを編んでおき三本辻に置いて、拾い親を頼んでおいて拾ってもらう。（以後、此の夫婦が死ぬ迄盆暮の贈り物をする）。また百軒着物といっていろんな家から布をもらって来てはぎ合わせて着物を作って着せる。こうすると丈夫に育つといわれた。

名を変えると身体が丈夫になる、ともいわれている。（下高田字本村、新光寺）

弱い子には近所の家や親類など百軒の家から小布をもらい集め、はぎ合せて百ぎもんを縫って着せたのを見た。細かくはいで、かくしびつけをして広袖の着物に縫った。綿入れだったが、縫うのに大変だったそうだ。だが十何歳かでなくなった。（諸戸字日向）

弱い子は呑竜様に願をかけ、七つ坊主にする。坊主にするから丈夫にして下さいと頼む。女の子も七つ坊主にした。（諸戸字日向）

拾い子　生れた子がつぎつぎに死んだような場合、下仁田町では、辻に行って子供を棄て、拾ってもらってくることがあった。オニッコ（生まれたときに歯が生えている。）も拾ってもらう。昭和十二年に生まれた姉は拾ってもらったという。（下高田字本村）

乳児の歯　六ヶ月で歯が生えると六角塔婆といい縁起が悪い。十ヶ月でも十月塔婆と言って嫌い、道の端へ捨てて前以って頼んだ人に拾ってもらう。（諸戸字日向）

厄年っ子　親が厄年の時に生れた子は、三本辻に捨てた。拾い親をきめておいて、拾ってもらった。（菅原）

厄年っ子は役に立てねえ、と言った。（諸戸字日向）

(四) その他

産の忌　出世前の人（結婚をしていない人、一人前にならない小さい子ども）にはサンシ（産婦）と一緒に煮たものを食べさせてはいけないといって、火を別にして煮たものを食べさせた。（上高田字上十二）

流れ灌頂　子どもの時、ヤシロの向うの方で赤い二尺真角ぐらいの布が木にくくりつけてあって、それをくぐってお墓まいりをしたことがあった。その布が雨で打たれて早くさめると、死者が浮かばれると言った。（日向）

産で死んだ人があると川べりに、赤い四角の五十糎四方くらいの布の四隅を、四本の竹の上につきさしたものに張る。傍にひしゃくを置き通る人に水をかけてもらい、布が白くなったら布を川へ流した。血の病でなくなった人への供養であった。（下高田字本村、新光寺）

お産でなくなった人があると、赤い布を川端において水をかけてやった。どういう意味か知らない。その行事の名前も知らない。（下高田字本村）

馬とお産　馬の道具を跨ぐとお産が長びくといわれた。そのため馬の荷鞍は高い所に置けといわれた。（古立）

子どもの天神講　女の子だけの行事で、二月二十五日に前の日から用意しておき餅をつく。宿は三年ごとに順ぐりにして、その家で御飯を炊いて食べた。（下高田字新光寺）

子供組　昔からなかった。（菅原）

子どもの数　昔は六人や七人子どもを産むのはザラだった。十五人の子を産んだ人もいた。（行沢）

産後　産後は百日、旦那様を近ずけるなと言った。（諸戸字日向）

二、年祝

七五三　昔は、七五三ということを、いうにはいったが、やらなかった。（菅原）

七五三にいい着物を着せてお宮詣りする家があったかもしれないが昔は一般にはしなかった。（諸戸字日向）

厄年　男は二十五歳と四十二歳。女は十九歳と三十三歳。高瀬の北向観音に正月十八日にお参りして厄おとしをした。おさい銭をあげ、みかんを投げた。また長野県別所の北向観音にお参りした人もいる。（上高田字上十二）

厄年は女は十九・三十三歳、男は二十五・四十二歳で北向き観音にお参りする。（菅原）

厄年は男は二十五、四十二、女は十九、三十三歳で、子供の厄年はしない。厄落しは個人ごとにやった。（諸戸字木戸・久保）

吹竹　七十七歳の祝いにくれる吹竹は、年よりが自分でつくったものが多く、竹の二節でつくる。元を大きく、先を小さくした。（上高田字上十二）

年祝　八十八の祝の時は、赤い着物をおくる。お祝のお返しには、火吹き竹をおくった。この竹で吹くと、火事の時、風の向きが変るという。（菅原）

八十八歳になると、年よりに赤いチャンチャンコを着せて、鎮守にお参りして、お祝いをする。お祝いするとすぐ死ぬといって、嫌がる人もいる。（諸戸字木戸・久保）

三、青年集団

青年会　満十五歳で入会して、三十五歳で脱会した。会長、副会長

（二名）、書記、会計（一名）の役員がいた。現在では、会員が七、八名に減ってしまった。

以前やった行事としては、結婚式があると、夜、提灯をもって警戒に当った。提灯には「下十二青年会」と書かれていた。警戒をすると、嫁のもらい方の家から「寸志」と書かれた金一封がとどけられた。また、夜番をやったこともある。拍子木をたたいたり、鈴をふったりしてムラを廻った。

また、青年会は梅林をもっていて、ここからとれた梅を売って会の収入とした。今年からこの梅林はムラのものになってしまった。また、縄ない機を購入してムラに廻したことがある。最初は一台だったが、しまいには二台にふやした。なお新入りの者は四月に入会した。（上高田字下十二）

青年団と処女会に男子は学校卒業後二十五歳くらい迄、女子は嫁にゆく迄それぞれ入っていた。なお、新光寺だけの男子で農友会という組織を作り月一回定例会議を開いていた。（下高田字新光寺）

夜遊び　南は丹生、北は磯部、安中、遠くて松井田、九十九、人見、行田など概ね四キロ四方位のところに行くが、富岡にはほとんど行かなかった。丹生から若衆が来た。また石かつぎ（かつぎっこという）もやったが、これは大久保の若衆がよくやっていた。夜ばいも昔はしたという話を聞いたが、これは村内のことであった。（下高田）

夜農事がやや暇な時期にする夜遊び、農休みの時の映画見、盆踊りなどがある。男は九十九村や額部村、黒岩村、小幡町くらい迄の距離の所へは歩いて出掛けて行った。正月頃裁縫に通う女を頼まれもしないのに自分から進んで送り迎えする若い衆もいた。（下高田字新光寺）

四、結　婚

(一)　結婚の条件

婚姻圏　隣の安中市、中野谷（旧碓氷郡東横野村）、富岡市、一ノ宮、黒川等が多い。（下高田字新光寺、明戸）

イトコ同士　むかしはムラ内での結婚は従兄弟姉妹同士が多かった。金がかからないし、親戚がやたらに増えて、交際だおれになるのを防ぐねらいがあった。昭和の初め頃まで、結婚は親同士が勝手にきめ、本人の意志全く無視された。（中里）

結婚年齢　女は十五、六歳から二十歳くらい迄、男は兵隊検査過ぎが適齢といわれた。厄年（男二五歳、女一九歳）は良くないといわれた。

女の一つ年上は金のわらじをはいても見つけろといわれていた。（下高田字新光寺）

嫁の年回りとしては、二十二歳は並びどしでよくない。一つ年上はカネのワラジをはいてでも探せと言った。（諸戸字日影）

結婚　男でも女でも年頃になると知り合いの人や親せきの人が、こういう人がいると世話をしてくれる。好き合って結婚した人を「よくって一緒になった」などといった。（諸戸字日影）

恋愛結婚で嫁を連れてきた場合は、仲人は立てられない。いっときたってから近所の人を仲人代りに頼み、女の親の方に話してもらう形をとる。また親が結婚を認めない場合は、一応親に泣きついておいてから近所の人に話し、その人から親に話してもらって認めてもらうようにするのが多い。（上高田）

恋愛結婚（クッツキ）や略奪婚はほとんど無く、見合いも無かった。下ばなしをする人がいて、親がその話をもとに、こっそり相手の家の

様子を調べる。そして仲人を親が頼み、次で両方の親同志の承諾で決まる。従って結婚式の晩にはじめて会う例が普通であった。（下高田字新光寺）

(二) 婚　約

仲人　「仲人七うそ、行ってみたら、まるでうそ」などということをいう人もいた。親戚関係や懇意の人を頼む。（菅原）

仲人は村内で役をしているなど所謂えらい人、しゃばのことをよく知っている人にたのむ。（上高田）

結婚式には仲人が一組出て取りまとめる役をする。「お待ち女房」は夫婦で出る。（諸戸字日向）

仲人は知らない男女の話をまとめるので、七ウソつくことも必要だった。見合いに行って妹を見せて、姉の話をまとめたという例もあった。（諸戸字日向）

トンビのハネ　結婚が無事に終ると、両方から仲人礼として、お金を包むのを、トンビノハネといった。（諸戸字日向）

樽入れ　男女両人の結婚の話がまとまると、婿方で酒一升とスルメを用意して、仲人が嫁方に届ける。「一生いいように」と酒を一升だけヤナギダルに入れて持って行く。仲人が婿を連れて嫁方の近所を挨拶に回り、「よろしくお願いします」と手ぬぐいを配ってくる。報告を兼ねてやる。（諸戸字日向）

タルイレで婚約することとして仲人が嫁の方に酒一升持って行く。嫁方は嫁、両親、親戚の代表達で迎え、その酒を飲んで祝う。このタルイレが終ると、女は男の方に昼間は手伝いに来ることもある。（上高田）

樽入れは赤いヤナギ樽二本に、一生いいようにと一升の酒を分けて入れ、するめを添えて仲人さんが嫁方へ持って行く。（諸戸字日影）

結納　結婚式の日取りが決まって、一週間前ごろ、婿方から結納品を嫁方へ届ける。白むく・黒むく・長じゅばん・帯・白たび・江戸づま・髪道具・末広・友しらがなどを目録を付けて持って行く。昔はお金を持っていかないで、物を届けた。その後、帯代として十万～十五万円も納めるようになり、今はお金をもっとやるようになった。昔は結納返しはやらないで、婿の着物などを作ってくれた。今は袴返しを五～十万円も返すようになった。（諸戸字日向）

結納は結婚式の三日くらい前に仲人が嫁御の方へ酒一升と肴（するめ）と目録を持って行く。貰い方では次のものを嫁さんの親に渡す。江戸褄一式、道中着として柄の着物の重ね着、長じゅばん、黒むく一式、コート、丸帯など。（下高田字新光寺）

江戸褄や道中着など結納おさめに持って行った。親せきとか、近所の若い者を頼んでお供にしてかついでもらって行った。（諸戸字日影）

必要なものを買わねばならないので、一カ月位前には結納を納めるのが普通である。（上高田）

結納は金で納める人、目録を持って行く人、いろいろだった。（菅原）

結納の目録　目録または茂久録とも書き、その様式はつぎの通りである。（以下「結婚式案内」の写し）

目録（茂久録）

一　熨斗　　壱
一　家内喜多留　　壱荷
一　友白髪　　壱台
一　寿留女　　壱台
一　子生婦　　壱台
一　角かくし　　壱個
一　島田飾　　壱個
一　櫛笄　　壱組
一　立長　　壱
一　櫛　　壱組

一　三ツ櫛　壱組
一　紅白粉　壱組
一　扇子　壱本
一　筥迫　壱個
一　江戸褄　一枚
一　白無垢　壱重
一　丸帯　壱筋
一　コート　一枚
一　道中着　壱重
一　長襦袢　壱重
一　道中帯　壱筋
一　志古貴　壱筋
一　腰帯　壱筋
一　帯留　壱筋
一　足袋　壱足
一　木履　壱足
一　末廣　壱対
以上

右之通り幾久しく芽出度
御受納下され度候他
何年何月何日
何村
何某

何村
何某殿

凡テ二枚紙ニテ包ムコト（上高田字下十二）

道具送り　婿方から人を見付けて道具を嫁の家まで貰いに行く。嫁さんは島田に結い、江戸褄を着て道具の後から聟の一げんが迎えに来たのと、自分のほうの一げん（兄姉、弟姉、おじ、おば）と出掛け中宿に入る。道具は貰い方の方で並べ、みなに見てもらう。（下高田）

嫁の荷物はタンス、長持、夜具ダンス、ハリ板、裁ち板、タライ、ふとん一組（敷きぶとん一、掛けぶとん二）、かいまき（丹前ではなく綿を厚く入れ、肩当てと絹天の黒い衿をつけ、掛けて寝るもの）二、枕二、夫婦用の座布団二、他に座布団も用意。その他小物。これらを運送で運んだ。（諸戸字日影）

(三)　嫁　入　り

嫁入り　まず樽入れをして日取りをきめ、結納おさめをする。当日は仲人が、嫁の家へ連れて行く。お祝は両がけにして持って行く。近所か隣りの中宿で休み、庭に手伝いのものが、おがらで門を作り、ここをくぐって、玄関から入る。（菅原）

迎え一見　結婚式当日の昼前に、仲人が婿側の近しい親戚を連れて、一見として嫁側に行く。嫁側はこれを迎えて御馳走する。一見座敷という。終ると仲人は残り、婿は帰る。（上高田）

結婚式の当日、午前中に婿方から七～九人か十一人が揃って、婿とともに嫁方へ迎えに行き、一杯ご馳走になってくる。婿イチゲンともいう。（諸戸字日向）

挨拶廻りは嫁方へ行って、仲人と婿が廻る。（菅原）

送り一見（イチゲン）　婿方の迎え一見の一行が帰ると、夕方四時ごろ、嫁は氏神様（吾妻屋神社・若宮八幡）と屋敷稲荷にお参りして、親に挨拶してから、送り一見の一行とともに出立する。結納品は両ガケに入れて若衆が担いで行く。嫁入り道具は運送車で運ぶ。（諸戸字日向）

中宿　嫁一見（イチゲン）の一行が婿方に到着すると、ひとまず中宿（チョウヤド）に入り、オチツキ（落着き）として茶を飲む。お待女房が世話をやいて、嫁のヒザノバシをする。婿方の人が接待して、婿の家のようすを話してやる。仲人は婿方にいるので、仲人の妻が嫁

に話をする。（諸戸字日向）

嫁側の近所の人、親戚が嫁と共に婿方に行くとき、婿の家の手前に設けられた中宿に入り、ここで仕度を整える。（上高田）

中宿ではおちつきといって、お茶と生菓子が出る。たいがい食べない。（諸戸字日影）

入家式　ケードから入るときオガラを十文字に置いてこれを燃し、消してから火をまたぐ。たとえ火の中水の中でもというわけだという。またオガラの鳥居をくぐって家に入るが、川幡ではこのことはしない。（下高田）

嫁が婿の家にケードから入るとき麦わらの束あるいはオガラを五、六本結えたものを近所の人が燃し、それを消して嫁がまたいで、縁側から入り親子盃を姑と交す。このとき謡はない。またオガラの鳥居をくぐることもない。（上高田）

ケードから玄関に入る時、両側から松明に火をつけて消したものをつき出して、花嫁はこれをまたぐ。火の中水の中もいとわずにつとめるという意味。玄関のところで、親子の盃を交わす。嫁入り衣裳は白無垢を着た。その家の色に染まるようにということである。（中里）

ケードに青竹を置きこれをまたいで、次いで玄関の前にオガラをX形においたのをまたいで入る。（諸戸）

嫁がトボグチから入る時に、家の内から提灯をかざして出迎える。嫁がしきいをまたいで姑と酒を飲む。これをカドサカズキという。まわりの者が謡をする。（諸戸字日向）

嫁と姑が三三九度の盃で三回酒を飲み合って、嫁は姑に手を引かれて座敷へあがる。この時酒をつぐのは介ぞえの人である。（諸戸字日影）

ムコにきた人も嫁にきた人も玄関ではなくナカト（奥の部屋の縁側）から家へあがる。（諸戸字日影）

嫁はオガラの鳥居をくぐってトボグチから入る。死ぬとオガラの鳥居をくぐって出る。（行沢）

結婚式の席は、仲人・夫婦・近親の順で、うちのものは末席に坐る。（菅原）

左は昭和十三年に記録された、下十二における結婚式の行い方等である。記録には「結婚式案内」と題されている。（所蔵者は下十二の清水卯三郎さん。墨書。半紙四折判。全一冊八丁。）

記

嫁来ルヲ待チテ取持人ハ之ヲ門ニ迎エ媒酌人其他新客ニ一礼ヲナシ中宿エ案内シ其時履物ノ注意ヲナスヿ尚共人アルトキハ同様案内ヲナスヿ

而シテ茶ヲ進メ後媒酌人取持人ハ新客ヲ嫁ヲ一時御借リシテ取リ結ビノ式ニ至ル可シ新郎家ニ於テハ松明ヲ作リ置キ之ニ火ヲ灯シ嫁ヲ迎エ軒下ニテ其松明ヲモエ終ラザル内ニ交又シテ其上ヲ新婦ニ渡ラシメ其時両親ハ戸口ノ内側ニ居ルヿ其他ノ人々ハ軒下ニテ居ルヿ

而シテ兼テ様意ノ蝶子ニハ朝ヨリ水ヲ小口ニ入レテ之ヲ高砂子ニ上ゲ置キ

又其時ニ御酒スゞニハ取結ニ使フ可キ酒ヲ入レテ共ニ供エ置キ

其蝶子ヲ門盃ノ時ニ水盃ノ為ニ使フナリ

其法ハ男蝶ハ男ノ子ニ女蝶ハ女ノ子ニ持セ第一ニ男蝶ハ男ノ媒酌人ニツギ女蝶ハ女ノ媒酌人ニツギ後男蝶ハ父親ニ女蝶ハ嫁ニツギ後女親ニツグ何レモ重ネルモ重ネザルモヨシトスレ共

重ネザル法多シ

終テ蝶子ノ水ハ勝手ニ於テ冷酒少々入レ替エ即チ此酒ハ朝高砂子ニ供エ置キタルスゞノ酒ノミニテハ取リ結ノ時ニタラザル故ニ前以テ少々入レ置クヲ便トス

而シテ取結ビノ式ニ至ルナリ

凡テ男子ハ右ヨリ女子ハ左ヨリニ此時取持人ハ一礼ノ後両蝶ヲ酌ニ持セ御酒スゞノ酒ヲ其蝶ノ中ニ入レルナリ

ソシテ之ヲ男蝶ハ男ノ媒酌人ニ女蝶ハ其婦人ニ重テツギ右廻リヲシ

テ酌ノ子下座ニツキ座ス而シテ男蝶ノ酒ヲ女蝶ニツギ女蝶ノ酒ヲ男蝶ニツギカハシテ後男蝶ハ新郎ニ女蝶ハ嫁ニツギ何レモ右廻リヲシテ下座ニツキ又前ノ如ク蝶子ノ口ヲ合セ男蝶ハ嫁ニ女蝶ハ婿ニツグ又前ノ様ニ右廻リシテ下座ニツキ蝶子ノ口ヲ前ノ様ニ合セ後男蝶ハ新郎ニ女蝶ハ嫁ニツギ其儘之ヲ侍女母婦夫同席ノ場合ハ侍女母ニツギ媒酌人ニツギ而シテ高砂子ニ供フ取持人ハ一同ニ目出度礼ヲノベ式ハ終ル

注意

此時初メ媒酌人婦夫ニハ重テツギ式ノ終ル時キハ重ネザル「即チ合セテ三コントナルヲ良トス

又

新婦夫ニハ何レモ重ネザル「即チ蝶子ノ口ヲ合セル「三回ニテ即チ合セ合フ故ニ六回トナル此時一回リ「ニ重ネズニ一コンヅゝニテ三回ニ即チ計ノ三コントナル之ヲ合セテ九回即三々九度ノ式ナリ

侍女母ニハツグモヨシツガザルモヨシ若シ夫同席ノ場合ハツグモヨショク取持人ヲ侍女母夫人ニ替ル「アリカゝル場合ハ侍女母ニハツガザルヲ便トス侍女母ニツグ場合ハ重ネル「

此式ノ時ノ膳肴ハ左記ノ様式ヲ便トス

即鰯二尾ヲ藁縄ニテイボニ結ビ之ヲ男蝶ノ膳肴ニ大根小ナルモノヲ二本藁縄ニテイボニ結ビ女蝶ノ膳肴ニ供フナリ

右ノ式ニテ

取結ヒ式ハ終了スルナリ此時両親ニ其終了ヲ目出度報告スル「

式終りて取持人は中宿に至り目出度式の終了せし「を新客にのべ新客の御案内をなす而して第一に近親との引合せを行ふ先に主人側を紹介し次に新客を一々紹介する「

之より着席して酒宴に至る之時は御酒スゞの口は紙にて祝(結)ふ「

媒酌人右より初めて全部坐りたる後袴を取り楽座を進む

座敷中場にて各婦人労を慰む各一時他の間等に楽座を取持人方にて進むる又

媒酌人之言にてなすも無きにしても良法とす(なれ)

座敷の模様十二分と云ふ言葉にて納盃と決定也ば干肴を出して全部干終りたる後夕食を進む

尚硯蓋は座敷中途にて出すを良とす

三々九度　床の間の前の向かって右（奥）に嫁、その左に婿が坐り、仲人夫婦が両側に坐る。まず、三々九度の盃ごとをすませる。次いでお客を呼び入れる。嫁方が奥に並び、手前に婿方が並び、オトリモチ（相伴役）が着く。それぞれ、猫足膳が並べてある所へ坐る。膳は本家に三十～五十組もあるのを借りて使うが、会席膳でもよい。座につくと、両家の紹介をし合う。（諸戸字日向）

上座に仲人夫婦、次にお待女房夫婦と新郎新婦、少し離れて見とどけが二人坐る。男蝶女蝶の二人の子どもが酒をつぐが、一回つぐごとに介ぞえ人が謡をする。（諸戸字日影）

オマチ女房　嫁入りの時、中宿で待ちうけていて、三三九度の盃ごとの時にたち合う。近所の既婚の婦人二人が、花嫁衣裳を着て、座敷に坐って嫁の入家を待つ役だが、嫁ごより年上で、且器量が少し劣っている者になってもらう。「ヨメゴさんより器量が良くちゃこまるよ」と言われた。（中里）

お待女房は嫁をとる家で懇意な夫婦を頼んできて、御祝儀の席に坐ってもらう。まだ若くて、嫁を引き立ててくれるような人を考えて頼む。お待女房とはいうが、男の人の呼び名は特にない。お待女房は裾模様の着物に丸帯をしめ、丸まげを結い、嫁と同じような支度をして夫婦で三三九度の盃事に立合う。そのあと祝の席にも坐るが、ほんの少しの間で遠慮して座をはずす。男の方もあまり長居はしない。な

ぜお待女房がいるのか訳は知らない。縁起をかついだものかもしれない。（諸戸字日影）

お待女房はトリムスビの席にちょっとの間夫婦で坐っている。特別に分担はない。弟が嫁をもらうとき兄夫婦がやったことがある。下高田では年の若い夫婦があたった。（上高田）

一見座敷　三・三・九度が終って一見座敷となり、婿方の近しい親戚、嫁を送ってきた親戚が出席して祝う。このとき床の間には、大根あるいは人参を水引きでしばったのを置く。（上高田）

祝儀の料理　膳には親椀（飯）と汁椀が手前につき、チョコ・皿・平椀が並ぶ。五品とか七品とか、料理番が料理を決めて作って出す。チョコにはシミ豆腐を短冊に切って入れたり、コンニャクの白アエ、ネギヌタ、ギンナン、漬け物などを入れる。皿はカズノコ・キンピラ・ゴマメなどを盛る。平椀にはシイタケ・カンピョウ・三角アゲ（厚揚豆腐）などの煮付物を入れる。ムシリザカナといって、海魚の大きいもの（カツオなど）を煮て、大皿二枚に盛って出すのを、少しずつ取って回す。代用としてホウレンソウをゆで、カツオブシをかけたものを回す。これが出ればオツモリ（最終）の番になる。赤飯を重箱に盛って回すので、箸で一ぱさみずつ取る。酒は盃で飲むが、近所の娘がお酌に出て夜中まで飲み続ける。「ツルツル、カメカメ」といって、うどんが出て終りとなる。

引物として菓子折にミジンコ菓子を入れて出すが、生きた鯉、カツオブシ箱入りなどを出す。（諸戸字日向）

結婚式の料理はキンピラ、ゴマメ、数の子、野菜の煮物、煮魚、おひら、吸いもの、酢のもの、赤飯。むしり魚は皆でむしって食べる。青菜をゆでてケズリブシをかけて大皿に盛り下座から回す。赤飯は二つの重箱に入れて回す。最後にうどんが出る。うどんはツルツル　カメカメと言い、祝いの席にふさわしいという。（諸戸字日影）

一見座敷の席で嫁、婿に御飯をテッコウモリにしたのを置くが、そのときはたべないが一応口はつける。そして座敷が終ってからあとで冷えてからたべる。（上高田）

娘の頃はご祝儀というとお酌に頼まれた。畳のへりをふむなとか、畳は二足半で歩けとか教えられた。料理を出すタイミングも大事で、お取持ちさんと、料理番の言う通りに、できた料理を運んだり、酒をついで廻る。この料理はこう向けてお膳のどこへつける、などと決まりがややこしかった。立ったり坐ったりしてご祝儀が終っても三日ぐらいヒザが痛んだ。（諸戸字日影）

またこい茶　ご祝儀の御馳走のあとのお茶は一度ついで、もう一回つぐ。またこい茶という。（諸戸字日影）

結婚式の謡　昔はご祝儀に謡などしないとこが多かった。（諸戸字日影）

オチカヅキ　嫁方の一見を送り出してから、近所の人で手伝ってくれた人々に対し、オチカヅキといって祝酒を飲んでもらい、嫁を紹介する。（上高田）

ノゾッコミ酒　婚礼の座敷を若衆がのぞきに来て、障子に穴をあけたり、石塔を庭へ置いたりするので、ノゾッコミ酒を出してなだめる。（諸戸字日向）

結婚式の客　嫁の兄弟姉妹かおばさんなどの一人が、結婚式の晩に見とどけ役として泊る。遠くて帰れない人は隣の家に泊る。（諸戸字日影）

見トドケ　婚礼の晩に仲人は婿方に泊まる。嫁婿の部屋の隣の室に泊って、二人が仲よくササヤク声が耳に入ればいいとする。これを見トドケという。（諸戸字日向）

お茶よび　ご祝儀の翌日、近所の女衆と、都合で式によべなかった人を招いてお茶よびをする。姑が嫁ですと皆に紹介したあと、嫁が一回酒をついで回る。（諸戸字日影）

婚礼の翌日、近所の女衆や当日呼べなかった人を呼んで、仲間入り

をして、お茶を出す。嫁が手みやげを出す場合もある。これをお茶呼びという。（諸戸字日向）

結婚式の翌日、里帰りの前に、近所のつきあいのある家の女衆たちを招いて、お茶招びをした。酒肴も出したが、おにしめやきんぴらごぼうを出し、お茶も出した。嫁が仲間入りの会であった。（上高田字上十二）

ヨメゴノオミヤゲ　結婚式の翌日里帰りをして、帰ってきてからヨメゴノオミヤゲといって、あと片付けに来ている近所の女衆に出す。（上高田）

嫁は婿方の親・兄弟へ何か少しのみやげ物を贈る。近所の女衆へも仲間入りとして、手みやげを出す場合もある。（諸戸字日向）

㈣　その他

名ビロメ　新しく来た嫁・婿はケイヤクや石尊行など、村の人が集まる時に酒一升出して、「よろしく」と挨拶して仲間入りした。嫁は天神講の時に豆腐を買って仲間入りの挨拶をした。（行沢）

里帰り　婚礼の翌日か三日目に、嫁の実家へ里帰りをする。婿も同行して一泊し、嫁はヒザノバシをして休む。婿は嫁の両親にみやげ物として、下駄・ぞうりなどのはき物や下着を贈る。家族のみんなに菓子か何かのみやげ物を贈る。

翌日、女親が里帰りの嫁を送り返すために婿方へ行き、一泊して仲人と帰ってくる。（諸戸字日向）

嫁が実家に帰る日　一月四日に初めは嫁・婿二人で実家に帰る。六日年までには帰ってくる。三月節句にはマスノシタ五枚を水引きかけて持っていく。五月節句にはタラの干物を持っていく。七月十八、十九日は農休みで帰り、十月十五日は村の鎮守（伏見神社）のお祭りで帰る。八月の八朔節句はない。（上高田）

ヒザノバシといって、結婚式後一週間位して嫁一人で実家に帰る。手土産を持っていく程度である。（上高田）

嫁がお客に行ける日は一月四日、三月三日（サンマの開き、包み金）、五月五日（タラの干物、包み金）、七月中旬（農休み・蚕上げ・田植え）、九月一日（ハッサク）、十一月（秋アゲ・麦蒔き終い）、十二月（お歳暮）などである。

新婚一年目は丁寧に贈り物をする。仲人へもお礼をする。（諸戸字日向）

ショウボン　新嫁の初めての農休みのとき、婚家では着物を買ってやり、これを着て実家に行った。（下高田）

秋上げ　秋の収穫ごとが終ると、十一月中に（十二月ではよくないという）オコワをふかし、これを重箱につめて、嫁は実家にもって行った。（下高田）

婿とり　婿が三代続けばイロハ順の倉が建つという。（行沢）

五、葬　制

㈠　死の予兆と死

死の予兆　鳥が病人の方へ尾を向けて鳴くと、病人は間もなく死ぬ。不幸のつげが来る時は烏鳴きがよくない。（中里）

死の予烏のなき方があとをひく、もだえるような声に聞える。寝ている人には聞えないという。

雨戸をたたく音がした。本家新宅、親子関係にある人にはお勝手の障子が自然にあくなどシラセがあるという。（下高田）

前じらせとしては烏鳴きがわるいという。死びとくさいにおいがするので、烏は判るのだろう。

「お寺さんから迎えにくらあなあ。閻魔さまが迎えに出てるんだんべえ」といったら、次の日に死んだ人がある。自然に口から出るんだ

ろうか。（菅原）

烏なきが悪いと人が死ぬという。（行沢）

妙義神社に務めていた八十歳の祖父が、死にそうになった最後のことであるが、「神様が体から離れたから死ぬ」といい、仕度を改めて祝祠を上げながら終った。

カラスの一声鳴があると人が死ぬ。

正月棚の飾物を間違うと死ぬ。

ローソクが風もないのに消えると死ぬ。

葬列の棺が傾くと不吉な事がある。

茶腕が自然に割れると不吉なことがある。

などといわれた。（妙義）

人魂　水色のような青色で、いろいろの形に尾をひいてとんでゆく。死んだ人があったとき、その屋根から出るという。（下高田字本村）

家のひさしから径十五センチの火塊が上に昇り、三回廻って墓の方に飛んで行った。丸い青赤色の一間半位の長さであった。その翌朝早く家の某が死んだからカミの方にイイツギを出してくれといわれた。（下高田）

お百度詣り　伏見神社に詣り祈禱してもらう。また上高田字十二の熊野神社に某家の一人娘が病気になったとき、お百度詣りしたら治ったという。（下高田）

魂呼び　昔は死にそうな病人がいた場合に、魂呼びが行なわれた。それは、その病人の名前を呼ぶことで、その家か共同の井戸で、底に向って呼んだ。これを行なう人は近所の人たちだった。

死期が近いような人のことを「影がうすい」といった。

死ぬと身内の者の家に大きな音がする。その音は床板を剝ぐようだとも、二階で人が跳ねるようだとも言った。（妙義）

魂呼びといって井戸で笠をさして大声で呼び戻すことをした。（下高田）

オカオカクシ　死者が出ると神棚に他人がする。このとき酒をコップに一杯供え、三・七日位そのままおく。オカオカクシした人にこの酒でオキヨメをしてもらう。（上高田）

人の死があると笹葉を神棚にくいちがいに立てる。これは身内の者でなく他人がすることになっている。（下高田）

不幸があると、死者の穢れが大神宮さまに及ばないように、笹の葉で神棚の大神宮の札を覆う。オカオカクシという。（中里）

枕がえ　人が息をひきとると、まず北枕にして、白布を顔にかぶせる。身体の上に刃物（鎌とかなた）などを載せるが、これは魔物（猫など）除けだという。神だなにササ（竹）をのせる。（下高田字新光寺）

死者を北を枕に寝せ、刃物をマヨケとして布団の上に置く。死者の魂を獣、特に猫がさらいにくるといわれている。（下高田）

死者は枕がえしのとき新しい俵の上に布団を敷き、その上にねかせた。（上高田）

オダンス　女衆が玄米を石臼でひいて粉とし、これで作る。これには両面を押して凹みをつくるのと、片面押して凹めるのとあるが、後者を茶わんに山盛に（オツタカモリ）入れる。これは葬式の行列で持って行き、埋めるとき棺の上にまけ、その上に土をかける。このオダンスをゆでるのは、家の裏など普通でない場所で五徳の上にのせてする。使った道具は暫く用いない。いらないようなナベを用いたときは、終ると捨てる。枕飯も玄米を洗わないで家の外で煮る。オダンスをゆでた道具を用いる。仏様に進ぜるオツユは作らず、ただの水をあげるだけである。（下高田）

枕団子のこと。この粉は冬ひいておけ、といった。お繭玉のときのものはくさらないので一升分はとっておけといった。その粉で、中央をくぼめておく。死者があの世に行きながら、これで水を飲むためである。数はきまっていないが、たくさんつくる。なお一七日のオダンスは、上・下からくぼみをつける。（下高田字新光寺）

枕だんごは玄米を挽いて粉にして作る。九個とも十二個ともいう。死者の背骨の数だけ作るとも言う。枕だんごは、まるめただんごを、拇指と人さし指で押して、くぼみをつける。仏さんが十万億土へ行く途中、忙しいので、このだんごのくぼみで水を飲むという。（中里）

死者の膳　玄米を煮てお高盛りにし、箸は二本たてる。オタカモリはえびすこうのときもする（嶽）。膳はタツゼン、ヒダリゼン。ウブタテノメシもオタカモリである。（下高田字新光寺）

枕飯　ごはん。玄米を洗って煮る。死者が生前使っていた茶椀に、七分目ぐらい盛る。囲炉裏やカマドは使わずに、土間に五徳をおいて、鍋をかけて煮る。湯灌の湯もこの鍋でわかす。枕だんごもこの鍋で作る。五徳と鍋は、一週間は使用しない。（中里）

通夜　死者の子供、身内の者、ツゲに行った村の人などでする。一晩中線香を立てるものだといった。今では他家の人は九時頃までいてあとは子供達でする。（下高田）

(二)　葬　　送

葬式　組の人が一切とりしきって行なう。墓穴を掘ることから、料理・会葬者の受けつけ、その他事務的な仕事いっさいをする。組は十軒内外である。（妙義）

日向では上、下、中、南の組単位で全部出て葬式をする。（諸戸字日向）

部落を上下の組に分けて、葬家に近い組が勝手元、その他の役をやり、他の組が穴を掘る。（行沢）

葬式の順序としては、組内の長老格の者に死んだことを告げる。次に、その年輩者、長老などが組内に話す。それによって、組の者が悔やみに集り、施主と葬式の計画を立てた。期日を決め、神社との連絡、仕事の分担にかかった。告げ二人、ニワバ、勝手に分れてとりかかる。告げは二人一組で「死者の氏名、死んだ日時、葬儀の日時、場所」を間違いなく告げることに努めた。告げの場合は相手方で食事を取ることになっていた。したがって昼食など二、三回も食べなければならなかった。

ニワバの中の二人が「穴掘り仲間」として穴を掘った。

葬列の順序は、灯籠、箒、弓、五色旗、葬儀旗、かんき、めいき、柩の順だった。（妙義）

葬式のつき合い　葬式ができると、大久保のムラ、全体で手伝った。この場合、ウチジュウのつき合いと、ホーベイのつき合いとがあった。ウチジュウとはふつう、その家の男女二人が出て手伝う。ホーベイは一戸一人出て手伝う。ホーベイは、その後の墓参りや、四十九日の供養などには参加しない。香典は現在、ウチジュウのつき合いの家で三千円、ホーベイは千円がふつうである。

まずツゲに出る人を決めて、他の人は穴掘りとか、その他の係となって手伝う。したがって、穴掘りには決められた順番等がない。（八木連字大久保）

葬式の諸役　死ぬと、そのことをまず隣の家にいう。イイツギで組内に伝えて、すぐに組内の者が集まってくる。葬送の役には、以前はムラ中（五区、六区）から出たが、今は人がふえたので区ごとになった。新光寺の上手と明戸、下手と明戸とくんだ。つまり、下手に葬式があると明戸がツゲ、上手が穴ほり、上手に葬式があると明戸が穴ほり、下手がツゲというように組んで、自分の組で受付とか内まわりのことをした。いろいろのツクリモノはツゲに行く組の老人がつくった。

ツクリモノには花篭、花たて、五色旗、手花などがある。オガラで門をつくる。これを出棺のときくぐる。なお嫁さんが来るときには、オガラの門をくぐって入る。

ツゲは一組二人。親族の人が計画をたててツゲ組に渡す。だいたいはムラ内、富岡方面、オクリ（妙義）、下仁田方面などにわけて名簿をつくる。モクヨケ（またはニッカン）出席者には◎をつけて、早くき

葬式の竜頭（中里）（菅根堂）
（撮影　阿部　孝）

てもらうようにいう。ツゲには、出るときにオニギリを持たせてやったり、どこそこの家でご飯をもらって食ってくれと言っておく。その家に行くと、たいていはつくって出してくれる。今はそれをしないで金ですませてしまう。（下高田字新光寺）

葬式の役づきは位牌は長男、膳は嫁、棺かつぎは子供、天蓋は死者と近い人で兄弟など、弓は孫、花篭はいとこくらい、タツガシラもいとこくらい、イキキ（名旗）には死者の名を書く。（下高田字新光寺）

つげ　かならず二人で行く。寺、親戚へ近所の人が手分けで行く。（菅原）

人の死があると区長がイイツギを出し全戸（十六戸）が寄り、女衆は家の中のことをし、男は役場、寺に行ったりツゲに出る。ツゲは二人で出ることになっている。この場合の昼食は普通行った先で出すことになっている。（下高田）

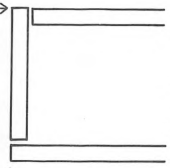
川幡は十戸程なので、ツゲに二人一組で出ると五組しかできない。そこで一戸から二人出たり、小学生が出て二人一組とする場合さえあったという。（上高田）

村の人を総動員して都合をつけて出てもらう。そしてツゲは一組二人でゆき、近年は交通費というようなことで一人千円ずつ持たせる。ツゲには昼を出すということだったが、食べられない時にはパンを食べたり、自転車のパンク代というようなわけである。もとは行って来ると帳場へ返したが、最近は返さない。（八木連）

葬式の知らせは二人で行く。家に入ると、「早速申し上げます。〇〇さんがおまちがいになったので、明〇〇時、仏式により葬式を執行いたしますので、よろしくおねがいします」と言う。受けた家では酒さかなを用意してもてなす。（妙義）

ツゲは二人で行く。葬式の準備、執行には組の者があたる。しかしツゲに行くのは隣の組の人である。たとえば、蟹沢の人が死ぬと、隣の堰下又は中村の人がツゲに行く。葬儀の時刻等を書いた紙を持って行き、それを置いてくる。口頭で知らせる場合もある。着物はマチギを着て行く。立ったまま用件を伝え、腰をかけないで立ち去る。立ったままものを言いつけると「ツゲのようだ」と言う。（中里）

棺　棺を作るには六尺の板で「六尺の切り回し」といって、必ず六尺の範囲で作ることだった。たて、よこの関係で長さを決めた。棺の釘は打ち方も異っていた。同じ方向からは打たなかった。（妙義）



モクヨケ　湯灌のこと。親しい人で行う。汚いものを片づけてからだをふいてやる。その時の湯は、かまどを使わず、庭に三又に組んだ木に鍋などをつるしてわかす。竹とか木とかうるさくいわないが、竹と木の箸を交えて使うことは禁忌になっている。湯灌の湯をうすめるのに、先に水を入れてその中に湯を入れて使う。これをサカサ水といい、平素は禁忌になっている。（下高田字新光寺）

穴掘り　三ツ屋前は耕地が下組と上組とに分れているが、下組に葬式が出ると上組の者が穴掘りをする。施主が場所を指定し、穴掘りには一升出す。墓地を買うといって十円玉を石塔に進ぜてから穴を掘ることもある。穴掘りに対するオキヨメのときの特別の処遇はない。（下高田）

穴掘りをニワバという。下組（山下）に死者がでると中組（左京組）、中組のときは上組（谷津組）、上組のときは下組が掘る。男衆に酒一升、

お茶菓子、むすびが出る程度である。（上高田）

葬式の時の穴掘りは、村の中で四人ずつ順番で番にあたる。近親のときは番をくりこしてもらっておき、次回のとき番をする。（八木連）

川幡は戸数が少ないから、ツゲから早く帰った者から穴掘りをする。穴掘りした者を特別扱いすることはなく、施主が酒を出したり、終えて帰ってきて家に入るとき、庭でオキヨメをする程度である。（上高田）

穴掘りは四人ずつ、順にやる。埋めたあと、竹を刃物で割らないで、石塔の角で割り、目はじきを立ててから帰る。お昼は持って行ってやる。（菅原）

穴掘りは東組、西組で相互に、回り番で四人一組で穴掘りを行なった。この人たちの食事は、むすびで、酒は徳利で一本ずつと決っていた。（中里字北山・菅原）

穴掘り番は全戸で四軒ずつ回り番で出る。記帳する帳面があるが、個人で預かるのは嫌なので随応寺で預ってもらっている。（諸戸字日向）

葬式用具　普通死者はタテガンであった。遺言による場合に限りネガンとした。仏には杖は持たせなかった。コンゴウ杖というが、子供か孫が竹の杖を持って見送った。（中里字北山・菅原）

金剛杖は親戚全部が持つ。（下高田字新光寺）

ハナカゴを初め葬式具類は隣組の人が作る。輿（タテ棺用）は千福寺、三ツ屋、久原、虻田部落共有で、お堂に置いてある。昔は縦棺が多く、昭和になってか次第に寝棺になった。（下高田）

デハノゴハン　葬送に先だってお鉢に飯がまわってきてこれは一本箸で食べる。（下高田字新光寺）

デハノゴハンは出棺前のお経をあげている間に重箱に入れて参列者の間を回す。箸二本ついているが、わざとたべるだけである。（下高田）

シラセ　葬式が出るときは、坊さんのオガミがはじまると、組のシが鐘と太鼓を打ってムラ内をまわる。するとムラ内の人が出て見送ってくれる。これをシラセという。

またシラセは、ササドウロウの先に出て鐘と太鼓をうつ。途中三本辻などで花篭をゆすって、中にある金と色紙を落して参列者に拾ってもらう。（下高田字新光寺）

オクリ念仏　葬式の時には葬列と一緒に念仏をしながら送っていく。棺をいける間も念仏をしている。夜また十三仏の念仏などする。（諸戸字日影）

葬列が出るとき、葬式念仏組の女シが棺のあとをくっついていった。

念仏鉦（中里）（撮影　阿部　孝）

出棺　デエの縁側から出る。このときオガラの鳥居をくぐる。墓地に着くと左回りに三回まわる。なかには川原で回るところもあり、大久保ではインドウバで、山下ではお堂の前で回る。坊さんはゴザに坐って読経し、参列者は焼香する。（下高田）

オガラは祝儀不祝儀に欠かせないもので、オガラの鳥居を作って死者の棺をくぐらせて家から出す。ご祝儀はオガラのタイマツを燃して門盃をする。（諸戸字日影）

出棺後に座敷をはき出す。だから平素人が帰ったあとすぐ掃き出すものではないという。もっともご祝儀のときも、もう帰ってくるなといって嫁が出たあとをはき出す。（下高田字新光寺）

仏式出棺役付順位　左は下十二の場合の、仏式による葬列の順位等である。

一、弓

二、先燈竜

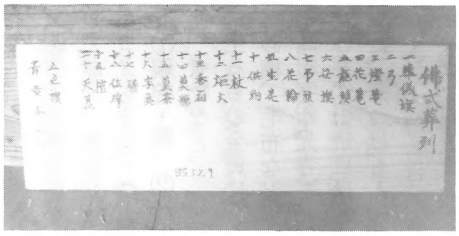
三、竜頭
四、花篭
五、布旗
六、笹旗
七、弔旗
八、花輪
九、供物
一〇、手花
一一、奠湯
一二、奠茶
一三、杖
一四、香箱
一五、膳
一六、位牌
一七、写真
一八、銘旗
一九、墓標
二〇、棺
二一、天蓋（上高田字下十二）

葬列　銘旗・先灯篭～花篭～龍頭～五色旗～色旗～弔旗～花輪～手花～杖～奠湯～奠茶～写真～香箱～膳～位牌～棺～天蓋

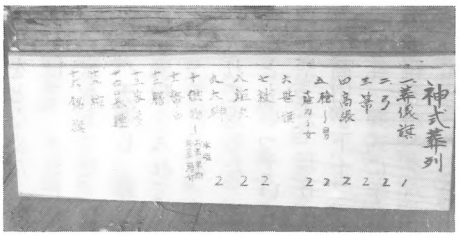
子供など仏に近い関係の人で、天蓋と棺かつぎの人計五人は三角形の布を額につけ、これは棺と一緒に埋める。奠湯はコップに白湯、奠茶は普通のお茶。棺は家を出るときオガラの鳥居をくぐる。（上高田）

神葬祭　明治十八年まで仏式であったが、現在は神葬祭である。土葬で寝棺で頭は北に向ける。午前中には出棺しない。日没になってから出した。土は身内の者が掛けることになっている。

棺を担ぐ者は、子供か、兄弟など近い者から担いだ。



菅根堂にある仏式葬列札（中里）
（撮影　阿部　孝）



菅根堂内にある神式葬列札（中里）
（撮影　阿部　孝）

死者の襟は左前にして少し、ほぐしておいた。足袋の底は取り除き、一部をほぐしておく。こはぜは取っておいた。旅費として六文銭を入れてやった。杖は棺の中に入れない。しかし、葬列の際に持って行った。一番身近かの者が杖を持った。

葬列の順序は、先頭が御神火で灯ろうを竹に吊して持った。二番目が箒、三番目が弓矢で、道引き地蔵の前で孫が北方と南方に矢を放つ。四番目が五色の旗で、この先に剣ほこがついていた。死者が老人だとこの旗をもらう人がいた。

棺を担ぐ者は、座敷からわらぞうりを履いて降りた。この、ぞうりも死者が年寄りだと、式後捨てたものを拾う者がいた。養蚕に使用するとよいとされていた。（妙義）

埋葬　寺の庭か墓地の前の六地蔵で、その廻りを七回くらい回る。略して今は三回くらい。その間はオッシャン（和尚）がお経をあげ焼香する。そして北枕になるようにして埋める。棺は、もっこに載せて穴に下げるが、その綱は必ず切る。切らないまま埋めてはよくない。親族の人は形式的にちょっと土をかけるだけで、あとは穴掘り役の者が埋める。竹矢来をつくるが、これをメッパジキという。山犬が掘りに来るから、防ぐためである。このメッパジキは四十九日までそのままにしておき、四十九日のハカナオシの時処理する。葬送後は、人の家によらないで帰る。（下高田字新光寺）

メハジキ（メッパジキ）　穴に棺を入れると身内の者が土を少しかけ、あとは穴掘りが土をかけて埋葬し終えると、鎌など使わずに石の上で竹をたたいて割り、墓の上に立てる。メハジキという。死者が大

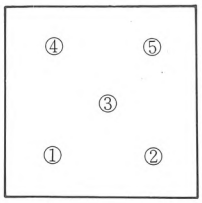
墓　　地
手前の広場が引導場（葬儀場）で、右手に若宮八幡宮の祠がある。（諸戸）
（撮影　関口正己）

墓　　地（大久保）（撮影　金子偉一郎）

人でも小人でも犬などに掘られないように、掘ろうとするとはじくようにやったのである。そして最後に墓上に川原石を、石塔を立てるまで置く。（下高田）

清め　墓地から帰ると玄関口で身体を塩をかけ、片足ずつタライの中に入れ、神棚のオンベロで祓う。部屋に上って坊さんが読経し終ると身内の者、部落の人がキヨメをする。（下高田）

葬式の本膳とひきもの　①親椀・飯。②汁椀・汁。③猪口（また坪）煮豆。④平・厚あげ。⑤皿、煮物など。



ひきものの饅頭は本膳に坐るもの全員に、家々には、布団かわ、お茶、砂糖、毛布などいろいろの変遷がある。（下高田字新光寺）

昔は葬式の日にはお客のお昼にお膳で食事を出した。煮つけもんが主で、シミコン（凍こんにゃく）、うづら豆の煮たもの、厚揚げ、芋がらのオヨゴシ（ごまみそあえ）、お葉のもみ漬けに飯と汁だった。（上高田）

いげ茶　葬式のあとはいげ茶といって一杯きり出さない。（日影）

家族の食事　かまどが使えないから、その家の者の食事は、葬後の寺まいりまで、後の家などでつくってくれる。（下高田字新光寺）

炉の灰　葬後炉の灰を新しくする。畑に持っていってまいてくる。厩肥とはいっしょにさせない。（下高田字新光寺）

(三)　葬後の祭り

寺まいり　もとは葬式の翌日、今はその日のうちに寺まいりをする。米一升をズダ袋（手拭を二つおりにしてぬう。）に五合ずつ二つにくびって入れふりわけにして持参する。またほかにお布施、四十九ヘイ（茶椀に四十九はいのわけ）の米を持ってあいさつに行く。（下高田字新光寺）

ゴクロウヨビ　葬式の翌日、施主は、手伝ってくれた人を呼んで、ふるまった。これをゴクロウヨビといっている。この日、餅をつき、念仏をとなえた。呼ばれて来る人は「ウチジュウ」のつき合いの家の者だけで、メシビツに粉を一升入れて持って行った。ウドンを持って行く家もあった。（八木連字大久保）

オハチ返し　葬式後の供養念仏の日に、呼ばれていく者は、オハチに小麦粉を入れてもって行った。「濃いつきあい」の者は、小麦粉を多くもって行った。これに対し、施主はアンの入った餅を五つ、オハチに入れて返した。これをオハチ返しといっている。また、この餅を念仏玉ともいっている。供養念仏は、むかしはひと七日の日にムラの女衆がやった。現在、ひと七日の供養は、葬式の翌日にすませてしまう。（上高田字下十二）

お礼　葬式に手伝ってもらった村の人には、仏の子どもや兄弟などの近親者が、タバコ、エプロン、金一封を出してくれる。人数を見てそれに見合った金額を出すが、一人前五百円くらいが平均である。上

八木連ではこの時もらった金は区費として村の方へ出している。（八木連）

念仏　葬式のあとや一七日、四十九日のとき一戸一人ずつ出て念仏をやった。おばあさんがいて出れば嫁は出なくてよかった。次第に先に立ってやる人がなくなってやらないようになった。念仏講はない。（上高田）

葬式に参列した男子が全部で念仏を唱えた。葬式の晩に百回「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と唱えた。昭和初期まで鉦太鼓、珠数があった。（中里）

四十九日　四十九日のオダンスも上下からくぼみをつけ、重箱いっぱいにつくり、これをお墓まいりの人に五こくらいずつ分ける。そのオダンスは家へ帰ってから自家の仏檀に供えたのちみんなで食べる。仏事の団子はすべてオダンスという。

四十九日には餅をつく。

四十九日の間は、死者の魂は屋根の棟から離れない、という。（下高田字新光寺）

四十九日に餅をつく。あんころ餅を大きくつくり四こずつ近所に配る。親戚はきてくれるからこれにも四こずつ配る。同じような餅だが、誕生餅は五こ、祝いは奇数、不幸は偶数である。隣り組はきて餅つきなど手伝ってくれる。寺にも四こ届ける。兄弟、子供にかたみわけをする。（下高田字新光寺）

死んだ人の霊は、四十九日間その家の屋根棟から離れずにいるという。四十九日には餅をついて寺へ届けるが、その餅をつく音をさせないうちは、お祝いの餅はつけない。（下高田字本村）

葬式が終って一七日のとき、坊さんにもらった六角塔婆を墓の真中に立てる。一七日毎に墓参するがその度に石でたたき、四十九日までに全部沈める。（下高田）

四十九日に丸いあん餅をつき、来てくれた人々に食べてもらうと共に、半紙に四ヶ位包む。この餅をつく音を聞かないと成仏しないという。またこの日位牌あげといい、身内、部落の人、仏に特に関係ある人に来てもらい、読経、墓詣りする。そして埋葬のとき墓上においたメッパジキ、ハナカゴ等。外して焼却する。（下高田）

キアケヨビ　葬式のあった家の者を、「四十九日」頃、近親者の家が呼んで、酒、肴でごちそうした。家中の者が呼ばれて行った。これをキアケヨビといった。近親者一同が呼ぶのではなく、家ごとにやってくれるので、時には、何軒もの家からつぎつぎに呼ばれることがあった。（八木連字大久保）

忌み　葬式に使った道具、とくに穴掘り用具は七日間は使えない。今では寺に用意してあるのでそれを使う。

神社参拝も、お正月様のお札も、死後一年くらいはさけた。今は四十九日くらいですませてしまう。（下高田字新光寺）

葬式の費用　受け付けなどで組の人が会計はするが、費用はすべて施主もち、このごろは子供がたくさん包むようになった。香奠などはすべて香奠帳につけておく。金以外の反物（旗）とか花なども。またかかった費用もつけておく。他日これを参考にする。

親族ではこのほか米とか薪などの必需品をじかに持って行く場合がある。（下高田字新光寺）

親が亡くなると、子供が話し合って葬式の費用を出し合う。近所の者が会計をしてくれる。（行沢）

ハリ金　葬式の時子どもたちが負担する金のことをハリ金という。それぞれの資力によってちがうが、昔は米一駄分といったもので今でもハリ金はある。上の方から順に出すもので、多いのは三十五万円というのを見たことがあるが、十万円くらいが多い方で、ふつうは二万くらい。子どもたちが金を出すから施主は楽な気でいればよく、ナベカシゴフコウということばもある。これらは御霊前の袋で帳場に出すから受付の人しか知らない。（八木連）

親の葬儀に際し施主の手助けをする意味で、次、三男が負担するのをハリ金という。従って近しい参列者は施主に五千円の香典を出すと、次、三男には二千円位香典を出した。位牌わけは弔旗に包んでやり、これを背負っていく。位牌わけのときハリ金の一部を返した。シュウトミマイというのはない。(上高田)

参列者は香典を施主に出すだけであるが、葬儀費用は他の弟妹も分担する意味でハリキンを出し、香典の中に一緒に入れる。位牌わけのとき施主は他の弟妹達に金銭をはりつけてやる。位牌に対する線香代としてである。(下高田)

シュウトミマイ　舅・姑が死ぬと、近所の人が金銭を持って、お見舞に行く。三十五日たつと、キアケ(忌明)といって、見舞をくれた人を招いてごちそうした。二た七日すぎれば、いつでもオタナアゲ(七七忌)をしてもよい。二十一日目に四十九日をすることもあるという。(中里)

親が死んだ場合、長男が施主となり、ハリキンが大変だからわざとだけれどといって香典を次、三男の人に直接渡す。これをシュートミマイという。ハリキンは次、三男が出して兄の手伝いをする金銭をいう。今はハリキンとして次、三男が十万円出すと、形見分けのとき長男は半分位返している。この習俗は下高田の久原にあったが、上高田の下川原、山下などにはない。(下高田)

イミアケ　嫁ごが不幸に行って、帰ってくると、近所の女衆が、ヒアケといって、お見舞きくる。(中里)

カタミワケ　位牌分けの時に親のかたみを分ける。女衆の着物、その他を分けるが、男のものは少ない。(行沢)

四十九日以後に片身分けを行なった。(中里字北山・菅原)

位牌　嫁の親の位牌は、嫁が死んだらその棺の中に入れてやるという。もらって来た位牌は、いってみればヨソモノだからそうするというが、いつかそうしたら切ながるのでふつうはできないともいう。(上高田字下十二)

(四)　年　忌

年忌　四十九日の後百ヵ日、一周忌、三年忌、七年、十三年などの年忌がある。

エダ塔婆
(下高田　生寿寺裏墓地)
(撮影　都丸十九一)

三十三年忌にはワカレ塔婆のエダ塔婆をたてる。エゴの木の二又になっているのを、二つ割りまたは両面を削って戒名を書いて墓に立てる。以後代々で、先祖といっしょになってしまう。

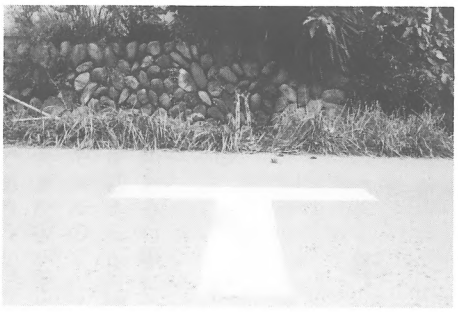
屋敷を守ってくれる神様が、自然石で祭られているが、ここには三十三年たった人が入る。(下高田字新光寺)

一、三、七、十三、十七、三十三年忌にワカレ塔婆を立てる。何の木でもよいが二岐の木を山からとってきて、寺で経文、戒名等書いてもらう。山下では三本辻に立てている。(下高田)

枝塔婆　三十三年忌にエゴの木の二又のを削って、坊さんに書いてもらった枝塔婆を三本辻に立てる。これで親子の縁が切れるという。(上高田)

枝つき塔婆は三十三年忌に立てるといい、新光寺で見たのは、ナラの木の枝塔婆で雑木でよく、杉、松でもかまわないという。上八木連ではなく、下八木連は全部神式なので見たことはない。(八木連)

「三十三年忌の枝塔婆」という。普通の塔婆はモミの木だが、これは雑木で枝の出た適当な木を三尺ぐらい切ってきて、一面だけナタで



三本辻の枝塔婆（下高田）
（撮影　池田秀夫）

けずり、その上をカンナをかけてなめらかにして字を書けるようにする。裏側は丸くなったままである。これをお寺へ持って行って坊さんに書いてもらう。お寺で書いてもらうと金を包んで行ってもらってくる。（諸戸）

枝塔婆は三三年忌の時にあげる。自分で山から切って来て、字はお寺で書いてもらう。これで供養は終りになる。（菅原）

仏の供養は、三十三年忌に別れ塔婆をもらってきて、たいていそれで終る。塔婆は上部がフタマタになって枝が出ている。シデの木で作るのがいい。聞いた話だが、仏様は三十三年までに思い思いの宿をかりて身に合ったいい所へ生まれ変るという。三十三年たてば寺と関係なくなり、消えてしまうという。（行沢）

三本辻の枝塔婆（下高田）
（撮影　池田秀夫）

三十三年忌にワカレトウバを立てる。木の枝先が二またにわかれたものを墓に立てて仏の供養をするが、これが仏事の最後で、以後は先祖の仲間入りするので、個人としての法事はしない。（妙義）

三十三年の別れ塔婆といって、人がなくなってから三十三年たつと、その仏様の供養はしなくともよいという。そのあとは御先祖様のほうへまつられるといった。（下高田）

(五)　その他

葬式　明治十八年まで仏教が中心で仏式だった。寺は白雲山高顕院石塔寺で真言宗だった。現在の妙義神社の社務所が寺だった。

現在は神葬祭になっている。盆踊りはない。妙義神社で御嶽山の行者が火わたり、探湯が行なわれた。現在もその釜が社務所の軒下にある。（妙義）

ダミ　田植、養蚕などの忙しいときや経済状態の悪いときは、仮埋葬しておいて、他日本葬にする。これをダミという。（下高田字新光寺）

墓地　菅根堂の脇の墓地に、胎児や行倒れの人を葬った。普通の墓地では、入口の方に子供を葬り、大人は奥に埋めた。別に子墓とはいわなかった。（中里）

えい児の墓（中里）（菅根堂境内）

子供墓地　七歳未満の子供はそこに埋める。個人の墓にも、ムラの墓にも子供だけの墓地がある。（下高田字新光寺）

死者の着物　裾を洗って北向きに干す。なお、死者の着物は川原で燃した。（中里字北山・菅原）

耳ぷさぎ　同年のものが死ぬと、焼餅で、耳ぷさぎをする。耳ぷさぎをしなきゃって、いうだけで今はしなくなった。（菅原）

ムラ内の同年令の者がなくなったときには、馬の糞を紙に包んで耳をふさいだ。いやなことは聞くなということである。（下高田）

先祖供養　菅原の養雲寺では檀家六百戸以上もあるが、三月十五日

に先祖代々供養の塔婆をまとめて作って配る。檀家は二千円ずつ納める。（諸戸字木戸・久保）

先祖祭りとしては、墓石を立てた時に集まるくらいで、毎年はやらない。（菅原）

特別先祖供養はしないが、三年忌、七年忌をする時に、一緒にすることがある。おっしゃん（和尚）が経を別にあげ、先祖代々を供養する塔婆も別に作ってくれる。彼岸か命日にする。近い親戚を呼んで引き物を出す。

昔は「三十三年の捨て塔婆」といい、これをすれば、後は故人は祭らなかったが、今はお寺で五十年祭とか百年祭に当る先祖を拾い出して案内をよこすので、できる人はする。（諸戸）

年中行事

はじめに

妙義町の特色ある行事について、幾つか拾い出してふれてみたい。

正月に年神を迎える正月棚は、昔は毎年新しい六尺板を買って用いたが、マツはモメルので、スギの板を選んだという。(諸戸字日影)

山村なので大きな板が手に入れやすかったのであろうが、マツ板を忌むのはなぜであろうか。

年男が正月行事の司祭者となるのは、他地区とも共通だが、マツの枝や豆木をしばって箒になぞらえ、座敷中を掃くまねをして「銭・キレ・ヨロズの宝ヲ掃キ集マレ」と唱える家がある。(諸戸字日影)

同様に三ガ日の朝早く、主婦が松葉で作った箒を持って、座敷を右回りに三回回り、「ゼンキンヒョウロウ、ヨロズノ宝、掃キゾ集マレ」と唱える岩井家の実例もある。(八木連)

さらに、六日年にスリコギ・スリ鉢を持って家の中を回る家例もあったという。(上高田字山下)

勢多郡宮城村の民俗調査(昭和五十五年七月実施)で報告された粟穂・稗穂の行事においてイロリを回ったのと同様の意味をもつ民俗と考えてよいであろう。前二者は松葉でなぞらえた箒という採り物で、福を招く所作になっている点に違いはあるが。上高田のようにスリコギ・スリ鉢が用いられた家例は、食物の豊かさを願う気持ちが、性的な意味を含めてもっと単的に表われているといえよう。

正月の食習として雑煮餅を食べるが、雑煮には必ず里イモを入れるので、里イモが入らないと雑煮らしくないという(八木連)。里イモをハレの食物と考えていたことがわかる。

二日の仕事始めに、畑に行って一クワか二クワ、土を耕すまねをする家がある(本村)。さらに、四日に田の水口に、一升ますに入れたオサゴ(米)と頭付の魚を供えて、テンガ(手鍬)でクワイレのまねをするともいう(本村)。十一日はクワダテ行事をする所が多いが(行沢・下高田など)、正月の仕事始めとしてみると、二日や四日にクワダテに類した所作が移行してもうなずけることである。さらに精しく調べてみたい。

なお、クワダテをカダテともいい、カダテに供えたオサゴを持ち帰って、十五日のかゆの中に入れる所がある(下高田)。稲作の予祝儀礼として興味深い。

四日は嫁ゴの年始日で、初嫁の夫婦は実家へ年始に行くが、西上州でよく聞くナベカリの行事がここでは聞けなかった。忘れられたものか、さらに調べたい。

六日は年取りで、六日年といい、山入りをする。山に行き、小正月に用いるマユ玉の木やモノヅクリのヌリデンボ(ヌルデ)を伐って来る。隣接の富岡市などが五日にするのに対し、安中市が六日にしているので、その方に類しているといえよう。

八日は正月が終り、麦飯(ばくめし)になるという(菅原)。元日から七日までのいわゆる松の内が終って、ふだんの生活に戻る意味であろう。一方、八日に山に入ることを忌む民俗があり、同じ西上州の多野郡吉井町で八日山を忌む風習と共通している。

ここでは「八日に矢を射って、十二日に矢が落ちる」といういい伝えがあり(日影)(古立)、それが何を意味するのか、よくわからない。あるいは、有名な百合若大臣の伝説で、碓氷郡松井田町五料から射た矢が、山頂に星穴を射貫いて飛び去り、甘楽郡西牧村矢川(現下仁田町)に落ちたといういい伝えと、関連するものであろうが、はっきりしない。

この地域は十二日に山の神を祭るが、北上州一帯のように山の神を「十二様」と呼ぶことはない。しかし、十二講をする所があり(八木連)(菅原)(行沢)、地名に上十二・下十二などもあるから、古くは十二様と呼んだことも考えられる。西上州から南上州にかけて、山の神と呼んで十七日に祭る地帯があり、接触地帯といえよう。その点では、十二日に山の神を里へ呼んでごちそうし、十七日には山へお帰りになるので、里から山へお参りに行ってごちそうになるという伝承が(諸戸字木戸・久保)、十二日と十七日との関係を説く珍しいいい方をしている。十七日の行事については伝えていないのが惜しまれる。

小正月のマユ玉づくりは、十二日の夜に米の粉をこねて丸めて置き、十三日の朝ふかして、木(ボク)の枝にさして飾る。十二日をマルメ年という(行沢)。マユ玉をさした木(ボク)は八畳間にいっぱいになるくらいに枝をひろげるが、大正月に正月棚に飾ったミカン・干シ柿・スルメ・コンブのほか、飾り菓子まで吊り下げるので(妙義)、豪華な飾り物となる。養蚕地帯なので、木(ボク)をマブシといい、マユがたくさん付いた形に見たてている(行沢)。

さらに、十三日に若餅をついて、長さ五寸(約十五cm)くらいに細長く切り、カシの木の枝にさして、蚕が桑の葉を食う形を表わす家もある。カシ餅といって、台所の入口に飾り付けたり(諸戸字日影)、大黒柱に飾り付けたりする(行沢)。常緑樹のカシの枝にマユ玉飾りをする例は県下にとびとびに見られる。

しかし、マユ玉は必ずしもマユの形ばかりでなく、丸形が最も多く、里イモの形などもあり、食べると風邪をひかないともいう。養蚕だけでなく、もっと幅の広い豊作を予祝したものであろう。

なお、マユ玉を作った時に、イロリのホドに二個投入して、火神様(ヒガミサマ)に供えるという。火神様をヒデンボサツ様と呼んだというが(行沢)、都丸十九一氏が推定されたようにホドの神を普賢菩薩と呼んだのであろう。

十四日のドンドン焼の時、ヌルデの刀二本を持って行き、小刀を道祖神に供え(行沢)、あるいは、火中し、大刀は火入れして焦がして持ち帰り、家の玄関に掛けて置いて魔除けとする(下高田)。木刀を作ることが盛んな地域といえよう。

ドンドン焼の火は、松の燃エクジに移して家に持ち帰り、年よりのタバコの火にしたり、湯を沸かして茶を飲むと丈夫になるという(八木連)。燃エクジは火を消して屋根の上に投げ上げて置くと火災除けになるといい(中里)、ドンドン焼の灰を家の回りにまいて、蛇・ムカデ除けにする所もあった(上高田)。ドンドン焼の火は家へ持ち帰るべきものだったので、木刀を焦がし、燃エクジを拾い、灰まで持って来る民俗となったのであろう。

道祖神の鳥追い行事は、あったらしいというが、すでに記憶から消えていた(行沢)。

菅原では道祖神祭りを十六日に行ない、十二人の世話人が出て男女の神を木で作り、新婚の家庭を巡って祝った(戦前まで)。道祖神ねり、悪魔払いの行事という。なお、大牛では四月十五日の春祭りに、若い衆が木で作った男根を持って神輿行列の先に立ち、ゴモットモサマの行事をしていた。奇習として消え去らないうちに、記録して置く必要があろう。

正月の終りを示すシマイ正月については、十七日(菅原)、二十日(行沢)。二十八日(菅原)と、地区によってまちまちで、正月送りの行事は聞くことができなかった。なお、二十日正月の行事であるわら仕事

なども聞けなかった。正月行事も下旬になると、記憶から薄れたものであろうか。

二月一日を「次郎ノ一日」ということは、この地域ではなかった（行沢など）。

節分の豆マキに用いる豆はほうろくでいるが、いり方は三回いる（下高田）、七回いる（八木連）という所もあり、豆が生だと厄病神が入るといって忌まれる。とくに丁寧に豆をいることが強調されていた。

初午の前夜をオシラマチといい、正月の松を取って置いて、イロリで燃した家があった（諸戸）。西上州の奥多野地方で盛んな行事だが、この地域でもかつてはあった古い民俗であることが推定される。

初午にはだんごをクワの三つまたの枝にさして、神様に供えると養蚕が当るといい（八木連）、マユ玉を作り、一升マスに稲わらを敷いて山もりに入れて、床の間の蚕神様に供えるが（行沢）、初午を蚕神祭りとして、蚕神＝オシラ様と考えているのであろう。東上州のように、初午に屋敷稲荷を祭る例は見られなかった。

二月十一日ごろ、一戸一人ずつ集まって、集落の一年の行事や定めごとをするのを、ケイヤクとか春祈禱と呼んでいる（諸戸）。春祈禱といっても、別に神主が拝んだりはしないというから（妙義）、村落生活上の行事となっている。

天神講は県下一般には二月二十五日の菅原道真の忌日を中心に行われる子どもの行事だが、この地域では三月二十五日の所もある（行沢）。しかも、女衆ばかりの寄り合い行事で、餅をつきケンチン汁を作って、男衆や子どもを呼んでごちそうする所がある（下高田字本村）。甘楽郡南牧村磐戸でも女子が天神待をしたというから、共通しているものであろう。

三月節供には、嫁はサンマの干物とヒシ餅を持って、実家へお客に行く（八木連）。これは五月節供に嫁がタラの干物を持ってお客に行くのと（行沢）、対照的で、それぞれに節供の魚を示していておもしろい。

彼岸には里イモが用いられる。取れ秋の彼岸には「仏様がイモを食べに来るから、掘って仏様に上げな」といい、里イモをゆでてダンゴに握り、小豆を塩あじに煮て付け、イモダンゴを作った。春の彼岸には「仏様がクサレイモを食べに来るから、早く煮て上げな」などといった（上十二）。里イモを仏様への供え物として重要視する伝承である。

なお、この地域ではダンゴは丸形を指で押して凹めたもので仏事に用い、神事その他に用いるものはオダンス（団子？）と呼んだり、マユ玉のダンゴと呼んだり区別する。

彼岸の中日には、天道柱（てんとうばしら）の所に花・灯明・線香・水を供えて、お天道様（太陽）に無事をお願いするという（本村）。天道柱は座敷の南の縁側の中央で庭に面して立つ柱で、七夕の笹飾りもこの柱に結び付けられる。名称のとおりに、天道柱の意義が生かされている民俗といえよう。

五月節供については、フキゴモリや「女の家」などの言葉は、すでに忘れられていた。しかし、ヨモギ・ショウブを軒にさすことは行なわれ、これらの草が三日のうちに枯れれば、いい年になるという年占があった（菅原）。

昔は、五月節供に若い衆が大桁（おおげた）山（標高八三六m）に登って、ワラビ取りをしたという。（下高田）

なお、五月八日には村中の人が南にそびえる稲含（いなふくみ）山（標高一三七六m）の山開きに登拝したといい（北山菅原）、マユ玉を十五個借りて来て、次ぐ年に二倍にして納めたという（行沢）。稲含神社の信仰圏の広がりを示す行事として興味深い。妙義神社北方の天狗堂の祭りは三月十七日で、同様にマユ玉を借りて、翌年二倍にして返し養蚕倍盛を祈願する行事が、地元の人々によって行なわれた（行沢）。

七月農休みの時、初めての嫁は嫁ぎ先で着物を作ってもらって、それを着て実家へお客に行く風習があり、ショウボン（生盆）と呼ぶ（下高田）。勢多郡北橘村などでいう「生き盆（い）」のことで、本来は里の生き

ている親を祝福する行事と思われる。

七月十九・二十日の農休みのころ、天王様のお祭りがあり、村中が麦わらを持ち寄って燃やす行事があったという(八木連)。この地域では、七日火・七晩ゲなどと呼ばれて門火(カドビ)を燃やす風習が聞けなかったが、別の形で麦わらを燃す行事が残ったのであろうか。

石尊(ぎょう)行は盛んだったようで、七月二十八日に下八木連・行沢・北山菅原など、三十日には大牛などで、人々が集まってボンデンを立てて、水をかけ合った。その日に悪魔除けの八丁ジメを村の境界に立てた。

七夕は八月七日にするが、笹飾りの先端に色紙を細かく切り込んだスカリ(網)を飾る。この先端は流さないで取って置き、菜・大根の畑に立てて虫除けにしたり(行沢)、蚕が当たるように呪いに使ったりした(八木連)。笹飾りは単なる飾り物ではなく、盆に迎える祖霊のヨリマシとして扱われたので、マンジュウをメンパに七個入れて笹飾りの前に供える家もあったのであろう(大久保)。

七夕には雨がたとえ幾粒かでも降ることになっていたので、日でりの時には七夕の雨を待っていたという(菅原)。行沢でも七夕雨といって、七夕には夕立があるものという。七夕様に対する農民の期待が表われている伝承であろう。一方、七夕の日には菜ッパ類を蒔くなというのは(上十二)、なぜであろうか。

七夕にはメズラ畑に入るなという禁忌が佐波郡境町などにあるが、忌(いみ)こもりの行事を伝えているものであろうか。

盆に祖霊を迎えるための盆棚は、組立式のものをよく見かけるが、四隅に笹竹を立ててチガヤの縄を張る。この笹竹の葉が一枚だけしなびない所から仏様が上ったという(行沢)。安中市秋間の民俗調査でも同様の伝承があったが、笹竹は祖霊のヨリマシの働きをしたもので、七夕の笹竹と一連のものと考えられる。

菅原では盆棚のチガヤの縄に、寺のカヤの木の枝を吊す。迎えた先祖様が蚊に食われないように、かや(蚊)を吊るのだという。迎える家族の優しい心情が表われている。

盆棚には東上州の家々でよく敷かれるマコモやカヤのござは見られなかった。かわりに新しい盆ござを買うことで間に合わせている。盆棚の下に竹の枝や杉の枝を置いて、無縁仏が杉の葉の蔭でごちそうを食べるという(行沢)。無縁仏のヨリマシとして置かれたものであろう。一方、盆棚の下の無縁仏に供えたボタ餅を食べると夏やせしないといって、他家のものをもらって食べたという(下十二)。仏に供えたものを下げて食べることは、ナオライ(直会)であり、仏の霊力を身に付けることと考えていたのであろう。

盆迎えは家族全員が揃ってカド(カイド)から迎える。麦わらの迎え火を焚いて提灯のろうそくや線香に火をつけて家まで迎えて来る。この時、道の両側に線香を二、三本ずつ立てながら家まで来て、その煙に乗せて盆様を迎える家がある(下高田)。家につくと、庭先の縁側(ナカトという)から直接上がる家があり(八木連)、盆棚に火を移して、盆様を迎えたこととする。縁側から上がる時、縁側にござを敷いて置き「仏様ノ足洗イ水」といってどんぶりに水を入れ、ミソハギの枝を入れたものを用意して置き、ミソハギの枝で水を振りかけて、仏様に足を洗ってもらうのだという(下十二)。丁重な迎え方をしている。

盆迎えの夕食は、盆棚の前で家族が食事をするが、この時、イワシなどのナマグサものを食べる。盆様に口を吸われないためだといい、これを盆魚と呼んでいる(下高田)。多野郡上野村などでも、盆魚は食うようにいわれるが、盆は純粋な仏教行事だけではないことを示しているといえよう。

盆提灯について、以前はオガラを三角形に組んで障子紙を貼って作ったものを用い、盆送りの時に墓へ置いてきたという(本村)。麻の産地でオガラが豊富にあったこととも関係があろうが、よそでは聞かない風習である。

盆送りは十五日の夕方にするが、盆迎えと逆順に、家族が盆棚の前

で夕食をすませてから、提灯・線香・水・みやげ物などを持って、縁側から降りて、カドまで送り出し、送り火を焚く(諸戸)。盆棚は翌十六日にこわすが、盆棚の竹などを子どもが集めて、堤の端や辻で燃す所がある(大久保・下高田など)。甘楽郡鏑川流域の火トボシや百八灯の行事と共通するもので、正月行事のドンドン焼にも通じるものと考えられる。

旧八月一日(現九月一日)を八朔(はっさく)といい、嫁が実家へショウガを持って行き、帰りに水汲み用のひしゃくを貰って来る。「ショウがない嫁だが、すくってくれ」という意味だという話もあるが(本村)、どんなものだろうか。

十五夜にはまんじゅう・果物・大根二本を箕(み)に入れて縁側に供えるが、大根は箸の代りだという(妙義)。

十三夜はススキでなく、カヤの穂を三本さすところが十五夜と異なる。

神無月の神送りや神迎えは聞けなかった(諸戸)。まったく無かったのだろうか。

鎮守吾妻(あづまや)屋神社の秋祭り(宵祭り)の時、うどんを作るが、ネギを使うなという。ご神体が白蛇なので、ネギを食べると、蛇が腹の中で生き返るといって、ネギを忌む。祭りの前に香りの強いものを忌み慎しんだのであろう。

十日夜には、昼間は米粉のマユ玉をますに入れて床の間に供えたというが(下十二)、初午にマユ玉を供えたのと同じ形である。夕方は餅をついて、お供餅を箕の中に入れ、立ち臼の所に供えた(同所)。箕に入れて供える例は他地区にもあるが、臼の所に供える例は珍しい。妙義ではアン餅を十個、お天道様に供えるというが、どんな供え方であろうか。

カワビタリ餅の行事は早く消えたらしい。十二月一日は小豆モノを食べないうちは、橋を渡るな、川へ行くなといわれた。もし、行くと川流れになるという(上十二)。また、カビタリ餅は馬にも食べさせたという(下高田)。川と馬とのつながりを示す伝承であろう。

コト八日とかコトの日とかいわれる十二月八日の行事は、早くから忘れられたらしく、名称を聞いたこともない人が多かった(菅原)。

ツジュウダンゴは十二月十一日に、手で握った形のダンゴを作り、萩の枝に五個さして、トボグチにさす。鬼にぶつけるためというが、歌がついているのは、珍らしい(本村)。ヒツジダンゴ・ニギリダンゴといったり(木戸・久保)、チュウチュウダンゴといったりする(本村)。期日が貫前神社のオミト(御戸開祭)の前夜になっているのも、この地域の特色であろう。

ネズップサゲは貫前神社のオミトの行事の日(十二月十二日)に、ヤキ餅を作って二またの枝にさし、「いいことを聞け、悪いことを聞くな」と唱えながら、左右の耳を交互にふさいでから戸袋にさしたという(八木連)。耳フサゲ餅の行事が加わるのは珍しい。

屋敷祭りは現在は十二月十五日が多いが、以前は酉の日(八木連)や午の日(上十二)だったという。二月初午と関連があるのだろうか。屋敷神のオカリヤを新しく作り替えたので、タテジ(新築)の祝いとして、コモチ(粉餅)を菱形に切って近所の子に分けてくれたり(上十二)、タテジのように餅を投げる所もあるという(上高田)。

屋敷のツボ庭をロジ(露地)といい、その中にあるオシリョウ様を屋敷祭りの時に祭る家があったのは(日影)、オシリョウ様の分布を知る上で興味深い。

なお、先祖を祭るという若宮八幡が屋敷神の隣りにあり、竹二本立ててシメ縄を張って、屋敷祭りの時に一緒に祭る(諸戸)。屋敷神・若宮八幡・オシリョウ様という三社の関係を知る手がかりとなりそうである。

ダイシッケエ(大師粥)はおひつに入れてあげ、長い萩の箸で食べるという(菅原)。この粥を食べると、ハエがいなくなるので、ハイオ

イといい、ハエが「おれが帰ったあと見やがれ、寒くなっていい気味だ」と捨てぜりふを残して行くとのことである（上高田字山下）。人間とハエとの交流を伝えていて興味深い。

二十七日は「女と馬の年取り」といい、米飯にケンチン汁・魚を食べ、馬や牛にも米飯をくれるという（日向）。安中市秋間地区でもこの日を「女と馬の年取り」という。利根郡では十二月一日の川渡りの日を馬の年取りと呼ぶが、日がズレているのはなぜだろうか。

二十七日には暮の大掃除をしたり、正月用の松迎えやシメ飾りを作ったりする所がある。山から迎えてきた松は日影に置き、お頭付きの魚を二尾供えて置くという（下十二）。松は年神のヨリマシとして神聖視されたのである。

三十日には餅つきをしたり、シメ縄などの飾り物を作ったりする（菅原）。コジックメという短いシメ縄を、三十本とか六十本とか作って、家の内外の神々に供える（諸戸）。この日はかなり忙しく、正月の準備に追われた。

三十一日の大晦日は大正月の前夜にあたり、小正月の前夜の一月十四日とともに、オミタマ様を祭る家がある。三十一日には米一合を炊き、むすびに握ってメンパ（鉢）に二つに分け、箸四本を立てて仏壇に進ぜた。残りの飯は「ハチナデ」といい、古い椀にもり「虚空蔵サンニ進ゼマス」といって神棚の隅へ供えるが、ネズミに進ぜるのだという（大久保）。オミタマ様は祖霊と考えられ、正月の初めに祭ったものであろうが、箸四本は何の意味だろうか。二組の供え物と考えられるが。

本文においては、各項の記述は川上から川下の地域へ及ぶように並べて、行事の変化がみられるように配慮した。上流の旧妙義町地区と、下流の旧高田村地区との間には、かなりの習俗の差を見ることができる。（関口正己）

一　月

元　日

年神　年神様は卯（う）の日にオタチ（出立）になるから、年によって違うが、早く卯の日が来る方がいい年で、稲がよく取れるという。稲のできがいいと、重いので一束しょってもつぶれるほどだという。卯の日が遅くて、年神様が長くいる年は、束はあっても実入りが軽いので、よく取れないという。正月送りのための幣束などは外には出さない。（行沢）

年神様は正月棚に天照皇大神と並べて祭る。卯の日の卯の刻に、この棚を取って送り出した。（古立）

正月様は卯の日卯の刻に御飯のオタキアゲをして進ぜたあと、庭に送り出した。年神様がアガルという（下高田）

正月様は卯の日の卯の刻にアガルといった。お正月様があんまり長居をする年はよくないといった。（下高田字新光寺）

年神棚　長さ六尺、幅一尺の新しいスギ板を、竹二本渡して天井から吊した。毎年新しい板にする家と、同じ板を使う家とがある。アキの方へ向ける家もある。年神棚のある一部屋に七五三に下げたシメ縄を張り回す家もあった。神棚にいくつかの神を祭る家もある。（諸戸字木戸・久保）

年神棚は昔は毎年新しい板を買って来て飾った。マツの板はもめるのでうまくない。スギの一枚板を買った。長さ六尺、幅一尺、厚さ三分の板を使う。

板には左右二か所に縄をかけて天井から吊るしたが、向きは家の向きによって、東向きや南向きにした。人が下を通らない所に吊した。エビス様の棚も人が通り抜ける所ないけない。下を通ってはいけない

という。（諸戸字日影）

正月棚は暮の二十七日に棚板をキヤから買ってきて、三十日に新しく作った。ザシキに東向きに作る。そしてその前に竹を渡してこれにミカン、栗、ネギ、イカ等をつるし、正月十一日まで置く。（下高田）

正月棚は神棚の向って左隣に常設の白木の板幅一尺、長さ二間の吊り棚である。ここへ年神様をまつる。年神は伊勢の皇大神宮である。十二月二十七日か二十八日に年神をまつり、幣束を両脇に立てる。正月棚、神棚にもしめ縄を張る。お松は三十日に飾る。

正月棚の前に棚とほぼ同じ長さの竹竿を一本渡し、そこへ、カチグリ、干柿、スルメ、ミカン、田作り（またはイワシ）、コンブを、それぞれつるして供えた。

棚には供え餅二重ね、おみき、若水、朝晩の食事を家族の食事前に供えた。（下高田字本村）

正月のオタナは毎年松板六尺×一尺くらいのを買って来て、ザシキの北側の隅にしつらえた。（下高田字新光寺）

カド松　屋敷の入口に松を二本立てる。松グイを二本立てて、松をしばりつける家もあり、入口に松を針でぶつける家もある。松グイは雑木なら何でもいい。マキ（たきぎ）を寄せて、松と竹を立てる商家もある。（諸戸字日影）

門松は三階松で、赤松を使う。丈の長い松で、竹は雄竹と雌竹を立てる。一番下の枝がひと芽のものが雄竹で、二本のものが雌竹、杭はエゴの木の三尺五寸ほどのものがよい。モミソは身上をもむので悪いという。（家によっては五、六尺の長いものもあった。）（八木連）

門松はナラの杭をそえて立てた。また松へしんぜものをするときは、つぎつぎに供えて行って、終ったらかならずもときた方へもどってから、家の中に入るものだといわれた。例えば家の入口の近くに立てた松が、最後の松だとしても、そこからすぐ家に入ってはいけない。（上高田字上十二）

カマ神さまの松　釜神様に供えておいた松はとって置いて、雹が降った時とか、雷が鳴った時、火をつけて庭にほうりだした。（下高田字久原）

年男　その家のおとなで男衆がやる。ふつうは主人公がなった。三が日の三度三度の食べることを年男がコサエル（こしらえる）家もあり、女衆は楽なものだった。（諸戸字日影）

年男は一家の世帯主がする。年男は正月の家庭の式を司る男で、元旦から七草まで家族の中で一番早く起きる。井戸から若水を汲み、それを正月棚、門松、屋敷神、倉の前、かまど、臼、馬屋、井戸、便所に進ぜる。次に朝湯をわかす。次に朝食を作る。朝食はたいていの家がぞうにである。（下高田字本村）

若水　井戸から、そのうちの年男（世帯主・長男）が汲む。それで雑煮を作る。雑煮には、ゴボウ・ニンジン・イモを入れる。ソバ家例の家もある。（菅原）

若水は年男が「家中マメ（健康）で暮らせるように」と拝んで、井戸から汲んで、年神様に上げた。（水道は昭和28年ごろから入った）。（諸戸字日影）

若水は年の一ばんはじめの水、年男が家族の寝ているうちに汲んで来て、正月棚などに進ぜ、炊事作りに使う。（下高田字本村）

若水は元日の早朝、井戸から水を汲んで、湯を沸かしてお茶を入れて供えた。（下高田字新光寺）

火　元日にはじめてカマドに火を燃やすときは、成木を燃やせといわれた。豆ガラを燃やした。（上高田字下十二）

朝湯　昔はたてて、近所を呼んだ家もあった。（諸戸字日影）

朝湯は年男が元旦の朝たて家族全体が入る。入り方は、一家の一番年長男が入る。その後は誰が入ってもかまわない。（下高田字本村）

供え物　松飾りをした内外の所に、年男が供え物をして回る。外に供える容れ物は白メンパ（白木メンパ）で、餅や大根を細かく切った

ものを入れて、カサヤナギの箸で供えて回る。家の中の神棚・床の間・仏壇・エビス大黒・カマ神などへ進ぜるものは、メンパ（小メンパ）に盛って進ぜる。

大ミソカから三日まで供えた物は、四日に下げておかゆ（オジヤ）に入れて食べた。（諸戸字木戸・久保）

供え物は年男が重箱に食べ物を入れて、外の松飾りに供えて回る。松の葉ッパにうどんなどを引っ掛けてくる。（諸戸字日影）

初参り　妙義・中之岳・一の宮などへ、夜中に出かけてお参りした。男も女も、よそ行き着をして出かけた。神社では特別に何も出さなかったが、オミクジを引いた。

大歳（十二月三十一日）の夜は寝ないで、お参りに行き、二年参りをした。（諸戸字日影）

一軒で年長の男が一人、お寺と高田神社へ朝まいりした。（下高田字本村）

年始回り　十年ほど前までは、元日に日影全部を回った。元日の朝、飯を食べてすぐに出かけた。昔は雪があったり、泥道だったので、霜がとけないうちに回ろうというので、下駄をはいて、普通の支度で歩いた。着物の人もいた。（諸戸字日影）

年始まわりは一代前のころは、紋付きを着て村中をまわった。その年の恵方をみて最初に行く家をきめる。それからは順番になる。その後は、近所、友人、親せきをまわった。現在は一か所に集まって新年会をする。（八木連）

元日には村中寄り集まって年始をする。熊野神社に拝礼したあと、帳面があって村の申し合せをして書きこむ。山の下刈りとか、村の行事をきめる。そのあと一杯飲んで新年会とする。（上高田字下十二）

家例　佐藤氏　十二月三十一日に餅をついてはいけない。先祖が貧乏していたから。

竹田氏　三元日はソバ、昔、菅原へ住みつくとき貧しくて食べるものにこと欠き、ソバは七十日で実がとれるので播いた。その先祖の苦しかった昔を偲ぶためという。（菅原）

三ガン日にヤマイモを食えば中気にならない。

三ガン日は餅を食わないで、ソバを食う家もある。

芋デンガク・豆腐デンガクはない。（諸戸字日影）

雑煮は人参・大根・ゴボウのほかに必ず里イモを入れる。あればヤツガシラの方を入れる。イモが入らなければ正月の雑煮ではない。金を出したもの（買ったもの）は入れない。（八木連）

三元日、広木家はウドン、藤井家・須藤家は雑煮、三元日のうちに夕食にトロロイモをたべることになっていた。（下高田）

赤尾家では、十二月三十一日の夕はミソカソバ。三ガ日朝ソバで、昼に餅食べたければ食べる。四日に始めて餅をたべる。（下高田字新光寺）

掃除　座敷を掃く時に、年男がマツ（高田）、マメ木（八木連）を二所（トコ）しばったもので、座敷中を掃き回してから、箒ではく家もあった。この時に、「銭（ゼニ）、キレ、ヨロズノ宝（タカラ）ヲ、ハキ集マレ」と唱えてから掃いたという。（諸戸字日影）

一月一日から三日まで、三ケ日の朝早く、松葉でつくった箒をもって主婦が「ぜんきんひょうろう　よろづのたからはきぞあつまれ」と唱えて座敷内を三回、右まわりでまわる。（八木連・岩井家）

元旦には掃除をしない。（下高田字本村）

ハガタメの膳　掛川満弥家では、昔から正月三ケ日の朝には、ハガタメの膳といって、アンを入れない小さな餅を家中で食べてから、普通の雑煮を食べるのが習わしで、これは今も続けている。（菅原）

正月の来訪者　正月の初絵に、七福神と絹笠様を買う。初絵は負かすもんじゃない、いい値で買う。二枚で十銭だよといえば、はいといって買う。負けろっていったのは、何十軒のうち、何さんだけだと、話の種になる。一銭か二銭で買って来て、大晦日の十二時過ぎると、「初

絵買ってくんない」と売りに来た。（菅原）

元日の朝早く、初絵を持っておとなの人が売りに来た。「オ早ウガンス」といって、家の者を起して売るので、二枚ぐらい買った。初絵は、宝船・エビス大黒・七福神・キヌ笠様などの絵で、一枚二銭だった。

初絵は高崎の亀桝屋から仕入れて来て、一枚五厘くらいのものを、三枚十銭で売ったこともある（当時は土方の人夫賃が一日五十銭だった）。（諸戸字日影）

夜、初絵売りがどこからかはっきりはしないが来る。男である。絵は、キヌ笠様や七福神が描いてある。（下高田字本村）

大みそかの夜おそく、一月一日になるかならないうちに初売売りがどこからともなくきた。縁起物だから、高いのを承知で買った。（下高田字新光寺）

元日の朝早く初絵売りが来た。姐さんかぶりに手拭をかぶり、赤色だすきで、七福神や大判小判の縁起のよい絵をもって来た。

万才　特殊なかぶり物をかぶり、日の丸の扇子を持ち、大きな袖の衣裳をつけ、鼓を持っている人もいた。

俵ころがし　俵の形につくったものに紐をつけて「千俵・万俵…」といって来た。

猿まわし　動物の猿を使って芸をさせた。

春駒　小さな色ぬりの駒に鈴をつけ、縁起をいいながら駒を進めたりした。

乞食　正月中にやって来て、金品をもらったりした。門前に立って物乞いをした。（八木連）

正月には遊芸人が回って来た。「アキノカタカラ福ノ神」といって、万歳（マンザイ）がよく来た。春駒や神楽（カグラ）、ゴゼも来た。

ゴゼは二人くらいで、ゴゼの手ひきが連れてきて、泊って行った。（諸戸字日影）

二　日

仕事始め　農家では馬屋の堆肥を出したり、畑に行って、ウネを少しきるくらいのことをした。

職人は親方の所へご年始に行き、ワザト（少し）ははしごでもこさえて、酒を一杯飲んできた。

土方も、多少でも仕事をして置いて、酒を一杯飲む。（諸戸字日影）

二日は仕事はじめ、近くの畑へ行って、一くわか二くわ、土を耕す真似をする。

書初め　子どもたちは、筆と墨で書初めをする。（下高田字本村）

初夢　二日の夜見る夢が初夢で、紙に「なかきよの　とおのねふりの　みなめさめ　なみのりふねの　おとのよきかな」と書いて船形に折って、枕の下に入れて眠ると良い夢を見るといってやった。（八木連）

初市　二日は町の初市（もとは松井田町へゆく）で、にぎやかで、買物をかねて見物に出かけた。初荷の札を立てた荷物が来たりしてにぎやかだった。交通がべんりになってから富岡の方へ行くようになった。松井田の初市へ行くころは、馬の背に肥料や食料をつけ、初荷の旗を立てて行列をつくって来たのを見た。（八木連）

三　日

三ガン日　大正月は三ガン日を中心にいう。小正月はマルメ年という。二十日正月は、シマイ正月ともいう。（諸戸字日影）

三ガン日はご年始回りでもして、酒を一杯飲んで遊ぶ。（諸戸字日影）

四　日

オタナサガシ　四日。三日間あげたものを、オッシャン（僧侶）の来ないうちに食べる。（菅原）

年神棚に三ガン日に上げて置いたお供えを下げる。「坊さんが年始に

来ないうちに、お供えを下げろ」という。（諸戸字日影）

四日のオ棚サガシには、一日から三日まで正月棚へ供えた食事を全部下げる。これを雑すいにして食べる。

田へ、一升ますに少量のオサゴを入れて持って行く。頭付きの魚も持って行く。これを水口に供える。てんがを持って行って、クワイレの真似をする。（下高田字本村）

寺の年始　一月四日に寺から坊さんが檀家を回り、年頭を置いて行く。それまでに、家の神棚の供え物は下げておけという。（諸戸字日影）

嫁の年始　嫁ゴは実家へご年始のためにお客に行く。ナベカリ行事はしない。（諸戸字日影）

四日が聟、嫁の年始日で、マスの下とよぶ大きな餅三枚を持って実家に年始に行き、泊って来る。（八木連）

五　日

五日は特別の行事はない。（諸戸字日影）

六　日

六日ドシ　始めて山に入る。山入りともいう。お供えと、おんべろをしんぜる。（菅原）

一月六日は年取りで、山入りをする。正月の供え物をのせた紙を切ってオンベロを作り、イワシ・オサゴ（米）を持って山に行き、山の神に進ぜる。そこで、マユ玉をさす木、ボク、ヌリデンボウ（ヌルデ）を伐ってくる。山は方角を見て、あいている方の山へ行く。（諸戸字日影）

六日を年とりといい、年始に出かけた嫁も家へ帰って来て年とりを一緒にするものといった。（八木連）

山入り　正月六日に繭玉木を伐りに山に行く。そのときはオサゴに頭つき、塩、御神酒を持参し、山の神にお供えしてから木を伐ってきた。木はヌルデの木で、これでエンガ、テンガなどをつくり、それらは小正月の十五日の粥を炊くときに燃した。（菅原）

山入りは六日、山へ行き、小正月に使うボクやヌリデンボウ、ヤマクワの木を伐ってくる。ヤマクワは折れにくい木だが、マユ玉をさすと、皮が取れてマユの中に残ってしまう。（諸戸字日影）

一月六日、初めて山へ入る日で、オンベロとオサゴ、お頭つきは煮干しを持って行って、ここから山だ、という山の入口の所で進ぜて「今年お世話になります」とおがんでくる。もとは山の神のカケジ（掛軸）もあったが燃してしまった。（諸戸字日向）

山入りは一月六日、初めて山に入り、マユ玉の木（ヤマクワ・ナラ・コメゴメ・モミジなど）と、ヌリデンボウなどを伐ってくる。ヌリデンボウは小正月の刀（「奉納道祖神」と書く）タワラ（「七福神」と書く）・スキ・クワ・ハラミバシ・ケエカキ棒（マユ玉をはさむ）などを作る材料になる。（諸戸字日向）

六日にご幣束とお供えを持って山へ行き、木の本に供える。今年も山を荒らすことだから納める。その後、小正月のマユ玉をさす木や、ドンドン焼の刀を作るヌリデの木を伐ってくる。この日はどこの山の木を伐ってもよい。（行沢）

六日を山入りの日といい、この日から山に入ることにした。オサゴとゴマメをもち、山の入口にオンベロを立てて山の神を拝んでから山に入って、小正月に使う木を切って来た。（八木連）

六日に、オンベロ、オサゴ、イワシ、イカなどお正月様に進ぜたものを山に持って行って進ぜ、ヌルデンボウをとってきた。十一日オクラビラキの日に農道具などモノツクリをする、その材料をとってくる。（上高田）

山入りは一月六日、この日十三日にオマイダマをさすコメゴメのボク、十一日のモノツクリの材料であるヌリデンボウを伐ってくる。六日はトシトリでもある。（下高田）

一月六日が山入りで、モチッカケとオカシラツキにオンベロを持って山へ行き、道祖神の木とマイダマ木を何本か切って来る。（上高田字上十二）

近くの山へ、自分の山でなくともよいから入ってボクを伐ってくる。ボクは、ナラ、カシワ、カシである。（カシは貸しができるようにといってこれにしめをつけて大黒柱に結えつける。）半紙でしめを切っておさごと尾頭つき（ごまめ）を木のカブツ（株）に供えてから伐る。（下高田字本村）

その年のアキの方向の自分の山へお酒、おさご、ごまめ、御幣を持って行く。適当な場所を選んで御幣を二、三十センチ間隔に立て、その前にお酒、オサゴ、ゴマメを進ぜる。帰りにヌルデンボウを切って来て、小正月のつくりものや刀、俵、マユ玉さしの木の用意をする。六日以前には山へは入れない。（下高田字本村）

オシメ、ゴマメ、オサゴを持って山に行き、一本小さい木を伐ってこれにシメをゆっつけて供え物をする。そしてヌリデンボウなどの木を伐ってきた。昔は大桁山まで行ったが、最近は近場の山で伐ってくる。（下高田字新光寺）

スリ鉢　六日年にスリ鉢・スリコギを持って、家の中を回った。（上高田字山下）

七　日

七草ガユ　セリ・ナズナ・大根・米・麦・小豆・粟など、七色のものを入れて、お粥を作った。（諸戸字日影）

七日は七草といい、朝、七草の入った粥をつくって食べる。七草といっても七種の草を入れなくもよく、正月棚の前のお飾りからイカ、クリ、コンブなどを下げて入れたりした。（八木連）

七草は小豆のお粥をする。セリ、ナズナを入れる。セリは、前日にとってもよいが、外において家の内に入れない。（下高田字新光寺）

セリタタキ　神棚の前で、まないたの端に、火箸とすりこぎを置き、「トウドノトリガ、ニホンノクニニワタラヌサキニ、ヘエハタケ、ヘエタタケ」と唱えながら、庖丁で、セリ、ナズナをたたく。粥には小豆を入れる。（菅原）

年神様の下にマナ板を出して、上にセリ、ナズナなどを載せ、わきに金火箸を並べて置き、庖丁のみねでたたいた。女の子がたたく。この時、唱え言をいう。

「七草ナズナ、唐土ノ鳥ガ、日本ノ土地ニ渡ラヌウチニ、ハタケヨハタケ（タタケヨタタケ）、チャチャチャ、チャチャチャ」（諸戸字日影）

七草粥を煮た。七草をたたくときの唱え言は「七草ナズナ、唐土ノ鳥ガ、日本ノ国ヘ、渡ラヌ先ニ橋ヲ渡レ」と聞いているが、マナ板の上でたたくことはしなかった。（下高田）

六日に春の七草のうちの近くにあるセリ、大根、ハコベ、ナズナくらいをとっておく。七日の朝おかゆの中へ餅二、三かけを入れ、七草を俎板の上でほう丁でうたいながらたたいたものを入れて煮る。七草粥は病気が根抜けになるといわれている。

七草のうた「七草ナズナ　トーキョノ鳥ト日本ノ鳥ガ……」

この日正月飾り、門松を外す。（下高田字本村）

禁忌　七草までは、お菜を食べるなという。菜の漬け物も食べない。タクアン（大根）は食べてもいい。（諸戸字日影）

寺への年始　正月七日に檀徒世話人が代表して、「年頭」を持って行く。昔は各戸からみんな行った。（諸戸字日影）

八　日

麦飯　お正月が終り、ばくめし（麦飯）だねという。（菅原）

疫病神　一月八日は疫病神が入るから朝早く窓をあけるなという。（菅原）

禁忌　八日・二十八日には、けがをするから山へ行くなという。（上高田字山下・川幡）

「八日に矢を射って、十二日に矢が落ちる。」という。昔の伝説で、弓の名人が、五料（松井田）の足かけ岩から妙義山のツバクラ尾根に矢を射ったら、岩を打ち抜いて、矢が飛んで行き、西牧（下仁田）の矢川に落ちたという。この伝説と関係があるらしいが、不明という。

「八日には山に入るな」、けがをしやすいので、落ちてぶっついた人が運が悪いという。

ある年、八日に大桁山の工事をしてハッパをかけたら、目をつぶした人がいた。人が止めたのに入ってやったのでけがをしたから、拝んだことがあった。（諸戸字日影）

十一日

倉ビラキ　十一日はお倉ビラキである。（菅原）

倉ビラキは十一日にした。（日影）

オクラビラキでこの日はじめて倉を開く。お供え餅を下げ、おかゆの中へ炊き込んで食べる。

作りもの、俵、刀などを作る。ずっと昔は花やくわ、牛や馬などをヌルデで作った。（下高田字本村）

クワダテ　カダテともいい、諸戸の辺ではしないが、高田ではしていた。正月の松にコジクメを付けて田んぼに立て、くわで少しサクッテ（サク＝うねを掘って）、オサゴ（米）やゴマメ（魚）などを、ワザト（少しばかり）供えた。（諸戸字日影）

クワダテは一月十一日、正月のモチをお供えにして、ゴマメを二匹、洗米のオサゴ、門松の枝にオンベロを付けて、鍬を持って田んぼへ行ってオサゴをまいて、二鍬掘る。人より早くやれといって、朝日が出る前に行ってする。酒は上げない。（行沢）

十一日にモノヅクリとカダテ（鍬立て）をする。

鍬立て、正月のお松を一本と、一升ますにオサゴを少し入れて田か畑へ行き、ひとてんが（ひと鍬）サクをきるまねをして、掘ったところへオサゴをまく。種まきのわけである。（八木連）

カダテのオサゴ（米）を持ち帰り、十五日のかゆの中に入れて食べる。（下高田）

オクワダテは一月十一日。米、供餅、雑煮のコを神棚にあげた供餅を敷いた紙に包み、一升桝に入れて手拭でしばって田畑各一ヶ所に持って行き、畑では一、二サクのサクを切り、門松に用いた松にオンベロをさげ、松の下に前述の供物を供えておく。豊作を祈るわけである。またこの日オクラビラキといって蔵の扉を開く。何れも農作業の始まりとする。またこのクワダテは地神様を祭るのだという。（下高田）

カザテは一月十一日。正月の松にしめをつけて田へ行って、おさごを供えて、鍬で一くわ切ってくる。これをカザテという。（下高田字本村）

一升桝に米一合ほど入れ、ごまめ四、五匹、新しい手拭い、松に四たれのしめを下げて畑に行き、これらを立てて供えて「オクワイレをします。」と宣言して、作は一テンガくわ入れしてくる。これをカザテという。（下高田字新光寺）

十二日

山の神　毎月十二日に祭る。毎月一日に祭る人もいるが、祭れば山仕事でけがをしないという。屋敷祭り（十二月十五日）と一緒に祭る人もいる。

十二日は山の神を里に呼んでお祭りする日で、十七日は里から山へお帰りになるので、村の人が山へお参りに行ってご馳走になる日という。

諸戸には十二社の山の神（石宮）があるという。山の高い所やオネッパリが多い。山の神はオコンジョウ神様で、いじるとたたるという。

（諸戸字木戸・久保）

山の神は一月十二日にまつる。女房を山の神というから女の神様ではないか。十二日に山の神を里へよんでご馳走し、十七日には山へお帰りになるので里から山へお参りに行ってご馳走になる日と聞いたことがある。（諸戸）

十二日には山仕事を休んで、山の神をお祝いした。仲間の家をバンテガワリ（交代）に宿（ヤド）にして、鍋でゴタ汁（コタン汁）をこさえて食った。小麦粉をこねて一口ぐらいのすいとんにして、大鍋に小豆のあんこをゆるく煮た中に入れた。砂糖をうんと入れて甘くして、汁粉みたいに柔かく作ったもので、ゴタ汁・コタン汁という。

山の神の掛軸やオンベロ（幣束）はない。

炭焼きの人も十二日に組ごとに分かれて、山の神を祭った。（日影）

山の神の祭りは、一月十一日に山仕事をする人達の仲間が、順番の宿に一合山の餅米を持寄り、十二日に赤飯をふかす。これを子供達はメンパを持って行ってもらってたべた。山の神様には鰯、米を供える。十二講は八木連で山仕事をする人が集ってお祝いをした。なお八日、二十八日に山へ入るとケガをするといわれている。（上高田）

一月十一日の晩、順番制の宿に泊り食事を共にし、翌十二日の朝は宿で男衆が三升位赤飯をふかし、これを持って山の神にお詣りして、男は帰る。そして女衆が宿に行き、山の神にお詣りして、帰りに宿でお茶をごちそうになる。十二講はない。これは北谷での行事であって、他の部落ではやっていないという。（下高田）

ツクリモノ　十一日のお蔵開きの日に、エンガ、テンガをつくって年神さまに上げる。カユカキ棒もつくるが、ハナはつくらない。（上高田字上十二）

ハナ　下十二ではハナをつくる。カズの木を材料とするが、下十二にはカズ屋があり、カズの木がたくさんでるのでこれを利用した。コメゴメの木も使った。（上高田字上十二）

モノツクリ　お供えを食べる。モノツクリといって、百姓の道具のキネ・クワに、ハラミバシを作る。俵の形を作り、七福神などと書く。（菅原）

ワキザシをモノツクリの時に二本作る。一本をかど口にあげ、魔よけとする。一本には奉納道祖神と書いた。（菅原）

ハラミバシをヌルデンボウで作る。ハラミバシを使う時に吹かずに食べないと、稲の開花のころに、風が吹く。（菅原）

モノツクリは十一日、ヌルデの木で、キネ・テンガ・ワキザシなどを作った。ワキザシは二本作り、ドンドン焼の時に、一本は道祖神の石宮の前に供えてくる。他の一本は火にくべて焦がして持ち帰って家の入口に置く。強盗が来てもいいように備えておくという。（諸戸字日影）

モノツクリにハナ・ハラミバシ・タワラ・カユカキ棒などを作る。ハナはカズの木で作った。ハラミバシは家族の人数だけ作り、これで十五日のカユを食べた。

タワラはヌリデンボの木を三本切り揃えて水引きで結わえた。（結んだ）。切り口に金・銀・宝、金・銀・銅、米・麦・大豆などと墨で書いた。オイベス様（エビス様）の前に供えた。

アーボ・ヒーボの名は聞かない。（諸戸字日影）

モノツクリは十一日、ハラミバシ・ケエカキ棒・テンガ・キネ・エンガ・アワボヒエボなどを、ヌルデの木で作り、年神棚の飾り物をこわして、飾りカエをした。ハラミバシは稲の穂の形に作る。ケエカキ棒はあとで苗マの水口へごみ除けにさす。アワボヒエボは適当の数を作り、竹をしなやかに曲げて刺し、コヤシ場に立てた。（行沢）

フクダワラは十二日のモノヅクリの日に、ヌルデの木を長さ二十センチメートルほどの長さに切ったもの（直径は五センチメートル位）を三個作り、切り口に神・金・福とそれぞれ書き、半紙を巻いて水引きでしばり、エビス様に供える。（妙義）

モノツクリは十一日にする。つくるものはカタナ（大刀、小刀の二本）、粥カキ棒（二本）、ハラミ箸、農具（エンガ、テンガ）、タワラ（ぬるでの太いのを輪切りにして三本しばり、切り口の一方に「七・福・神」、反対側の切り口に「金・銀・俵」または「米・麦・大豆」と書いた）、杵などをつくった。（八木連）

モノツクリは一月十一日、ヌルデンボウでテンガ、エンガ、キネ、ケーカキ棒、ハラミ箸などを作り、正月様の前の竹につるした。これは二十日に正月棚をこわすときまでおく。ケーカキ棒は、十五日の小豆粥に使ったあと放り出しておいて風呂で燃やしたり、苗間（ナエマ）の水口にさす家もある。ハラミ箸は小豆粥をたべるに用い、ケズリバナは自家製を用いるほか、富岡に持って行って売る人もいた。（上高田）

モノツクリは一月十一日。六日の山入りのときメエダマのボクを切ってくるが、そのときヌルデンボウも伐ってきて、これでケエカキ棒、ハラミバシ、百姓道具（キネ、臼、テンガ、エンガ）、ハナ、カタナ、タワラなどをつくる。

ケエカキ棒は先端を四つ割りにしてメエダマをはさみ、十五日に小豆粥を煮るときこれでかき廻し、米粒のつき具合で農凶を占い、そのあとメエダマが割れて落ちるまで神棚におく。ハラミバシは小豆粥をたべたあと神棚におき、ケエカキ棒と共に田の入口に立てる。百姓道具類はマイダマの木につるす。ハナはマユダマサシのときカズで長短二種作って、六、七寸のはオマイダマの木につるし、長い方はオマイダマをさした根本におく。後にはハナを秋畑から売りにきた。カタナも大小二本つくり、フジツルを巻き、ドンド焼きのときこがして、大刀は軒下におき魔除けとする。タワラには金・銀・宝（繭）、米・麦・俵、七福神などと書いて神棚におく。（下高田）

ケズリバナは一月十一日のモノツクリのとき、コメゴメの木を掻いて作り、カタナと共に八畳の間一杯に飾ったオマイダマのボクに立てかける。ドンド焼きのとき持って行って燃す。（下高田）

カユカキ棒　ヌルデの木で作る。元の方三分の一は皮をつけ、先の方は皮をむいて、その先端を十文字に割り、マユダマをはさむ。十五日の小豆がゆが煮えると、田をかくようにかゆの中をかきまわす。（上高田字上十二）

小正月　一月十一日より十五日までを小正月という。十一日、モノヅクリ、十二日、マルメ年、十三日、マイダマさし、十四日、ドンド焼き、十五日、小豆がゆ、マイダマをかきとる。（八木連）

十二日―米の粉で、マイダマを作った。

十三日―マユダマを枝に差した。

十四日―どんどん焼に持って行き焼いて食べた。このとき他人のものと、とりかえっこをして来た。この火にあたると風邪をひかないともいった。

十五日―小豆粥を田かきになぞらえて、粥カキ棒でなぜた。この粥は吹いて食べてはいけないといわれた。

十六日―マユダマを白湯で煮て、味をつけないで食べる日だった。味をつけると、その年の繭に、しみが出来るといい嫌った。（中里字北山・菅原）

ここには鳥追いの行事はなかった。

十　二　日

マユダマ　十二日に作る。山クワの木に十三日にさし、十四日にかく。ふつうのより大きいのを、十六作り、えびす講の時に食べる。道祖神の時、マユダマをあぶって食べると、かぜを引かない。（菅原）

マユ玉はマユ形や里芋の形に作る。（諸戸字木戸・久保）

十二日はマルメ年といい、ヨタ米（二番米）一俵をついたのを、粉にした。小米（くず米）を水で洗って、つぶれるくらいに干してから、石臼でひいて粉にした。立臼に入れてよくついて粉にすると、のめっこくてよかった。つく方がいい粉になった。わらで輪をこさえて、立

臼の中の米の上に置いて、その真中を杵でつくと、米が飛び出さない。二番米はあまりつかない方が甘くておいしい。（諸戸字日影）

ヨタ米（二番米）を一臼ずつついた時に、いい加減粉にして、二斗も三斗も用意して置いた。十二日の夜のうちに粉をこねてマユ玉を丸めて置く。上に布団を着せて、かぜをひかさない（凍らせない）ようにする。十三日の朝、ふかしてボクに刺して飾る。（諸戸字日影）

マユ玉は丸形、マユ形、里イモの形、十六（大きい丸形）などを作った。十六は米粉一升を十六個に丸めたので大きい。里イモの形は数は不定で多く作った。これらを山から取ってきたボクの枝にさして、玄関や八畳の間にまで飾った。（諸戸字日影）

マルメ年　十二日、小正月のマユ玉をまるめておく。（行沢）

マユ玉はボクにさして三ツメの十五日の夕方にカク（はずす）。十六日にはマユ玉をうでて、塩気をつかわないで食べる。しょうゆなどを使うと、マユの糸が汚れるとか、糸が切れるとかいう。（行沢）

十三日にマユ玉をフカシドウ（せいろ）に入れてヘッツイにかけてふかして、ボクの枝にさし、座敷に飾る。梅の枝にマユ玉をさして、正月様や神棚、先祖様に供える。マユ玉は丸玉やマユ形のものをたくさん作る。十六マイ玉はイチヂクの形にして十六個作り、カシの枝にさす家もあり、大黒柱にしばり付ける。カシは金を貸すようにと縁起をかつぐ。若餅をのしたコバ（隅の方）を細長く切って、十六マイ玉と一緒にさす。

ヤマクワやナラの木などのボクを株（カブ）ツごと山から伐って来て置いたものを（山入りの時に取ってくる）、座敷に立てる。二階台まで届く柱を立てて、ボクをしばり付けて固定し、枝の先に回りじゅうからマユ玉をつける。枝に飾り菓子（クワ・鳥など）も吊るす。ボクをマブシともいい、養蚕のマユに見たてる。

マユ玉は小米を粉にして、一俵分も作ったので、小正月の後まで残してオヤツにした。山仕事の時には持っていって食べた。（行沢）

一月十二日の夜マユダマを作る。米の粉のマユダマである。山から山桑・コメゴメ・栗・などの枝を伐ってきて、これにマユダマをさす。十人以上の大世帯では、くず米を粉にひいて作ったマユ玉を一斗ぐらいゆで、八畳間に一ぱいになるぐらいに枝をひろげたボクにさす。ボクは六日の日に山に入って伐ってくる。大正月に正月棚に飾った蜜柑・スルメ・コンブ・干し柿・飾り菓子などをボクに再び飾りつける。（妙義）

十二日をマルメ年といい、マユ玉をまるめる。夕方からすることで、特に大きいのを十六つくって十六マイダマといった。小さいのはたくさんつくった。

マユ玉飾りは十三日、前の日にまるめたマユ玉をふかして、六日に切って来たマユ玉木にさす。さした木は、年神さまの棚の前のお飾りを全部とって、これと交換に飾り立てる。（八木連）

マルメ年は一月十三日で、この日が総年取りである。（中里）

十二日はマルメ年、この日朝早くからマユ玉作りを家中でする。マユ玉は、米の粉に熱湯を入れ、球型や繭大の繭型に作る。繭の形は十六作り、これを十六目玉と呼ぶ。形が出来たらセエロに入れてふかす。ふかし終ったらヌルデの木にさす。繭玉を飾る所、正月棚をとった後、門松を飾った所、座敷に天井まで届くくらいのヌルデンボーを畳の上から特別にゆわえて、そこへさす。

とくべつ大きいメイダマには、十二メイダマと十六メイダマとある。マユ玉を食べると風邪をひかない、といわれている。（下高田字本村）

マルメ年は一月十二日。正月の飾り物をつくる。まずタチ（太刀）はヌリデンボウで皮だけむいて藤つるをまく。道祖神やきの火でやいて一本はトボウの上に横たえておく。ハラミバシは十五日のお粥を食べる。小形のテンガ・エンガ、タワラは小口に金・銀・米などと書いてこれは恵比須・大黒に供える。ハナはまたケイダレともいう。以上はいずれもヌリデンボウでつくるが、十四日の日に小形の農具、ハナ

などはオマイダマをさしたボクにしんぜる。
マユダマは、丸い。しかしその中で十六メイダマは、一升で十六こ分あるくらいの大きいもので、数はいくつつくってもよい。一〇こもつくれば上々だろう。このようなマユダマはナラ・コメゴメ・サルスベリなどのボクにさして供える。マユダマをさして飾る日は十三日である。（下高田字新光寺）

ヒデンボサツ様　カマドやイロリの神様をいい、マユ玉を作った時に二個ずつ供えた。子どもがやけどしないように、マユ玉をイロリのホドの中に入れてやる。餅をついた時も、同様に入れる。火神（ヒガミ）様ともいい、カマガミ様ともいう。お勝手の棚の上にお札がはってある。火を燃す時に、もし本がプーッと燃え上ると、「火神様が屁ヒッタ」という。主人がいない時に女たちがオゴリをして、ご馳走を食べることをルスンギョウというが、カマ神様のルスンギョウとはいわない。（行沢）

蛇・ムカデ除ケ　マユ玉をふかした湯を、家の回りにちょっとずつまいて歩いた。この時に「ヘービモムカデモドーケドケ」と唱えて、「蛇もムカデもへっちゃなんねぇ」といった。
伐り木ゼメは聞いたことがない。（諸戸字日影）

十　三　日

若餅　十三日にマユ玉をふかす時、若餅をつく。若餅を平らにのして、幅一寸。長さ五寸くらいに細かく切ったものを、山から取って来たカシの木の枝に刺す。蚕が桑の葉を食っている形に見えるようにして、台所の入口に飾る。これをカシ餅という。（諸戸字日影）
十三日に若餅をついてお供え餅を作り、マユ玉飾りんしたボケの根っこ（カッパという）の前に、一重ね供えた。（行沢）
小正月のもちつきは、十二日のマユダマまるめの日か、十三日のマイダマさしの日かの両日のうち、都合のよいどちらかの日にした。（八木連）

飾りカエ　十三日に飾り替える時、松飾りとマユ玉を差し替える。（諸戸字日影）
飾り松の外飾りは一月七日に引き、内飾りは十三日のオマイダマをさすときまで置く。十三日はお松とオマイダマの飾り替えである。これらの飾り松はドンド焼きのとき燃し、オマイダマはそのとき焼いてたべると風邪をひかないという。（下高田）

十　四　日

道祖神　集落の上と下と二ヵ所にある。正月飾りの松を各戸から持って行って、その前で焼く。松小屋は作らない。太鼓もたたかないし、鳥追い行事もしない。火を燃す時に、書初めをくべて高く上がると、ウデが上がるという。（諸戸字日影）

ドンドン焼き　十四日に松飾りを集めて燃す時、マユ玉やスルメ（イカ）を持って行って焼いて食べる。近所の者とお互いにくれ合って食べた。道祖神の風に合うと無病になるという。松の三またの燃エクジを家に持ち帰り、行かない者もその火でタバコを吸うと無病になるという。モエクジは火を消して、屋根に上げると火事にならないといい。厄年の人はドンドン焼の所でミカンや金を配って、厄落トシをする。（日影）
松飾りなどを集めて、村はずれの三か所で燃した。子どもが出て行き、「奉納道祖神」と書いた書初めを燃して、紙が高く上がると、習字の手が上がるという。マユ玉を焼いて、お互いにくれっこして食べた。松小屋は作らない。鳥追い行事もしない。
厄年の人は厄除けに、その場でさい銭を投げる人もいて、子どもが拾った。
ドンドン焼も今はしなくなった。（行沢）
ドンドン焼は一月十四日、カド松やシメ飾りなどを持って行って焼くので、子どもは全部出かける。木の枝にさしたマユ玉を、その火で

焼いて食べるとかぜをひかないという。ヌルデの木で作った大小二本のワキザシを持って行く。小刀を道祖神様の石碑に供える。大刀はヌルデの皮を斜めに巻きつけて、その火で焦がして模様をつける。大刀を持ち帰り、家のトボグチの上に置くと、魔除けになる。

松の燃エクジを持ってきて、その火で年よりがタバコを吸う。モエクジはよく消して、屋根に上げると、火事を防ぐという。(行沢)

ドンドン焼きは道祖神祭り。小正月行事で一月十四日の朝、正月飾りの松を集めて、道祖神の辻で燃やす。ヌルデの木で作った刀を二本持って行き、一本を道祖神に供え、一本を火入れ(火の中に入れてこがす)をして持ち帰り、玄関にかけておく。(妙義)

ドンドン焼きは一月十四日にするが、早朝やるところと、朝食後のところや夕方やるところとある。小屋はつくらない。七草のあとで外した松飾りや、コジクメイ、書き初めなどを子どもたちが集めに来たが、自分で持って行くのもあった。集めたものを積み上げて焼き、マユ玉を焼いて食べた。これを食べると風邪をひかないといった。カタナも焼いて、一本は道祖神に供え、一本は家へ持ち帰って魔除けにした。松の燃えくじを持ち帰ってタバコの火にしたり、その火でわかした湯でお茶をのむと丈夫になるという。またハラを病まないともいった。(八木連)

ドンドン焼きは一月十四日の朝、双体道祖神の石仏のあるドーロクジンの地で行なう。各人が松飾りや書き初めなどを持って集まりこれを石仏の前につみ上げて火をつける。この火で十二日に作ったマイダマを持って行って焼いて食べる。風邪をひかない。松の枝の燃えクジ(残り)を持ち帰って、屋根の上に投げ上げておくと、火災よけになる。(中里)

一月十四日朝川原でドンド焼きをした。小屋をつくることなく、大桁山からとった正月のオマツを中心に燃し、オマイダマ(十三日をマルメドシといってメーダマサシをするが、その一部である)、イカ、餅などを焼いてたべた。これをたべると一年中丈夫だという。この祭りには大人も一緒に出た。(上高田)

虫よけに一月十四日のドンド焼の灰を家の周囲に撒いた。蛇、ムカデが入らないという。(上高田)

ドンド焼きは一月十四日朝で、小屋は作らない。久原は三本辻で、北谷は石碑の前で燃す。このときカタナは大・小共に藤つるで巻いて焼き、大刀は軒下におき、小刀は燃してしまう。書初めも火の中に入れ、高く舞い上る程上手になるという。(下高田)

十四日はドンド焼き、マユ玉をさしたいくつかの枝と門松、シメ飾り、書初め、ヌルデンボウ等道祖神の辻へ持って行ってもやす。以前は、杉と竹を学校へ出ている子どもが切って来て小屋を作り、その中でマユ玉や餅、スルメ等やいて食べた。ドンドン焼きの煙に当たると風邪をひかないとか病気にならないといっていた。ヌルデンボーの刀を一本、トボグチの入る上に飾り魔よけとする。(下高田字本村)

ドンドンやきで子供が死んだことがあって、明治年代に小屋をつくることは廃止になった。河原へ松を持っていって焼く。ヌリデンボウをむいて刀をつくり、つかの部分には模様をつける。それを道祖神焼きの火でこがして家に持ち帰り、トボウグチの上におくと魔除けになるという。モエクジを拾ってきて屋根にホカシアゲテおくと家が火事にならない。団子を焼いて食べるとかぜをひかない。(下高田字本村)

鳥追いも昔はあったらしい。(下高田字本村)

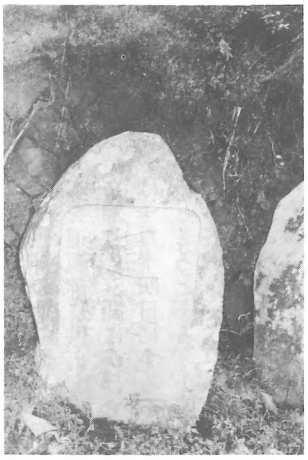
ドンドンヤキ、また道陸神やきともいう。十四日に松、しめ、書初めなど、めいめいドウソウジンサマに持っていって燃やす。その火にあたると風邪をひかないという。繭玉(団子)を小枝に家族数だけさしていって、これを焼いて食べる。(下高田字新光寺)

マツのムエックジ　ドンドン焼きで燃したマツの木の又になったムエックジを拾ってきて屋根にほうり上げておくと火災にあわない。(下高田)

道祖神（菅原）（撮影　上野　勇）

オミタマ様　一月十五日、お握りを小さい重箱に六つ入れ、箸を立てて仏壇に供えた。進ぜる分だけ別に煮てお握りとした。祖母がやっていたことで、これを何というかは判らない。（上高田）

悪魔ハライ　正月十六日は道祖神祭りの日で、各コーチから世話人が二人づつ出て十二人で行事をした。この日は世話人のなかで男女の神をつくり、一人は冠をかぶり、一人は女の仕度で男根を抱いて歩いた。この男根は神宮さんの倉に保管しておき、祭りになるとそこから抱き出し、新婚の家庭を巡りあるいた。このとき新婦の人に子供を抱かせるといって男根をだすので、逃げるのを追いかけたりして笑わせた。終ると酒を出したりお包み金をくれたりした。悪魔払いともいった。この行事は戦前に終った。



道祖神（菅原）
（撮影　上野　勇）

十四日はお飾りを燃し、ドンドン焼きともいう。小屋などはたてなかった。道路で燃した火で繭玉など焼いて食べた。この火にあたると風邪をひかないなどともいう。（菅原）

道祖神ねり　道祖神祭りに木で作った男根に、赤い小さい帽子をかぶせ、祭り世話人が抱いて、御祝儀のあった家へ行く。「嫁さん抱いてくんない、顔見てくんない」といって、帽子を取ると、嫁さんがびっくりする。

この日は、なまぐさものを食べない。（菅原）

十　五　日

十五日カユ　十五日の朝カユを煮て、カユカキ棒でカユをかん回してから食べた。食べる時に、カユを吹いてはいけない。

カユカキ棒はしまって置いて、春になって苗マ（苗代）の入口に立てる。カユカキ棒を二本離して水口に立て、ハラミバシを間に立ててごみ除けにしたが、稲の穂がよくはらむようにしたという。（諸戸字日影）

十五日に小豆ガユを煮て、若餅を少し入れる。ケエカキ棒の先にマユ玉を挟んで、小豆ガユをかき回してから、取って置く。ケエカキ棒はあとで苗マの水口に立てる。

小豆ガユを食べる時に吹いて食べると、田植えに風が吹くからと、禁じられた。（行沢）

一月十五日の朝食べる。米が腹一杯食べられるようにとの呪いだという。モノヅクリの日の十二日にヌルデンボウでハラミ箸とケエカキ棒を作っておき、十五日の朝の小豆粥はハラミ箸で食べるが、熱くても吹いて食べてはいけない。田植の時風が吹くという。ケエカキ棒は十文字に割りを入れた間にマユ玉をはさみ、粥をかきまわし、ハラミ箸と共に半紙に包んで神棚に上げておき、田のしつけ時に水口にさす。（妙義）

花カキは、マユ玉をとった後へさす。

十五日、アズキ粥を煮て、ハラミバシで食べる。このお粥はふいて食べてはいけない。ふいて食べると大風が吹くという。ハラミバシは、豊作を願っての箸といわれている。（下高田字本村）

十五日のお粥を吹いて食べると田を植えるときに風が吹く。吹かないように、ハラミバシで食べる。（下高田字新光寺）

粥カキ棒　頭を四つに割り、マユダマをはさむ。字は書かない。苗代にさす。（菅原）

一月十五日朝、小豆粥をつくり、十一日につくった粥カキ棒のT文字に割ったところへマユ玉をはさんで、小豆粥をかきまわしてから、ハラミ箸で食べた。（八木連）

十　六　日

鬼ノ首　鬼の首でも許される日だ。よそさんに行くものじゃない。（菅原）

十六日は「鬼の首でものがれる」といって、大威張で休んだものだった。墓参りはしない。「十五、十六日は女衆を休ませろ、近所へあまり行くな」という。「女の正月」とはいわない。（諸戸字日影）

ヤブ入り　十六日は奉公人に暇（ひま）を出して遊ばせた。子守りっ子など、奉公人はあまりいなかったので、出カワリということも、特別に決めてなかった。

盆の十六日、正月の十六日は、鬼の首も許される日という。（行沢）

マユカキ　十六日の朝、湯を飲みながらお繭玉もぎをする。お繭玉を食べて食事とする。（下高田字新光寺）

十　七　日

オシマイ正月　特別の行事はない。（菅原）

観音様　十七日に観音様を祭る。厄年の人は北向き観音へ行って、ミカン一箱も投げて子どもにくれる。（行沢）

二　十　日

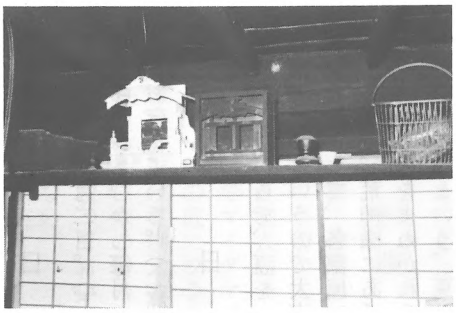
二十日（ハツカ）正月　オエビス様が働きに出る日。農業・商業の神様で、働いて金を残したかがみである。本膳を供える。頭つきの鯛や鰯を供えるが、サンマはサンマサワガシといってきらう。（菅原）

二十日正月はお供え餅（若餅）をエビス様に進ぜてから、お雑煮にして食べる。（諸戸字日影）

二十日はシメエ正月ともいい、正月の遊ビジマイをする。ご年始の残った所へ出かけた。わら仕事を特別にはしない。（ここではシメエ正月は二十八日ではない）（行沢）

エビス講　正月二十日のエビス講は「朝エビス」で、朝、床の間へエビス・大黒の木像を出して並べる。よく働いてくるように、ますにお金を入れて、路銀として供える。

エビス・大黒の膳は二つ、普通の膳を作って、テーブルなどの上に載せて供える。ご飯を山盛りにしておツユ（汁）を添え、タイの頭を右にして背をエビス様に向けて、腹を見せないようにして、生のまま膳に載せる。タイを小形にしたようなコノシロを二尾生のまま供える家もあるが、殿様は「この城を食う」といって嫌ったので、正月様に供えたゴマメを二匹、膳のはじへ供える家もある。（行沢）



エビス・大黒様――ふだんは棚の隅に上げてある。（諸戸）　（撮影　関口正己）

二十日正月とエビス講。この日オイベス様が働きに出る日、お雑煮を作って送り出す。これを家族みんなで食べる。あまり良いものを出すと、オイベス様は働かなくなるから雑煮くらいで良いという。

またこの日縄ブチといって、三、四間くらいある三本ないの縄等を何本かなって、つるべ井戸、荷なわ、馬に引かせる縄を始めとして自家用のものを何本もなった。

（下高田字本村）

エビス講は一月二十日。朝はぞうにで、お繭玉も入れる。エビス様が働きに出かけ、暮にもどってくる。エビス様は資本金をもって出かけるからといって、一升桝の中に金を入れて供える。エビス様は福の神だ、ともいうか、この神に供えたものは、未婚者にはくれるなという。

この日、ハヨブチをする。ハヨというのは馬の荷縄で、ミツグリ。三本の縄をよる。マンガの縄にも使う。これをハヨナワというが、このほかに三本の縄をよって井戸綱も作っておいた。（下高田字新光寺）

二十四日

愛宕精進　一月二十四日、下八木部落の東の城山に愛宕様が祀ってある。この日赤飯と頭付を付えてお祭りをする。これは山の持主がやる。

夜は部落の人が集まって、愛宕精進といって酒、魚、料理を供えて、お祭りをした。戦前までやっていた。（八木連字下八木連）

二十八日

シメエ正月　遊びじまいだという。（菅原）

二十八日はシメエ正月で、正月の終わりである。朝は雑煮を正月様に進ぜ、正月様を送り出し、正月棚を片付ける（下高田字本村）

二月

一日

次郎の一日　いわない。（行沢）

二日

デカワリ　二月二日。（下高田字新光寺）

アズキメシ　むかし毎月一日と十五日に神棚に、アジキメシを上げたのをおぼえている。（上高田字上十二）

四日

豆マキ　豆がらで、豆をいる。菅原中に聞えても驚かねえから、でかい声を出せというので大声で、「福は内、福は内、鬼は外」と唱える。神棚から始まって、各部屋にまく。豆を拾って、年の数だけ食べる。豆をくるんで、荒神様にあげたり、かぎ竹に吊して、初雷の時に食べると、落雷の害をまぬかれる。（菅原）

節分を豆マキという。豆はホウロクに入れ、豆がらを燃して、箸でかきまわして七回いるという。いった豆は一升桝に入れて神棚へ上げておいてからまいた。「福は内、福は内、鬼は外」と豆をまく。まいた豆を拾って自分の年の数だけ食うとか、進ぜたのを食べる。（八木連）

豆をまく時は、「福は内、鬼は外」と、デッケエ声して（大声で）まく。

まず、鎮守波己曽神社にまいて来てから、家に入り神棚にまき、右回りに家の中の四か所にまく。次に外の屋敷神・井戸神・水神・セッチン神（便所）・トボグチにまいて、家の中に入って戸をしめる。（行沢）

四日の夕方年男が一升ますに入れた炒った大豆を神棚へ供え、おがんでから神棚、仏壇、えびす様、いろりと釜神様、座敷、その他正月様を飾った所全部にまく。

仏壇には沢山投げ、これを家族でひろって自分の年の数だけ食べる。

残った豆は半紙にくるみ神棚へあげ、初雷がなったら食べると雷に当たらない（下高田字本村）

節分の豆はほうろくで三回いる。豆が生だと厄病が入るという。イワシ一匹を二つに切って、頭と尾を二本の枝にさして焼く。これをヤキカガシとしてトボウ口に出す。魔除けである。「福は内、鬼は外」は、神棚・床の間・座敷・お勝手・台所・倉・屋敷神などでくりかえす。豆は年の数だけ拾ってたべる。年配の者は一粒を一〇としたり、六十二なら二つとする。福茶はのまない。（下高田字新光寺）

豆　豆まきの豆を煎る時は、豆木を少しでも燃す。ほうろくに豆を入れて煎る時、途中でショウギに移しては煎りなおすことを、七回くり返す。豆は七回煎るものという。（行沢）

まいた豆は、自分の年齢だけ拾って食うものという。

豆占いはしない。（行沢）

残った豆は紙に包んで、イロリのカギ竹にイッツケテ（結び付けて）置く。初雷が鳴った時に、その「鬼の豆」を食べろという。（行沢）

ヤキカガシ　名称は不明だが、豆まきの豆を煎る時に、イワシの頭とシッポをヒイラギの枝に刺して、唱え言をいいながら焼く。

「百種類ノ虫ノ口ヲ焼ク」「尺取り虫・油虫・ボヤ虫ノ口ヲ焼ク」といって、火にあぶる。それをケエドに挿して置く。何のいわれか知らないが、みんながやるので、やらなけりゃ悪いと思ってやる。（諸戸字日影）

イワシの尾と頭をヒイラギの枝にさして、豆をいる時の火で焼き焦がす。年よりがこの時に「菜虫……」と唱えた。ヤッコガシともいい、トボグチにさして置く。ムシ歯よけともいう。（行沢）

節分の豆をいる時、ヒイラギのふた股になった枝の両方に、鰯の頭をさして、唾を吐きかけながら「菜虫麻虫四十八の口を焼き申す」といって焼く。焼いたのはトボグチの所にさして魔除けとした。（八木連）

節分は二月三日。この日、正月にしんぜたイワシを焼いた。「毛虫の目を焼きます」と唱え、そしてツバをはきかけながら焼いた。焼いたイワシは玄関にさしておいた。また、豆まきの豆をいるときはホウロクから、三回出し入れをしながらやれといわれた。つまり、全部の豆をホウロクから出してしまい、改めて入れなおすことを三回くり返えすわけである。（上高田字上十二）

八　日

コトハジメ　二月八日にはしない。メカゴも立てない。ダイマンカゴも出さなかった。（諸戸字日向）（行沢）

オコト八日　きかない（下高田字新光寺）

針供養　二月八日に女衆がご馳走をこさえて、仏壇に供える。（諸戸字日向）

二月八日には針供養をした。豆腐に針をさして供養した。（上高田字上十二）

二月八日には、トウフに針をさして針供養をした。（上高田字下十二）

八日は針供養、豆腐一丁の中へ一年間の打れ針をさしておがむ。（下高田字本村）

塞念仏　聞いたことはあるが、ここではやらない。（菅原）

初午前夜

オシラサマ　初午の前の晩、米の粉のマイダマを作る。桑の三マタに枝の出たのを一つ切ってきて、枝の先に一つずつマイダマをさす。すそを長くひいた羽衣の天女のような絵姿のカケジを出して飾り、その前に机を置いてマイダマを三つさした枝を、壁に立てかけて置く。ほかに一升マスの底にワラを二、三本折って敷いてマイダマを入れ、山盛りに盛り上げて供える。（諸戸）

初午の前の晩、米の粉のマイダマを作り、小正月にマイダマを作ってさしたボクを取っておいて、マイダマをさしたりした。この時のマイダマはうまくない。

オシラマチはお蚕神、生糸の神を祭る。（諸戸）

オシラマチの晩、年神様の松を取って置いて、いろりでいぶした家もある。（諸戸字木戸・久保）

初　午

初午　一升枡に藁をしき、マユダマをあげる。（菅原）

マユ玉　節分を過ぎて初めての午の日に蚕神を祭る。クズ米を洗って乾かして、石臼や水車でひいて粉にしたものを材料にして、マユ玉を作る。

マユ玉は一升ますに稲わらを敷いて、山もりに入れたり、多いものは木の枝にさしたりして、床の間の蚕神様（キヌガサ様）に供える。（行沢）

稲荷大明神祭り（二月初午）　森に木の宮があり、久保（約二十戸）の者が祭る。特に信仰する人もいて、縁起の神という。世話人がのぼりを立てて、赤飯を持って行って参拝者に分けたり、おミキを飲んだりする。主だった人に手紙を出して案内する。神道さんに拝んでもらう。子供には太鼓をたたかせる。（諸戸字久保）

節分がすぎて初の午の日に、だんごをつくって北村稲荷大明神に供えた。また三ツ股の桑の枝にだんごをさして神様に供えると養蚕が当るといった。（八木連）

十　一　日

春祈禱　二月の大雪で仕事の出来ない時にやる。（菅原）

ケイヤク　春ギトウとも言う。二月十一日に集まり、集落の一年の村のキメゴトや行事の一切をこの時に決める。昔は諸戸中、百七軒も集まった。こんなに寄れる家は三、四軒しか無かったので、戦時中に四つに分かれた。モチ米五合（一口）を持ち寄り、アンコモチをつき豆腐汁を作って食べた。出た女衆と男も手伝ってモチをついたり汁を作ったりした。（諸戸）

春祈禱は二月中に行なう。ブロック毎に米を持ちよる。量は一口五合だが、家族数によってきめる。宿は輪番ですする。宿に集まり、餅をつき、アンピンにして食べる。残りは家に持ち帰る。餅つきは世話番が下準備をして、若い衆が餅つき役を引き受ける。この春祈禱は一種の親睦会で、別に神主が来て祈禱をするわけではない。実施日は世話番が相談してきめ、大雪の降った日など「雪降り祝いをすべえ」と言った。（妙義）

春祈禱はケイヤクと称して、節分すぎのオシメリ（雪）のあとやった。都合のいい日ということだが、二月十一日が多かった。部落のとりきめをしたり、当番・年番等の交代をする引継ぎが行われる。当日は、一口一升、半口五合（上八木連はひと口五合）、小豆三合（もち米一升につき）という希望の量を当番が集めて歩き、宿で用意してアンコの入った餅をついた。一合もちといって、一升で十一個か十三個くらいの大きさの餅にまるめ、口数に分け、夜、汁をつくって飲食した。もちは家に持って帰ったが、ケイヤクでのとりきめや、年番のゆずり渡しなどは、契約帳に記入して残される。（八木連）

ケイヤクは節分の次ぐ日にする。春祈禱ともいう。（上高田）

節分後にやるケイヤクは、米を出しあってもちをついた。希望で何口でもよく、あんこの入ったまるめもちだった。ケイヤクには酒も出て、肴はトウフとやさいの煮物で、ケンチン汁をつくった。（上高田）

二月ころ、もちをついてケイヤクをする。ひと口山盛り五合ずつのもち米を出して、男衆が当番でもちつきをして、一つ一合余りの餅をついた。家により二口とか三口申しこむので、これを家へ持って帰るのが楽しみだった。家で汁を煮て、汁を吸いながら餅を食ったりした。女衆は手を出さない。あんこ分として一升に三合の割合で小豆を出した。（上高田字下十二）

五日がケイヤク、節分の日の翌日、新しい年の村の中のきまりを決める日。一戸から一人ずつ、原則として戸主が出て、村の一年間の約

束や行事等を決める。この日、集った人々が餅をついて、つぶしあんを入れて食べ、各々家へも持ち帰る。（下高田字本村）

十九日

馬頭観音　二月十九日は武州上岡の馬頭観音の縁日。別所にお参りして陽雲寺へ分霊を祀ってあるので、お参りに行く。今は馬がいなくて牛を飼うので、絵馬の代りに、牛の絵を書いて納める。（行沢）

二月初午に馬頭観音を祭った。馬頭観音の石像のある前に竹を二本立てシメなわを張って、赤飯を供えた。各戸でお参りに行った。（古立）

二月十九日は馬頭観世音の祭りで、講の代表が埼玉の上岡の観音様へ代参に行った。この人は上岡でごちそうになってお札を受けたり、絵馬を受けたりして来て配ってまわった。馬を飼っている家ではこの日特に竹の笹を食べさせたりした。（八木連）

上田の観音様へ二月十九日に行った。これは講というよりはめいめいで行った。絵馬を買ってきて厩にはる。（下高田字新光寺）

二十四日（二月または三月）

天神講　三月二十四日に女衆が宿に集まって、宿の男衆に頼んで餅をついて（一口一升）分けた。ケンチン汁を煮て連れて行った子供たちに振るまいをした。嫁に来て初めての者は、女衆の仲間入りをして、豆腐を買って出す。（行沢）

天神講は三月二十五日、女衆が回り番の宿に集まって、餅をつく。ついた餅を子どもに分けてやるので、最近は子どもが集まるようになった。掛軸はない。

以前は子ども天神講があって、天神山の石宮へお参りした。（行沢）

二月二十四日あたりに婦人たちの天神講がある。上八木連は村が大きいからひと口五合、下八木連は小さいのでひと口一升（年に五合）ずつの米を集めてもちつきをして分けた。宿は順番で、トウフ、人参、ごぼう、里いも、大根の入ったケンチン汁をつくって食べた。子ども等を招いて楽しんだ。（八木連）

二十四日から二十五日が天神講で、女ばかりの寄り合いである。前の日から餅をつく用意やお汁の用意をする。宿へ集まって餅をつき、あんを入れ、ケンチン汁を煮て子どもや男衆を呼んでごち走する。その後、天神様をおがみに行く。天神様は本村の上の方にある。この日に嫁は実家へ帰れた。（下高田字本村）

三月

三日

ヒナ祭り　餅をついた。陽あたりの良い所のもち草を摘んで草餅もつくった。ひし餅にして重ねてひな様に供えた。ひし餅の上には、つぼみのついた梅の枝をさして飾った。

嫁さんは、サンマの干物をひし餅の上にのせて実家へお客に行った。親の生きているうちはするものだという（子どもが誕生をすぎればよいという話もあった）。（八木連）

お節供・女の節供といい、ひし餅を七・五・三に切り雛段に供えた。此の日嫁は実家へ帰れる。この時嫁はひし餅を実家へのみやげに持って行く。（下高田字本村）

ひな祭りは三月三日。白・赤・青三色の菱形の餅をつくる。初節供の家からは、餅のお返しが来た。（下高田字新光寺）

御節供　誕生した子どもの初節供には、実家の親、兄弟、近所など、交際のある者からヒナ人形が贈られる。どの子にも贈られるが、長女が一番よいもので、次からだんだん小さくなった。お返しには桜餅を返す。（行沢）

初節供に嫁は実家へヒシ形餅とサンマの開きを持って、お客に行っ

た。（行沢）

草餅　ウル米（ウルチ米）二升を湯でこねて、長丸形に握り、せいろうにモチ米一升を入れた上に、熱が通るように立て並べてふかす。立臼に入れてつく時に、モチ草（ヨモギ）をゆでて入れて、一緒につき込む。モチ草の代りに、山からゴボッパを取って来て入れると、ヒキが強くておいしい草餅ができる。（諸戸字日影）

紅・白・草色の三色の餅をついて、ヒシ形に切って重ね、上に梅の枝をさして、ヒナ飾りの前に供える。（行沢）

ヒナ市　松井田買物に出かけて、ヒナ人形を買ってくる。（行沢）

十五日

春祭り　足日神社の春祭りは三月十五日で、家々では、いろいろな煮しめと赤飯をつくった。祭典には神官をはじめ、氏子が集まった。足日神社は指定社だったので、村役場から村長が判任官用の服装に木履姿で、神饌料、幣帛料を持参して参拝した（秋にも参拝があった）。当村の当初予算の第一款第一項第一目の筆頭に神饌料、幣帛料が計上されていた。戦前のことである。（八木連）

春祭りは三月十五日・十六日。田や畑の仕事を休み、晴着を着て、高田神社へお詣りに行く。神社では神主が来て祝詞を唱え、おはらいをする。その後、獅子舞、神楽や万才をする。各家では、赤飯をたき、煮しめを作る。（本村）

十七日

天狗堂　妙義神社の北西百メートルにある天狗堂のお祭りに、養蚕農家のマユ三十貫取りしたい人は、マユ玉（だんご）三十粒を借りてくる。翌年二倍にして返した。碓氷郡の多くの人々がお参りに来た。地元の人々の養蚕守護神として祭られている。（行沢）

彼岸

春彼岸　秋の彼岸は、蚕で忙しいが、春は、お中日にみだ堂でお念仏をやる。戦死者の墓参りをする。（菅原）

春彼岸は入り・中日・送りの三回ともボタ餅をつくる。だんごはつくらない。

ボタ餅はモチ米を釜で煮て、スリコギでついて半ゴロシにしてから、握って回りに小豆あんを付ける。キナ粉・ゴマのボタ餅をつくる家もある。

花・米・水・線香を持って、墓参りをして墓に供えてくる。（行沢）

天道柱　中日は机の上におあかり、線香・水・お萩を載せて縁側に出す。オテントサマに身を守ってくれるようにお願いするのである。出すところはテントウバシラのところ。丹生でもやっていたが、こちらでもする。春秋の彼岸ともにする。（下高田字本村）

春秋の彼岸には、テントウバシラのところに供える。（下高田字新光寺）

クサレ彼岸　「盆々トマチル盆ハタダ三日、クサレ彼岸ガ七日アル」という。彼岸のころ天候の変わりめで、よく雨が降ることをいう。（行沢）

先祖祭り　高田の須藤家ではよくやるが、ここらでは知らない。（行沢）

四月

八日

オシャカ様　お寺で、甘茶をもらう。（菅原）

陽雲寺では花御堂を飾って、誕生仏を立てるので、参詣人が甘茶を

かける。寺で甘茶をくれる。

草餅をつく家もある。（行沢）

「オシャカサマノハナクサモチ」といって草餅。寺に行くと、昔は、甘茶をサンザくれた。一升餅もってもらってきた。（下高田字新光寺）

ヤセウマ　ヤシャンマともいう。寺でウル米（ウルチ）で餅をついて、赤・青などの色を付け、径一寸ぐらいの太さに細長くして、せんべいのように切る。幾色も出て模様がつく。それをヤセウマといって、オシャカ様にお参りに来た人に分けてくれる。なまで食べるが、シッコリ固くて、味はない。（行沢）

十　二　日

鬼子母神　四月十二日。おさごをあげ、お参りに行くと、センダンゴという、小さい団子を、子どもに分けてくれた。（菅原）

十　五　日

妙義神社春祭り　四月十五日（春）と十月十五日（秋）がお祭りで、大牛・中里・古立・十二の川筋が氏子になっている。（諸戸字木戸・久保）

大文子　妙義神社の後背の山腹に「大」文字を造ってあるが、戦前前までは春祭（四月十五日）・秋祭（十月十五日）の前に、青竹を立て並べて幣束をさした。その後、紙不足のために木の柱を立て並べて、板を張った上に白ペンキを塗ったが、昭和四十四、五年ごろ、鉄骨を組み鉄板を張ってペンキを塗る現在の形になった。（妙義）

波己曽神社春祭り　神社氏子総代・祭り当番が立ち合って、神主に拝んでもらい、祭礼を行なう。当番が供え餅を神社へ供える。供え餅はあとで下げて、小さく切ってゴクウ（御供）として氏子の家々に配る。家々では赤飯をたいて祝うが、ほとんどお参りには出かけない。（行沢）

ゴモットモサマ　四月十五日の春祭りと十月十五日の秋祭りの時に、神輿の先にたって、若い衆が木で作った男根の首（亀頭の部分）にシメ縄を巻き、これを抱きかかえて、娘の尻を追いかけ、「ゴモットモサマ」と言いながら、またぐらのあたりに押しつける。（大牛）

アソビシメエ　四月十五日。蛇宮様の市に出掛ける。（下高田字新光寺）

二　十　八　日

不動様　四月二十八日に弘法様の爪ビキ不動を祭った。灯篭立ててにぎやかだったが、今はすたれた。大正五、六年ごろ島田与惣次氏の世話で行者が来て、突貫沢（ツキヌキ）の滝にかかって行をしたことがある。高さ六尺以上の滝にかかると、病気が治るといってはやったが、二年間ほどして、警察が干渉して止めたという。（行沢）

白倉の天狗様　甘楽町白倉のお天狗様は、四月二十八日ときまっている。木の太刀を自分で削ってそれに「奉納　〇〇氏」と書いて持って行ってきた。今は行かなくなった。（下高田字新光寺）

五　月

二　日

八十八夜　「八十八夜ノワカレ霜」というだけで、別に何もしない。（行沢）

五　日

男ノ節供　初節供の時には、のぼりをおくる。ショウブ湯をたてる。ヨモギ、ショウブを軒にさす。三日のうちに、順調に枯れれば、その年はいい。四日五日たっても枯れなければ、その年はわるい。（菅原）

五月節供　男の節供ともいう。初節供にもらったノボリ旗（家紋入

り）やコイノボリを庭に立てて祝う。（行沢）

五月節供には幟（のぼりばた）幡を立てる。武者の絵入りの幡をいくつも並べて飾った。昔は鯉のぼりも紙製で、天気もようを見ながら吊したり、揚げたりした。

軒端にはショウブとモチグサの葉を上げた。

五日の節供には餅はつかず赤飯で、嫁はタラの干物五枚と、ほかの手みやげをもってお客に行った。（八木連）

昔は内飾りはほとんどしなかった。たまに家計の良い家が五月人形として、神武天皇、金太郎、鐘旭などを飾った。家の外には、旗を立てた。これは神社のお祭りの時のと同じもので、鯉のぼりはあまり立てなかった。

柏餅を作った。その他、煮しめ、きんぴらゴボウも作った。

屋根にショウブをさし、ショウブ湯に入る。（下高田字本村）

男の節供は赤飯。前夜菖蒲とモチグサで屋根をふいた。菖蒲湯に入ると風邪をひかないといった。（下高田字新光寺）

初節供　長男の初節供には、のぼり旗が贈られた。コイノボリとともに外へ立てた。

内飾りは戦後になって流行してきた。（行沢）

男の子の初節供には、家紋の入ったノボリ旗やコイノボリが、親戚や近所から贈られる。お返しにはカシワッパ餅を返す。

嫁は実家へタラの干物を持ってお客に行く。（行沢）

カシワッパ餅　カシワ餅のことで、自家製である。ウル米（ウルチ）を粉にして、こねてあんを入れて丸め、カシワの葉に包んで葉柄をさして止め、ドウ（丸形のせいろう）に入れてふかした。（行沢）

ヨモギ・ショウブ　五月節供には屋根に三ヶ所、ヨモギとショウブを飾った。蛇・ムカデよけだという。（行沢）

ショウブ湯　宵節供（四日夜）の時にショウブ湯を立てる。女衆が先に入れなどということは聞かない。フキゴモリともいわない。（行沢）

ショウブ伝説　昔、蛇が男に化けて女のもとに通った。やがて女が妊娠した。男が家に帰って、「お前はいい子を残したが、ヨモギ・ショウブの湯をたてて入ればくだる」といわれているのを聞いたので、ショウブ湯をたてて女が助かったという。（行沢）

大桁山　五月節供には若い衆が大桁山に登って、ワラビを取って来た。（下高田字久原）

八　日

稲含山祭り　五月八日（現在五月三日）に登拝して、マユ玉借りに行った。マユ玉を十五個借りてきて、次ぐ年に二倍にして納めた。毎年、マユ玉をなしたり、借りたりした。（行沢）

五月八日には稲含（山）に村中の人たちが、登った。まつりがあった。（中里字北山・菅原）

六　月

蚕餅　カイコの祝いとして、蚕がフナ休みに入った時に、休ミ餅をつく。モチ米で餅をついて、隣近所や縁者に配ったり、もらったりした。忙しくてくたくたに疲れた時に祝った。（行沢）

春蚕の三眠ぐらいに必らず一回休み餅をついて、親せきや近所に配った。養蚕の祝いであった。（八木連）

入梅　入梅がこないと梅が熟さないといって、青梅を食べなかった。（八木連）

七　月

二　日

半夏生　半夏生の日は昼が長い。この日にはハゲン様がネギ畑で立往生したので、ネギ畑に入るな、ネギを食うなという。

ハゲン様が日が暮れるまで仕事をしても終らないので、「もうちょっと日が長ければいい」といったら、西空に入った太陽が再び出て来て、にらめっこしたという話がある。（行沢）

旧六月十五日

吾妻屋神社夏祭り　以前、金雞山の中腹にあったころ（大正時代）、旧六月十五日にお祭りをした。小麦の赤飯を作って供えた。オコモリに行って、一晩中たき火をしながら、座り込んで酒を一杯飲んでいた。太鼓をたたいたり、ホラ貝を吹いたりした（ホラ貝は盗まれた）。

神楽殿（かぐら）があって、諸戸の人が太々神楽をした。「伊勢の神楽」といって、三人舞を面を付けておどるもので、蚕室で練習した。（諸戸字木戸・久保）

十八・十九日

農休み　朝飯前に草刈りを二セか三セやったあと、遊ぶ。たもとの着物を着て遊んだ。仕事をすると「モノグサ者ノ節供バタラキ」といわれる。松井田へ農休み買い物に行って来る。農仕事が遅れてきた時に、近所の衆が手伝いに来てくれたので、お礼に品物で返した。手伝いを頼んだ時にはお金で手間賃をはらう。エエ（助け合い仕事）の場合はエエガエシを手間で返す。（行沢）

七月十八、十九日を町で決めて農休みにする。コアゲ（蚕上げ？）という所もある。嫁は「コアゲだから、家に行って来う」といわれて、実家へお客に行く。

農作業がひとくぎりして、いろいろの貸し借りのお礼をする。（諸戸字日向）

七月十七・八日が農休みで、野良仕事を休んで遊ぶ。年間の前半の仕事が一段落したともいえる休みである。初日は赤飯・二日目にはまんじゅうをふかし、養蚕や田植えなどに手伝ってもらった人を招いてごちそうをし、金を払うとか、足駄などを贈る。寸志というところである。嫁はお客に行った。三日目を農休みガラと称して半日位は遊んだものである。（八木連）

農休みは七月十八・十九日。農休みは区長会で日を決めた。今は勤め人が多いので日曜日になる。農休みの初日共有山（一町七反歩、杉、楢、くぬぎが植えてある）の下刈りをやり、部落全戸から老若男女かまわず出ることになっている。もとは出不足をとったが今はとらない。その他道路普請もそうだが、オテンマのときの道具は個人持ちである。（上高田）

農休みは十九日、二十日にする。この日各家は仕事を休み、地区の共有林の下刈りをする。宿を年番で決め下刈りの後酒をのむ。各家では、赤飯と煮メを作る。（下高田字本村）

ショウボン　嫁に来て初めての農休みには、嫁ぎ先で着物を作ってもらって、それを着て、嫁が里へお客に行く。これをショウボンという。（下高田字千福寺）

天王サマ　昔やった。七月の農休み時分で、村中が麦わらを持って集まり、麦わらを燃して、天王さまにキュウリを進ぜてお祭りをした。（八木連字上八木連）

九日をぎおん、と呼んだが何もしたかった。（下高田字本村）

二十八日

石尊行（せきそんぎょう）　七月二十八日（今はその前の日曜日）に二ッ岩の深い渕の所で大山石尊を祭る。石尊奉讃会の人が中心になり、幣束二十四本付けたボンデンを高田川の中に立てる。村中の男衆が出て、川で水をあびて行をして、オシメ（シメ縄）に水をすくってかける。濡れてオシメの紙が落ちるまで水をかけて祝う。

一ッ岩、二ッ岩の上にボンデンを一本ずつ立てたので、もとはカギ屋（世話人）に集まって作った（古立と一緒だったが、その後分かれた）。昔は大山石尊に代参したが、今は行わない。（行沢）

石尊精進　七月十八・十九日の農休みガラ（翌日）に、クワの葉に白米飯のにぎり飯十二、三個をのせて包み、盆に載せて石尊様に供える。八丁ジメを作って、村境の橋（天神橋・寿崎橋）の脇などに立てる。（行沢）

初めて参加する男性は、一升酒を買って仲間入りをよろしく頼むといい、紹介される。（行沢）

石尊様は七月三十日。川に石をつんで、これに水をかけながら、「サンゲ・サンゲ・六根清浄」と唱える。藁で作った長さ一尺のツトッコに幣束を立て、これを竹の棒の先につけて、川端の人目につきやすい所に立てておく。大久保では、三人ずつ当番で大山の阿夫利神社へ代参が行った。行沢では、石尊様（石宮）に「六根清浄」と唱えながら水をかけた。（大牛）

城　山
阿夫利神社へ行く前に、山麓の川で水を浴びた。（菅原）（撮影　近藤義雄）

石尊行は七月二十八日、下八木連は十年ほど前まではやっていた。竹芋の上にわらを束ね、御幣束をのせ、高田川の川原に行き、村の男衆が裸となって、ボンデンを立て、川の向うとこちらにシメを張り、川上に向って並んで水をかけ、行を唱える。祝詞は、

「オノモオノモ、コイノミマツリ　カケマクモカシコキ大山阿天利大神　大山祇神　前ノ社ハ高竈大神　奥ノ社ハ大雷大神　守リ給ヒ、恵ミ給ヒ　アワレミ給ヒ　助ケ給ヒ　事ウマラニ　ミシルシヲタテシメ給ヒ　サキワイ給ヒト　カシコミカシコミ申ス」

こうして三回祝詞をくりかえし唱えて水をかけて行を終る。

上八木連では、やはり高田川にシメをはり、村の人が裸になって川上に向い「サンゲサンゲ六根清浄　大山石尊大権現　大天狗小天狗…云々」と唱えて水をかけた。終戦になってからはやらないが、おしまいぎわには当番だけでやったこともあった。（八木連）

石尊行は七月二十八日。厄病神を除ける行事で幣束を立ててまつることがあった。

昔は村中で二食は生臭いものを食べないでまつりに参加した。

二十八本のボンデンをマキ俵の上に立ててまつったともいう。

不幸のあった家の者は参加出来なかった。（中里字北山・菅原）

石尊行は七月二十八日、村の大世話人、炊事当番の人たちが世話をして石尊行が行なわれた。

八丁ジメ
石尊行の時に境に立てる
（行沢）（撮影　関口正己）

青竹を川幅に応じて二本立て、その間になわを張りヤタレという幣束を下げて、それを境にして互に東西（上下）に分れて水の掛け合いを行なった。

その竹の先に麦束を結え、そこには十二本の片ぴらの幣束を差しておいた。（中里）

八丁ジメ　道シメともいう。隣部落との境に笹竹二本立ててシメ縄を張り、悪病除けにする。行沢では石尊行の時に立てるが、諸戸地区ではしない。（諸戸字木戸・久保）

石尊行の時（七月二十八日ごろ）、石尊奉讃会の人がオシメを笹竹に付けた悪魔除を作って、村境の三カ所に立てる。よそから悪魔が来ないように祈りをあげる。（行沢）

七月二十八日の石尊行のあとで村の境界にシメナワをはり、悪魔除けのお札を竹につけて立てる。昔は道をふさぐように張ったが、車の往来が激しくなってからは道に張らずに、まとめてしばっておく。八丁ジメという。（八木連）

三十日

大祓　七月三十日。北山地区の三カ所のムラ境で、大祓をする。紙を人の形に切って、名前と年齢を書き（家族全員）、妙義神社へ持って行き、神前に供えて、神主にノリトをあげてもらう。麻を五分の長さに切り、和紙を二センチまっ角に切ったものを、人形といっしに拝んでもらう。これを部落代表（神社総代）が頭・胸・腹・足をなで、社殿に置いてくる。竹の子の皮に包んだ厄除けの札を宮司から受けて来て、部落の境の辻に、新竹三節おいて、一番下の枝にしばりつけ、この竹を立てる。疫病の入ってくるのを防ぐ呪いである。（大牛）

土用

虫干し　家の中をあけ開いて、柱から柱へ、ユッツケ帯を結び渡したり、綱を引いたりして、たんすの中から着物を出して吊るす。（諸戸字日向）

梅を漬けたものを、かめから上げて、三、四日干す。（諸戸字日向）

七日火　しない。（諸戸字日向）

妙義町では七晩ゲの行事はない。（妙義）

八月

一日

カマノクチアケ　八月一日。墓掃除をする。（菅原）

カマノクチアケは八月一日（盆月の一日）。この日は墓地の掃除を行う。ふかしまんじゅうをつくって、仏様に供える。

むかしのいい伝えでは、この日、仏様が（お客）に出かけるという、墓地は仏様の庭だからこの日きれいにして、仏様が盆に出かける用意をしてやれといった。

盆の一日になると、セミをとってはいけないといった（上高田字山下・川幡）。

八月一日は釜の口あけでふかし饅頭をつくる。七日がオハカコシラエで、御先祖様はお堂で待っているという。（上高田）

カマノクチアケは八月一日で、盆に向かって、地獄から仏様が出かける日という。カマとは関係がない。

まんじゅうを作って、神仏へ供える。ヤキ餅は毎日作るので、特にこの日とはいわない。

新盆見舞に出かけてもよいというが、十四日に行く人が多い。（行沢）

カマノクチアケは八月一日で、百姓仕事を休み、まんじゅうを作って食べた。昔は磯部温泉へ温泉汲みによく行ったもので、この鉱泉でまんじゅうをつくった。（八木連）

八月一日をカマノクチアケといった。アズキアンのタンサンマンジュウを作った。マンジュウは別にどこにも供えない。この日、カマの口があいて、仏様が百三十里の道を一日に十里ずつ歩いて、十三日

に家にとどくといわれている。また、この日から盆が終るまで、生きものをとってはいけないといわれた。またこの日以降、盆までに死んだ人には、頭にシラジをかぶせて墓地にいけた。（上高田字下十二）

釜ノ口明ケは一日で、この日から御先祖様が家へ帰る旅に出る。墓掃除をする。各家ではゆでまんじゅうを作る。この日から、蟬や生き物をとってはいけない。（下高田字本村）

カマノクチアケにマンジュウをつくる。この日からせみをとってはいけない。お釈迦様が釜の口をあけるのでありとあらゆるものが出てくる。（下高田字新光寺）

七　日

七夕飾り　新竹一本に色紙に字を書いて吊るす。色紙でスカリ（綱）を切って、竹のウラ（先端）に吊るす。このスカリの部分を取って置いて、菜畑に立てると虫がつかないという。里芋の葉の露で墨をすって字を書くと、手があがるといい、子どもが書いた。

七夕飾りをした縁側にフカシマンジュウを皿に盛って供える。（行沢）

七夕の飾りを畑に立ててお

七夕飾り
笹の先端にアミ飾り（スカリ）を吊す。
（諸戸）　（撮影　関口正己）

七夕飾り
先端に網（アミ）を吊るす。
（諸戸）（撮影　関口正己）

き、虫除けにした。

この飾りに願いごとを書いたが、硯の水は里芋の葉にたまった水を使った。（中里字北山・菅原）

七夕　七つまんじゅう食って、七回水あびしろという。（行沢）

前の晩（六日）に、竹の笹にいろいろの飾りをつけて立てる。これは昼食後の仕事である。

七夕の当日には、ふかしまんじゅうをつくって（七夕様に）しんぜる。夜は、うどんをしんぜてから（夕食を七夕様に食べてもらって）、飾りの竹を川へ流した（上高田字山下・川幡）。

七夕は八月七日で、今年出た新しい竹に、色紙の短冊に色々の字を書いて、朝早く門に立てて飾った。字を書く水は、里芋の葉の上にたまった露を集めて硯に入れてすって書いた。夕方川へ流した。この日、子どもたちは七回まんじゅうを食って七回水あびをしろといわれた。この日は墓地の清掃の日ときまっていた。また七夕の先に飾るスカリとよぶアミ状のものは、とっておいて養蚕の当るようにしたり、葉大根をまいた時の虫除けにした。（八木連）

七夕は八月七日で、里芋の葉の露をとって来て墨をすり、短冊に川の名、星の名を筆で書き、竹につるす。この他、鎖やすかし綱を作ってかける。この日はユデマンジュウを作る。まんじゅうを七個食べ川の水を七回あびる。ネブタ（ネムの木の葉）をとって来て目をこすって顔をこすると目の病にならな

七夕の笹飾りの先端を残して、あとで大根畑に立て虫除けの呪にする（八木連字大久保）（撮影　関口正己）

いという。頭の病気のある人は川で髪の毛の先だけ洗う。七夕の竹の先をとっておいて大根畑へさすと、虫に大根を食われない。(下高田字本村)

七夕は八月七日で新竹にたんざくを下げる。七夕マンジュウをつくる。「七つマンジュウ食って七回水をあびる。」といった。里芋の葉にたまった水で字を書くと上達する。竹の枝の一部分をとっておいて畑に立てると虫がたからないという。(下高田字新光寺)

七夕の日には七回マンジュウを食べて七回水あびをしろといわれた。また七夕の日には白菜などの、菜っ葉類はまくなといわれた。またこの日には墓掃除をする。(上高田字上十二)

まんじゅうを作って、タナバタサマに供える。「まんじゅうを七個食って、七回水を浴びろ」と言われた。人形をたたんだものを下げた七夕飾りを、天道柱(縁側の真中の外側の柱)にしばりつける。七日の夕方、大川へ持って行って流す。竹の枝先を折って菜畑に立てておくと、虫封じになる。(中里)

七夕の墓掃除(下高田　生寿寺裏墓地)
(撮影　都丸十九一)

七夕にはタンサンマンヂュウを供えた。小麦粉に重曹を入れて作る。アンはあずきアンを入れた。重箱かメンパに七つ入れて供えた。軒下に机を出し、その上に供えた。(大久保)

墓掃除　七夕の日、八月七日に墓の掃除をする。花と線香を進ぜて来る。(諸戸)

七夕には墓掃除をする。この辺は個人個人の墓が多い。七夕の日の朝十時前に、女衆は髪の毛を洗えば、頭病みをしないという。

盆の前に盆の道具を洗う。(諸戸字木戸・久保)

七夕には墓掃除をする。墓場へ行く途中の道刈りをわずかでもする。(行沢)

洗い物　七夕から迎え盆までに、供え物をする茶碗やどんぶりを洗う。髪の毛を洗うことは聞かない。(行沢)

七夕雨　七夕には、雨が降った方がいい。降れば行き会える。七夕には、幾粒でも降ることになっていた。日照りには待っていた。桑をかならず取っておいた。(菅原)

七夕には雨が降る。夕立がするという。星を祭ることはしない。(行沢)

盆買い物　「松井田買い物」といって、松井田まで男の人が歩いて買い物に行った。(行沢)

十二、三日

盆花　キキョウ・カルカヤ・オミナエシ、今は全部はないから、何の花でもいい。(菅原)

盆棚の前の左右の竹の柱に、盆花をさすための竹筒を結び付けてあり、向かって右に生花、左に造花をさす家もある。(諸戸字日影)

盆花はキキョウ・オミナエシを山から取ってきて飾る。造花の盆花は毎年買って供える。(諸戸字日向)

盆花はオミナエシ・キキョウ・オゼンバナを山からとってきて飾る。オミナエシは遠くの山にしかない。粟のような花が咲くのでアワバナという。

キキョウは妙義の代表的な花だが、昭和四十年ごろ根が薬草になると言って、うんと堀ってから山に無くなった。

オゼン花は赤い花である。(諸戸)

盆花取りは十三日ごろだが不定。キキョウ・アワバナ(黄色い花)・ミソハギ(赤紫色の花)などを山から取ってくる。最近は山にこれら

の花が少なくなった。ハギの花はまだ咲かない。ミソハギの花は、コップの水に浸して、水をかける時に用いる。迎え盆の時、コップに水を入れて行き、カドから迎えてくる時、ミソハギの枝（一本）を水に浸して、盆花にかける。送り盆にも同様にして、コップの水をミソハギの枝で、送り火にかける。（行沢）

盆花は山からオミナエシ・ミソハギなどを取ってきて盆棚に飾った。オミナエシはアワバナ（黄色）ともいい、盆花の代表とされる。昔はオゼンバナ（黄色で四弁）・ナデシコなどがあった。（行沢）

十　三　日

盆棚　十三日は盆迎えで、盆棚を作る。あまり簡単だと、「盆棚のようだ」という。おがらを、うちのかいどうで燃し、うちの方へ倒す。送り盆の時は、芋の葉の上に、ナスやキュウリの馬を作り、食べるものを刻んで、お弁当を持たしてやる。おがら燃して、お寺の方へ倒す。線香を立てて、道しるべにする。（菅原）

十二日にチガヤをとってきて縄をない、十三日に盆棚をつくる。この盆棚には寺から榧（かや）の木の枝を貰ってきてあげた。諸戸では杉の葉を貰ってきてあげた。（菅原）

盆棚に、杉の葉やほおずきと一諸にカヤ（榧）の枝を吊す。大概のお寺には、カヤの木がある。御先祖様が、蚊に食われないように、かやをつるのだという。なお、カヤの実は炒って、寺世話人が寄る時には、お茶菓子に、きまって出す。

盆棚のチガヤをなう（下高田）
（撮影　池田秀夫）

盆　　棚（下高田）
（撮影　池田秀夫）

盆　　棚（古立）
（撮影　阿部　孝）

盆　　棚
竹４本立てチガヤの縄を上下２段に張りスギの葉・ホオズキを吊す。前２本に竹筒を付け、盆花をさす。（左は造花、右は生花）下に無縁仏の供え物を置く。（諸戸字日影　佐藤久雄家）（撮影　関口正己）

盆　　棚（下高田）
（撮影　池田秀夫）

盆　　棚
竹を前面に立て、後方は略した。（諸戸字日影　星ます家）
（撮影　関口正己）

盆　　棚
座敷の縁側に接して組み立て、笹竹４本を立てる。（諸戸　佐藤正勝家）
（撮影　関口正己）

盆　　棚
新しい盆ゴザを敷き位牌を全部並べる。下の段は無縁仏の供え物。左手前の芋の葉にナス・キュウリ・ナシなど盛ったのは盆送り用のみやげ物。（諸戸字日向　市川辰広家）
（撮影　関口正己）

盆　　棚（組立式）
新しい盆ゴザを敷いて、位牌を並べ供え物をする。机上には無縁仏のために茶を供える。（八木連字大久保　岩井幹家）
（撮影　関口正己）

いく日か前にチガヤを刈ってきて、干しておいて、チガヤの縄を左縄になって棚のまわりの四本の竹に張りめぐらす。杉の葉とシキビの葉と赤いホオヅキを吊す。組立式の盆棚に新しい盆ござを敷いて、仏壇から位牌を全部出して並べる。編んだ敷物は使わない。（諸戸）

組立式の盆棚を組んで、回りに新しい竹四本を立て、左よりにしたチガヤの縄を張り回す。縄にはスギの葉やホオズキの実を吊るしたり、生うどんやヒヤムギを掛けたりする。棚には新しい盆棚を敷き、仏壇の位牌を全部出して飾る。（諸戸字日向）

盆棚は新竹の葉つきのままのを四本立て、チガヤを刈って干して左ナワになったのを張りめぐらす。杉の葉と赤いホオズキを吊す。菅原ではカヤの実も吊すそうだが、ここではしない。盆棚を作る場所は仏壇の前、座敷の縁側に近い所や別の座敷など家によりそれぞれの所に作る。棚には新しい盆ゴザを敷くが、カヤなどの編みものは使わない。竹の葉がどういう訳か一枝だけ葉のしなびない所ができる。仏様がここから上ったといった。里芋の葉を敷いて皿のようにして供え物をして、送る時もこの葉に包んで持たせてやる。（行沢）

カマノクチアケにチガヤをとって来て、かげ干しにしておいたものでシメ縄をなう。盆棚は木の枠があって、この四隅の枠に新竹をしばりつけ、シメ縄を張りめぐらす。シメ縄には、杉の葉・シキミ（墓に植えてある）・ホオズキなどを下げる。盆棚の上には仏壇から出した位牌を飾り、下には器に水を入れてミソハギを活ける。これは無縁仏を祀るのだという。供えものは、上の段と同じものだが少なめにする。（妙義）

盆棚は組立の枠に飾りつける。毎年新しい盆ゴザを敷いて、その上に位牌を並べる。木の枠組の四隅に今年出た青竹をしばりつけ、チガ

杉の葉を吊すのは、線香は杉の葉で作るものだから、線香をあげるのと同じ気持ちだ。（菅原）

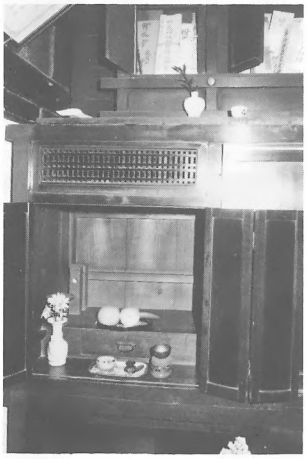
ヤの縄を張りめぐらす。真ん中と上の二か所はる。この縄に杉の枝とホオヅキをつける。下には杉の葉を置いて、無縁仏を祀る。供えものは、棚の上と同じである。（中里）

竹を四本立て、これにチガヤを左縄になったのを回らす。この縄には杉の葉・ホウズキを交互につるす。盆棚の下には、一人前にならないで死んだ無縁仏を祀るとして、イモの葉に野菜を入れて置く。大久保ではこの供物は、仏様に分けてやれるようにといって、細かく刻んでやる。（下高田）

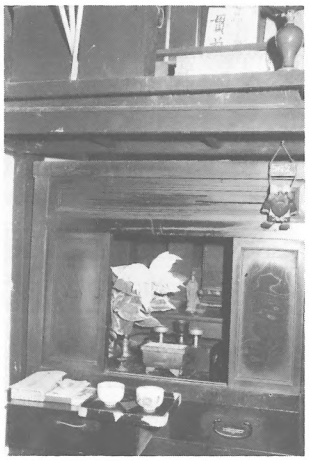
盆棚は仏壇の前にしつらえるが、アラ盆の場合は、四本の竹を四方に立てた棚とする。チガヤ縄、新しいござ、青竹の筒に盆の花をさして立て、提灯を下げる。チガヤの縄を棚のまわりにまわして杉の葉を下げ、ホオズキを下げる。ヒルベタイ、これはひやむぎであるが、これを冷たいツユで供える。なおこのあたりで盆花というのは、キキョウ、オミナエシ、ほかに造花などである。（下高田字新光寺）

供え物　盆棚には仏壇の位牌を全部出して並べる。供え物はうどん・ボタ餅などのほかに、ナス・キュウリ・サツマイモ・トウモロコシなどの野菜、ナシ・ブドウ・リンゴなどの果物、茶、線香、灯明、水などを供える。（諸戸字日向）

無　縁　仏
盆棚の下に笹の葉を置いて宿る所にする。
（行沢　嶋田つね家）（撮影　関口正己）



盆のオルスイ様
仏壇の位牌を全部盆棚に移して、留守になるが供え物をする。（諸戸字日向市川辰広家）
（撮影　関口正己）



オルスイ様
仏壇の留守の所へ、供え物をする。（八木連字大久保　岩井幹家）（撮影　関口正己）

オルスイ様
仏壇の位牌を全部盆棚に移して、空にする。（諸戸　佐藤正勝家）　（撮影　関口正己）

盆ござ　盆棚の上に敷く盆ござは毎年新しく買う。（諸戸字日向）

無縁仏　盆棚の下へ竹の枝を置き、無縁仏を祭る。そこにも少し供え物をする。（諸戸）

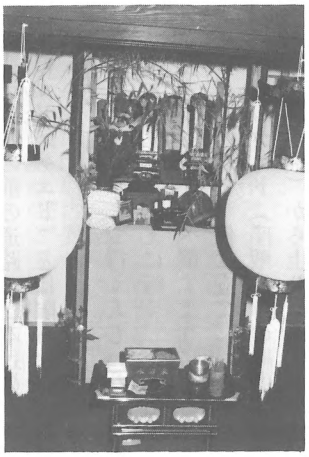
無縁仏は家族の中で、未婚のうちに死んだものや、子どもの仏をいう。また、行く所のない仏もいう。盆棚の下に未婚者の位牌を並べたり、前方の一番低い所へ机を置いて、無縁仏に進ぜたりする。（行沢）

無縁仏は盆棚の下に杉の葉をまとめてお盆にのせておく。無縁仏が杉の葉のかげでご馳走を食べるという。（行沢）

盆棚の下に笹の葉を置き、無縁仏が宿る所として、供え物をする。盆棚より一段下の机上に、無縁仏への供え物をする家が多いが、新しい風習ら

しい。（行沢）

盆棚の前の下に、杉の葉を置き、その上に香炉などをおいて、無縁仏をむかえた。線香は一本立てる。また供え物は、ふつうの仏様にあげるものと同じだが、量が少ない。無縁仏様のボタモチを食べると、夏やせしないといって、他の家のものをもらって食べた。（上高田字下十二）



寺の盆棚
本堂の廊下に置き、盆迎えに来た檀家の人々が、ここから盆様を迎えていく。（諸戸随応寺）（撮影　関口正己）

墓　地
盆の前（七夕のころ）掃除をして花を供える。盆迎えにはあまり来ない。
（諸戸　随応寺）　（撮影　関口正己）

盆　迎　え（下高田）（撮影　池田秀夫）

無縁仏は棚の下に供える。（下高田字新光寺）

オルスイ様　仏壇の位牌は全部盆棚に移して飾り、仏壇は留守になるが、オルスイ様に対して簡単な供え物をする。（諸戸）（八木連）

盆棚参り　特別にはしない。（諸戸字日向）

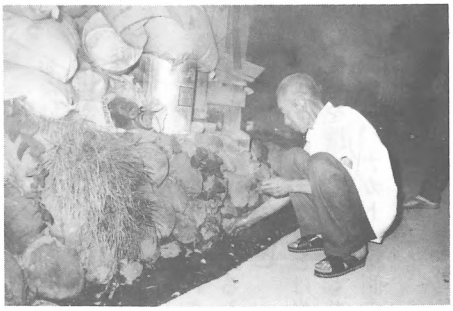
寺の盆棚　随応寺では本堂の廊下に外へ向けて盆棚を設ける。四隅に文字を書いた色紙を下げる（今年は省略）。檀家が迎え盆に来て、寺でひいた粉茶（紙袋入り）をもらって行く。この粉茶を家々では十三、十四、十五日に盆棚に供えて、送り盆の時にはカドに供えたり、茶袋ごと残らず送り出してやる。

檀家が迎え盆の時に寺では送り盆で、檀家が送り盆の時は寺では迎え盆だという。（諸戸字日向）

盆供（ぼんく）　盆の十五日か十六日に寺へ参拝して、盆供と書いてお金千円から三千円くらい供えてくる。干しうどん二、三把も持って行く。（諸戸字日向）

墓地　盆の前にきれいに掃除をして竹筒を立て、盆花を供えて置くが、盆の送迎には墓地へ直接行かないで、家のカドですませる。（諸戸

盆　迎　え（ケードに線香を立てる）（下高田）　（撮影　池田秀夫）



盆　迎　え（線香を立てる）（下高田）（撮影　池田秀夫）

字日向）

迎え盆　迎え盆は早く、送り盆は遅くする。（菅原）

十三日の迎え盆と十五日の送り盆の日だけ火をたいた。（菅原）

盆迎えは八月十三日、墓へ行って花をさして、線香を立てておがんでくる。夕方家のカドで麦ワラを燃してお盆様を迎える。その火で提灯のローソクに火をつけ、線香にも火をつけてきてきて、盆棚のあかりをつける。（諸戸）

盆迎えは八月十三日の昼間、寺へお参りする人もいる。夕方、家族がカドまで出て、麦わら束を立てて燃やし、盆様を迎える。線香や提灯に火をつけて、線香は半分カドに立て、水も上げる。火を付けた線香の半分と、提灯を持って、家まで迎えてくる。

中島家では、紋付を着て提灯持って墓参りをして、線香を上げてくるが、一般にはカドから迎えてくる家が多い。（諸戸字日向）

盆迎えは家の前の道路の三本辻のカドから盆様を連れてくる。そこは家のカド（ケエド）とは限らない。墓場には行く人も、行かない人もいる。

墓は紋付・はかまで行く人もいた。家族が揃って提灯をつけて、カド（ケエド）へ盆迎えに行く。カドに麦ワラを立てて火をつけて迎え火を燃すが、家の方へ倒すようにする。（送る時は、向こうへ倒す）。線香に火をつけて、傍に立て、一部を家に持って来て盆棚に上げる。帰りは家のナカド（座敷の外の縁側）から上がる。

ナカド（座敷）から上り下りするのは、和尚さんや出棺の時と同じである。（行沢）

迎え盆は八月十三日にお墓へ迎えに行き、提灯にあかりをつけて迎えてくる。門先でワラに火をつけて燃す。この煙に乗って、盆さまが家へお入りになるという。（妙義）

盆迎えはケイドウ又はお墓から迎えて来る。線香かロウソクに火をつけて迎える。送る時はナスの馬を作り、ハスの葉に、土産を上げてケイドウからお墓に送る。（古立）

迎え盆は八月十三日。カイドで迎え火をたいて盆さまを迎える。カド火の煙に乗って、盆さまは家に入る。（中里）

盆迎え、盆送りは、家のカイドウより迎えたり、送ったりする。（中里）

盆迎えは家のカイドで、むぎわらを一束ぐらい燃やし、これを家の方向に倒して「このあかりで、きさっしゃい」といった。送るときはカイドの方へ向けて、むぎわらを倒した。（八木連字大久保）

八木連では、墓地へ迎えに行く家と、ケエドで迎える家とは半々くらいである。墓地へ行く家では、弓張り提灯を持って行く家もある。ケエドで麦わらを束ねたものに火をつけてから、ナカト（縁側の方）から上る。（玄関から入る家も多いという）。

夕飯は盆さんの前で食べることになっていて、魚を食べる。「仏に口を吸われないように」ということである。（八木連）

盆迎えには縁側にゴザを敷き、線香を立て、おみあかしをつけて仏様を迎える。そのとき「仏様の足洗い水」といって、どんぶりに水を入れ、ミソハギの枝を入れたものを用意しておく。このミソハギの枝で水をふりかけ、仏様に足を洗ってもらって、盆棚に仏様を案内した。迎火はたかない。（上高田字下十二）

盆迎えは十三日に盆棚を作り夕方迎える。お墓へ提燈の中へ蠟燭を入れ持って行って火をたき、それを蠟燭につけて家へ持って来る。ケードでわら束を立て、そこへ蠟燭の火をつけ、わらからまた火を蠟燭につけ盆棚へ立てる。わら束は家の方へ倒す。この火をまたぐと、しもの病にかからない、といわれている。（下高田字本村）

迎え盆は十三日には墓地でおあかりをあげ、カイドウで火をたいて家の方に火を倒す。家の方に倒れると、ご先祖様がお客に来たんだといって喜ぶ。迎え火のところでお線香をつけて仏壇に上げる。寺から来たお茶をしんぜる。（下高田字本村）

盆迎えには八月十三日夕方盆棚につるしてある盆提灯に火をつけ、家族全員揃って門にもっていく。ここで麦藁のタイマツに火をつけ、タイマツから線香に火を移し、これを道の両側に立て（あるいは線香を一束カドにたてる。この煙にのってお盆様はくるという）、あとは盆棚にもっていって立てる。このとき家族全員履物をぬいで縁側から上り、盆様の前で一緒に食事する。このとき鰯などなまぐさいものをたべる。（下高田）

盆迎えは八月十三日夕刻、カドで麦藁の束を燃やし、線香に火をつけて道ばたに立て、家に入って盆棚の線香立てに立てる。十五日夕の送りは、迎えと逆にする。（上高田）

線香は久原、北谷では路傍に立てないが、舞台、三屋前では束のまま、三屋では二、三本ずつ立てる。（下高田）

迎え盆には門口に麦わらを立てておき、墓からは提燈をともしてきて、その火を麦わらに移して迎え火とする。その煙にのって仏様がくるという。また提燈のろうそくの火を棚に移す。線香を供えて、その晩は棚の前で食べる。（下高田字新光寺）

盆の食事　朝―オハギ（小豆・キナコ・ゴマ）昼―ソウメン・ヒヤムギ、夜―御飯。

十三日の晩飯には必ずナマリなどの魚を食べる。ナマグサを食べないと、仏さんに口を吸われるからという。（諸戸字日向）

迎え盆の晩、ジャガイモを煮て供える。ナマグサ物を必ず食べろ、仏様に口を吸われないようにという。（諸戸字日向）

迎え盆の夕食　盆棚の前で夕食を食べる。この時「何かナマグサを食べるもんだ」といった。「仏様に口を吸われないように（死なないように）」といい、この晩一回は食べて、あとの盆中はナマグサを食べるなと言った。（行沢）

盆の食事　盆の十三、四、五日の三日間は盆棚の前で食事をした。盆迎えは早く、盆送りは遅くといい、十五日の夕食後送り出した。（古立）

お盆の食事は十三日夕飯には盆様に口を吸われないようにといってナマグサをたべる。十四日朝はオハギ、昼はウドン、夕は御飯、十五日朝饅頭、昼ウドン、夕は供えたものを用いて盆様と共食、十六日朝は御飯を盆様にあげたあと盆棚を崩す。（下高田）

盆の食べものは朝うどんとおはぎ、昼うどん、夜、ごはん、これは盆棚だけに進ぜる。家中では盆様と同じ食事である。（下高田字本村）

ヒルベテ　盆のときの昼うどんのことをヒルベテという。汁はキュウリモミにゴマ・アオジソを入れたりする。ヒルベテとは、盆以外にはいわない。（下高田）

食習　仏様はナマグサがきらいなので、魚を食べると仏様に口をすわれない、といって魚を食べる。これを盆魚という。十四日は、朝ボタモチ、昼はヒルベテイ、夕は飯。十五日も同様であるが、この日に餅をつくこともあった。（下高田字新光寺）

盆魚　盆の十三日に盆魚を食べないと、仏さまに口を吸われるといわれた。（八木連字大久保）

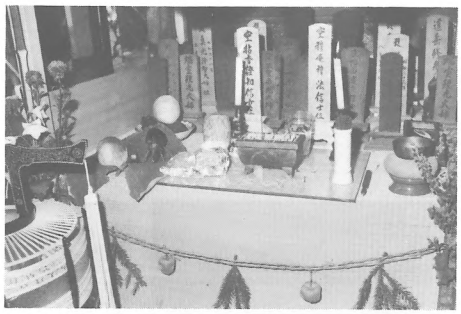
七月十三日には、仏様に口を吸われないようにといって、例え、シャケひと切れでも食べた。（下高田字下十二）

新盆見舞　新盆の時、「お盆だって、おさびしゅうございます」とい

新盆棚
竹4本立てチガヤの縄を張る。盆提灯が多く、新盆見舞の品が重なる。（行沢 嶋田理三郎家）
（撮影　関口正己）

新盆棚の上
茶碗に水を入れ、ミソハギの花を濡らして供え物に水をかける。（行沢　嶋田理三郎家）
（撮影　関口正己）

新盆棚
組立式の棚に、位牌を仏壇から移して並べる。
（行沢　嶋田つね家）
（撮影　関口正己）



新盆棚の上
新仏の位牌を中心に全部の位牌を並べる。ろうそく、線香、水、鉦、野菜、果物を供える。芋の葉にナスの馬や供え物をのせる。
（行沢　嶋田つね家）（撮影　関口正己）

くなどを持ってい行く。お返しにボタ餅を出した。（諸戸字日向）

新盆見舞は盆の十四日に、親戚や近所を十軒も回った。「新盆御見舞」の金包みと線香（昔はうどん・ひや麦）を持って行く。近親者には盆提灯を持って行く。（諸戸字日向）

新盆見舞は一日から行ってもいいというが、盆の十四日に行く人が多い。十五日なら午前に行けという。（行沢）

あら盆に百八灯はしない。十四日と十五日のあいだに、近い親類や近所の人があら盆見舞に来る。「本日は〇〇さんのあら盆で、お線香立てに参りました」と挨拶する。以前は近所の人は干しうどん三把ていどもって行ったが、今は千円包んで行くのが普通である。戦前はお返しをしないのが普通だったが、今は半額ていどの品物をお返しする家が多い。親のあら盆の場合、子供は盆提灯などの仏具を持ってあら盆見舞に行った。（妙義）

八月十四日から十五日の午前中（午後は送り出す）に、アラ盆見舞が来る。組うちの人や不幸によばれた人が来る。干しうどんを二～三把持ってゆく。だからかびが生えるくらい干しうどんが集まった。お返しはしなかった。今は金を包んで来るのでお返しをするようになった。酒は出さないがボタモチを大皿に山盛りにして出して、箸でとってオテノコボにして食べてもらう。

子供など近親者は盆提灯を上げる。（中里）

盆提灯　盆には神棚へは供えない。盆棚の下に無縁仏の位はいをまつる。昔の盆提燈はおがらで三角にしたものに障子紙をはって作った。これは送り盆がすんだらお墓へ置いて来る。盆には子どもたちだけで提燈を下げ、ゆかたを着て、大通りを歩いた。（下高田字本村）

盆の野回り　盆様を迎えた日（十三日）に、家の主人が、弓張提燈を持って、畑を回ったことがあるという。これは、むかしの話として聞いたことで、このことを何と呼び、どんな目的で行ったのかもわからない。（岳）

仏の野回り　父親がいっているのを聞いたことがある。（菅原）

火トボシ　南牧で見たが、ここではやらない。（菅原）

盆月の死者　盆月の一日から盆が終るまでに死んだ者は、葬る時に頭に皿をかぶせてやった。それは、死者が盆で家に来るのに、行く者は馬鹿だといい、仏が道々で頭をたたくのでかぶせてやるのだといった。（中里字北山・菅原）

十五日

盆送り　八月十五日の夕方、盆棚の前で食事をしてから、家族が提灯・線香に火を付けて、ナス・キュウリの馬と供え物や水を持って、カドまで盆様を送り出す。ナスやキュウリの馬にはうどんの荷縄を掛ける。カドに出て麦わら束に火を付けて向こう側に倒して送る。道ばたに盆花（造花）を立てて供え物を置き、線香を立て、水を供えて帰る。帰る時は後ろをふり向くと、仏様に連れて行かれるので、後を向くなという。

迎えるのは早い方が良い。送るのは遅いほうがよいという。（諸戸字日向）

盆送りは十五日夕方、盆棚の前で家族揃って夕飯を食べてから送り出す。提灯に火をつけ、みやげ物（ナスをさいの目に切って、里芋の葉に包む）・ナスの馬・水（やかん入り）・線香・麦わら束などを持って、座敷から直接に庭へ降りる。屋敷から通りに出るカドで、送り火を焚き、道路側へ倒す。この煙に乗って仏様が帰るという。「また来年来て下さい」などという。カドの小高い所に線香を立て供え物を置き、水をそそいで拝んで帰る。盆棚は十六日にこわす。（諸戸字日向）

盆提灯は新しい提灯を買うので、古いものは送り盆の時に、カドで燃やす。（諸戸字日向）

盆送りは提灯にあかりをつけて子どもが持って、カドへ送り出す。カドで麦わらの火を焚く。道の端の上に供え物をして線香を上げる。「また来年来とくれ」などという。（諸戸）

盆送りは里芋の葉にみやげ物を載せて、家から線香をつけて、カドの道ばたへ送り出す。このみやげ物を拾って食べると夏やせしないという。また、タクアン和尚が拾って漬け物にしたともいう。盆棚の竹などは、高田川へ流す。（行沢）

昔、寺があったという墓地の下の堂の前で、盆送りをする。家族が盆提灯や供え物を持って送って来て、麦わらを立てて送り火として燃やし、その火で盆提灯も燃やす。道の端にナスの馬を置き、里芋の葉にナスをさいの目に切って供える。ナシ・キュウリ・トウモロコシなども供える。線香・水を供えて送り出す。家々では半数くらいがここまで盆送りに来て、あとの半数は家のカドで盆送りをすませるという。（行沢）

送り盆には胡瓜の馬を作り、野菜をこまかく刻んだものと洗米とを重箱に入れて墓へ持ってゆく。

盆送り①15日の夕飯を盆棚の前で食べてから、送り出す。（諸戸字日向　市川辰広家）
（撮影　関口正己）

盆送り②座敷から庭へ降りた家族が提灯などを持って、カドまで送り出す。（諸戸字日向　市川辰広家）
（撮影　関口正己）

盆送り③家族がカドで麦わらの送り火を焚いて送り出す。石垣の下にナスの馬を置き供え物をする。（諸戸字日向　市川辰広家）
（撮影　関口正己）

盆の送り火　家族がカドで麦わらの火を燃す。コンクリ塀の上に供え物を置き線香を立てる。（諸戸　佐藤正勝家）
（撮影　関口正己）

盆　送　り
堂の広場まで送って来て送り火を焚き盆提灯を燃す。右隅にナスの馬と供え物を置き線香を立てる。（行沢）　（撮影　関口正己）

これは仏様のお弁当だと言い、仏さまはこのお弁当を持ち、胡瓜の馬に乗ってお帰りになるのだという。（妙義）

十五日の夕方盆棚の前で仏と家族全員が一緒に食事し、縁側から庭に出て、カドで麦わらを燃す。そして寺に向って倒す煙は墓の方に行くという。このときイモの葉にナスで作った馬、その他供物、寺からもらった盆中飲むお茶をコップに入れて持って行く。（下高田）

送り盆のときだけ線香を束のまま道の両側に立てる。（上高田）

送り盆は十五日の夕方、なるべくおそく送る。ナス・キウリなどで馬を作り、里芋の葉に乗せて送り出す。里芋の葉には、盆棚に供えたものを少しずつちぎって、ひとつかみほど乗せる。仏様が、もらったみやげを馬につけてもって帰るという。カド火をたいて、この煙に乗って盆さまはお帰りになる。（中里）

盆送りは十五日の夕飯を食べてから、盆棚にしんぜたものを芋の葉の上にのせ、また、ウリの馬やナスの馬も一緒にそえて、道端で麦わらを燃やし送り出した。このとき「さあさあ、ずうずうしないで、みんなといっしょに帰っておくれ」と心の中でいう。（上高田字下十二）

盆送りは十五日の夕方、ケエドで盆迎えした所にわら束を立て、盆棚の蠟燭を提燈に入れて運び、火をつけて送る。わら束は外へ向けて倒す。（下高田字本村）

盆送りの跡
15日の夕方、カドに送り出す。芋（イモ）の葉にナス・キュウリの馬や供え物をする　（諸戸字木戸）
（撮影　関口正己）

盆棚クズシ　十五日の晩がた盆棚の竹などを川へ流す。正月のものは燃すが盆のものは川へ流す。（諸戸）

盆送りは八月十五日だが、盆棚を片づけるのは十六日である。棚をこわすときには、アンの入ったマンジュウを供える。そして、棚に使った竹、チガヤ、スギの小枝などは当番の人がまとめて、辻で燃やす。当番とはムラの世話役で、大久保では一年交代で、二人ずつ順につとめることになっている。（八木連字大久保）

盆の十五日に盆棚を取り除く。各戸のものを子供たちが、提の端に集め、十六日の夕方、大体四時間から燃した。これは昔から行なわれていた。現在は川へ流すようになった。（中里字北山・菅原）

盆棚片付けは十六日、盆棚の竹をち茅でゆわえ川へ流す。里芋の葉の上にキュウリ、ナスで作った馬や、オダンスやうどんをのせ辻へ持って行って置く。（下高田字本村）

盆棚は新竹四本を立て、その周囲をチガヤの縄でめぐらす。これに

うどんをかけるが、送り盆のカケナワという、お盆様が帰るときの土産をしばる縄である。十六日朝盆棚くずしの前に饅頭を供え、それからくずして位牌をオルスイサン（仏壇）に返す。そして子供が盆棚に用いた竹などの道具、盆花の古いものなど縄でからげて川原に持って行き、各家ではヤカタを作る所に麦わらを添えて出す。三つ屋は久原と競争で燃えのよいようにと高く積み上げて燃した。（下高田）

九　月

一　日

二百十日　仕事を休む。ふかしまんじゅうや赤飯をつくる。二百二十日も同じ。（諸戸字日向）

風キリ　竿の上に、鎌を立てる。（菅原）

三部落会合　二百十日に特に行事はないが、村としては三部落会合がある。新堀、上の谷戸、下八木連の当番が集まって、祭りの提灯の張り替えをし、区長、氏子総代等の祭典会議がある。獅子舞、神楽を出す相談で、三部落順番に稽古をすることにした。（八木連）

ハッサク　嫁は葉ショウガを持って、実家へお客に行く。お返しに特別のものはない。

ハッサクは五節供の一つである。（諸戸字日向）

ハッサクの節供は九月一日、オカタ（嫁）をもらった新しい婿が、葉ショウガを持って、嫁の実家へお客に行く。お金も一緒にいくらか包んで行く。何回か行くことになっている。お返しはない。

二百十日を兼ねて祝う。（行沢）

八朔には嫁が里の家にショウガを持ってお客に行った。里の家からは水ひきをかけた水ひしゃくが返えされた。この場合の里は富岡市の丹生である。（上高田字下十二）

八朔は一日、嫁が実家へしょうがを持って行く。実家では新しいひしゃくを一個持たせて帰す。しょうがない嫁ごだがひしゃくですくってくれ、という意味である。この日のごちそうは、うどんである。（下高田字本村）

八朔の節供はふつうの家では今はしない。九月一日。嫁がショウガを持ってくる。帰りには柄杓を持たせてやった。子供が生れたときに湯をくみあげるようにということである。（下高田字新光寺）

旧八月十五日

十五夜　箕の中に、おまるをあげ、秋の果物を供える。十五夜に曇りあれど、十三夜に曇りなしという。（菅原）

十五夜は旧八月十五日、大豆（なま）・里芋（煮たもの）、カキ・ナシ五個、大根二本を箸として添えて、箕（み）に入れて縁側に供える。ダンゴはあまり作らないで、マンジュウがオマルのかわりになる。白飯を茶碗にもって供える。一升びんにススキ五本をさして縁側に出す。

子どもが供えた物を取りにくる。（諸戸字日向）

十五夜にふかしまんじゅうを作って食べる。まんじゅうと、柿・栗・梨・ぶどうなどの果物と、野菜の大根とを箕の中に入れて月に供える。二本の大根は箸のかわりだという。供えたものは、子供が下げに来る。（妙義）

十五夜は旧暦に合せて八月中にやった。丸いものを供えた。ニンジンやダイコンが箸のかわりだといって、ご飯を供えた。粉があればマユ玉のダンゴを十五作って箕に入れて供えた。また線香をあげる家もあった。十三夜も同じようなことをした。片見月はするものではないといって、この日には、お客に行ってても、家に帰らせられた。（上高田字上十二）

十五夜は米の団子十五か、ゆでまんじゅう十五をおはちの中へ入れる。箕の中へ大根二本を入れるがこれは箸の意味で、栗、さつま等を表

の縁側で日月が見える所に供える。この団子や供え物を子どもたちが盗みに行く。盗まれたほうが縁起が良い。（下高田字本村）

十五夜は月祭りでダンゴ（またはマンジュウ）を五つ重箱に入れたものを箕に入れて供える。大根二本は箸の代りだという。カヤ十五本を供える。（下高田字新光寺）

彼　岸

秋彼岸　入口、中日、アケまで、七日間ある。（諸戸字日向）

春・秋の彼岸の中日には、ボタ餅をつくる。廊下の天道柱（てんとうばしら）のそばに机を出して、ボタ餅五～七個、香立て、線香、お水、茶などを載せて、天道様に供える。天道柱は七夕飾りを結びつける柱だが、棚などはない。（諸戸字日向）

墓参り　花・オサゴ（洗米）・水・線香・ろうそく・果物などを持って行って、墓に供えてくる。だんごは作らない。（諸戸字日向）

塔婆　彼岸には墓参りする。寺へのつけ届けもする。随応寺では一月～六月までの供養をする壇家は春の彼岸に、七月～十二月までの壇家は秋の彼岸に、寺へ塔婆代三千円を納めて塔婆を立てる。（諸戸字日向）

彼岸は二十三日、先祖祭りで仏様がお客に来る日という。墓まいりをし、おはぎ、うどん等進ぜ、家の人も食べる。（下高田字本村）

彼岸の食事　里芋・トウナスを煮たもの、精進揚げ（てんぷら）などを作り、油揚の入った汁でうどんを食べる。お盆や彼岸などに食べる昼間のうどんのことをヒルベエテエという。（諸戸字日向）

秋の彼岸のしまいの日に、サトイモをゆでて、ダンゴにぎり、アズキを塩あじで煮て、それをつけてたべた。これをイモダンゴといっている。また、秋の彼岸には「仏様がイモを食べにくるから掘って仏様にあげな」、春の彼岸には「仏様がクサレイモを食べにくるから早く煮てあげな」などといわれた。（上高田字上十二）

十　月

旧九月十三日

十三夜　旧九月十三日。十五夜と供え物は同じだが、ススキでなく山のカヤを取って来て三本さす。

「十五夜ニハ曇リアレド、十三夜ニハ曇リナシ」といい、十三夜に曇れば不作になるという。（諸戸字日向）

十三夜は十五夜と同じだが、供え物にまんじゅうと果物を箕に入れるが、大根は除外する。（妙義）

十三夜は片見づきはよくないといって、よそへ行っても、かならず帰ってくる。（菅原）

「十五夜に曇りあれども十三夜に曇りなし」という。また「片見月はするもんじゃあない」、さらに「十三夜によく晴れると小麦があたる」という。（下高田字新光寺）

十　五　日

秋祭り　旧九月十六日は神明様のお祭りである。

世話人が用意をして、一晩中オコモリをして盛大に祭った。その後、祭りを止して、個人の神様になった。花火筒も残るが、花火を上げたのは知らない。ご神体は石で男の持ち物の形をした高さ一尺、経四～五寸くらいのものだが、どこかへ行方不明になった。菱屋旅館のゴモットモ様（木製）も一軒で祭っているが、同様のものである。（諸戸字木戸）

十月十五日は吾妻屋神社の秋祭りで、祭神は弟橘姫、ご神体は女で白蛇の神だという。宵祭りにうどんを作るが、ネギを使うなという。ネギを食べると、蛇がつながる、蛇が腹の中で生き返るという。

当日は赤飯をふかし、煮しめを作り、神社へお参りに行く。五十年も前から、八木節「菊女由来」を奉納している。八木節保存会ができている。（諸戸字日向）

祭日は昔は秋の祭典は九月一五日だったのが養蚕の関係から十月一日になり、更に現在の十月十五日となったという。（八木連）

秋の祭典には万灯という飾りをつけた花輪をつくった。四角の灯篭に「「天下泰平」「五穀豊饒」「家内安全」「鎮守祭礼」と書いて、高い竿で上げた。万灯の飾りは終ると各家庭に一本ずつ「養蚕が当る」といって配布された。（八木連）

お十夜　十月の半ば頃、十三夜の晩に阿弥陀堂でお祭りする。上・中・下組に二人ずつ炊事当番が出て、一軒から一合ずつ、モチ米を集め、大世話人の家で餅を五臼ついてお供えを作る。願をかけた人は、わり当て以外に一升、二升と多く出した。祭りは、世話人が各組に一人ずついて世話をするが、中里全体を統括する世話人が、大世話人である。この大世話人がお十夜の祭り全体の責任者である。当日は阿弥堂の鐘を鳴らすが、この音は妙義中に聞こえるという。鐘の音を聞いて参詣人が集まってくる。ご利益があるというので多数おまいりに来た。参詣者はお灯明料をあげて、小さく切ったオミゴク（お供餅の切れはし）をいただく。世話人が、ロウソクを立てた柄杓を持って、参詣者の間をまわると、皆これに一銭、二銭と灯明料を入れた。今は千円札を灯明料として納める。むかしはお十夜の祭りは二日間で、境内に露店が多数出た。夜祭がとくにぎやかで、当日は秘仏の阿弥陀像を開帳し、若い衆が源太節（八木節）をおどったり、芝居をしたりした。阿弥陀仏の像の右手の指にサラシ一反まきつけて、和尚がお経をあげてくれる。これを「禅の綱」言い、妊婦はゼニを出して、これを受けてきて腹に巻くと、お産がかるいと言われる。（申里）

十一月

旧十月一日

神無月　旧十月に神送りや神迎えはしない。（木戸・久保）（菅原）

旧十月十日

十日夜　新しいわらたばの中に、みょうがのからを入れ、なわでぎっちり巻いて、まきわらを作り、「十日夜、十日夜、十日夜は、いいものだ。朝そばきりに、昼だんご、夕めし食ってぶっぱたけ」と唱えながら、地面をたたく。もぐらのアナプサギになる。たたいたあとのまきわらは、草履作ったりする。（菅原）

十日夜にわらをたばねて地面をたたくのはモグラ退治だという。はたき回って、一銭もらったこともある。（諸戸字木戸・久保）

十日夜は旧十月十日、稲コキをした新しいわらをすぐって、縄を巻いてマキダワラを作る。わらの中にミョウガのからを入れるとよい。子どもがそれを持って道路に出て地面をたたく。唱え言をいう。

「十日夜イイモンダ、朝ソバキリニ昼ダンゴ、ヨー飯食ッチャブッタタケ」

田や畑のモグラを防ぐためという。大根の年取りとはいわない。（諸戸字日向）

十日夜には餅をつく。わらでっぽうをつくり、もぐらやねずみが田畑を荒さないように地面をたたく。「十日夜とうかんや朝そばきりに昼だんご、夕飯くってひっぱたけ」と唱えた。わらでっぽうのわらは、わらじづくりに使ったりした。（八木連）

十日夜にはトウカンヤ（わらづつ）を作った。そして「トーカンヤはいいもんだ、夕めしくっちゃぶったたけ」といって、土をはたいた。

芯にコンニャクの茎を入れるといい音がした。またミョウガの茎も入れた。これでモグラをおどかすといわれた。たたいたあとのわらは、わら細工に使うと具合がよかった。餅をついたが神棚に上げた。（上高田字上十二）

十日夜は十月十日夜、稲わらを縄で結え、村の各家を廻り庭面をたたく。これを「モグラブセ」ともいった。また「大根ノ年取リ」ともいう。そのときの唱え言は「十日夜はいいもんだ、朝そばきりに昼団子、ようめしくってひっぱたけ」。この日アンモチをつき家でたべた。（上高田）

餅　十日夜には新米新末で餅をついて、神棚・仏様・エビス・大黒に供える。嫁の家や、餅をつかない家へくれる。三月見ということはいわない。（諸戸字日向）

餅をつき、アン餅を十個お天道さまに供える。夜はふだんと変った献立にする。子供はワラデッポウを作ってたたき歩く。ワラデッポウの中に、コンニャクのかわいた芯を入れると良い音がするという。「トオカンヤはいいもんだ、朝きりそばに昼だんご、ヨーメシ食ってぶったたけ」と言いながらたたき歩く。モグラヨケだと言う。（妙義）

九日に餅をついておく。丸いあんぴん餅一臼。十日に稲わらの中へ芋がらの芯を入れたもので土をはたく。これは子どもがするもぐら除け行事である。

十日夜の歌「とうかんや　とうかんや、夕めし食って　ひっぱたけ」（下高田字本村）

十日夜は旧十月十日。この日はアン餅を作った。また、オソナエ餅を作って、箕の中に入れ、これを立ち臼の所に供えた。このとき「十日夜さまにしんぜます」といったこれは夕方行った。昼間は米粉で作ったマユ玉をますの中に入れて床の間に供えた。マユ玉の数は別に決まっていなかった。（上高田字下十二）

大根　十日夜の日になると、大根が大きくなるといわれた。また、この日頃まで、ナスの木を立てておくと、病人のうなり声が聞こえるといって、早く片づけろといわれた。（上高田字下十二）

二十日

エビス講　十一月二十日。おえびす様が働いて帰って来る。夜夕飯を一緒に食べる。（菅原）

エビス講は十一月二十日、エビス・大黒の木像を床の間の机の上に出して飾る。秋は夕エビスで、夕飯にお高盛りの飯を椀に盛り、頭付きのサンマと野菜の煮しめをそえて供える。金があれば五～十万円も一升ますに入れて進ぜる。エビス様に供えたものは、子どもには食べさせない。大人が先に食べてから、子どもにやる家もある。

エビス・大黒の掛軸はある家もない家もある。木像は木の橋の材で作ったものが、一番いいという。人に踏まれたものほどよいという。（諸戸字木戸・久保）

恵比寿講は二十日、働きに行った恵比寿様が帰って来る日。供え物は鯛一組とけんちん汁である。（下高田字本村）

月末

秋アゲ　十一月末に秋の仕事がすんだころ、餅をついて、嫁が実家へ持ってお客に行き、一晩泊ってきた。野良仕事で世話になった人に、餅やまんじゅうをやった。（諸戸字木戸・久保）

秋の農作業がすむと、もらったその嫁さんに赤飯をもたせて里へ帰した。嫁は何日か泊ってきた（上高田字山下・川幡）

十二月

一日

カワビタリ餅　十二月一日は小豆を食わないと橋を渡れないという。餅をついて食べた。（諸戸字木戸・久保）

カビタリ餅は十二月一日、しない。（諸戸字日向）

カビタリ餅は十二月一日。馬にも食べさせた。（下高田字新光寺）

アズキモノ　十二月一日、この日には、アズキモノを食べないうちは、橋を渡るなとか川へ行くなとかいわれた。「川流れ」になるという。（上高田字上十二）

八日

コト八日　十二月八日を「ことようか」ということは、聞いたことがない。（菅原）

十二月八日はコトジマイといったが、別に何もしない。米のメシを神棚に供えれば「大ゴト」だった。（上高田字下十二）

十一日

ツジュウダンゴ　青米で作る。悪魔よけに、握りこぶしのように作る。（菅原）

ツジュダンゴは十二月未（ヒツジ）の日、一宮貫前神社のオミト開きの前日に、だんごをツツジの枝にさして、窓々にさす。ヒツジダンゴ・ニギリダンゴともいう。くず米を粉にひいてこさえただんごだが、子どもが下げて回って、焼いて食うのが楽しみだった。（諸戸字木戸・久保）

ツジュウダンゴは十二月十二日、高田まではしているが、こちらではしない。（諸戸字日向）

ツジュダンゴは、またチュウチュウダンゴともいう。十二月十一日に手で握った形の団子をつくって供えた。（下高田字本村）

ツジュウダンゴは十二月十一日に掌で握った形の米の団子五こを萩にさす。三〇センチくらいの萩を二つわりにして、三つと二つに分けてさし、これを一組にして、俵・神・仏・便所・倉・牛小屋・床の間・かまど・釜神等合計すれば二〇組も三〇組もつくって各所に供えた。その夜は、団子を汁粉のようにして食べた。この団子はアシモトに出た米をあらって砂を除いた米でつくるのである。

ツジューダンゴは十一日に作る。一ノ宮のオミトーの前の晩、萩の木のまたを切って来る。これに米のかすの粉の団子を片方の枝に三個他方に二個さし、トボ口にさす。鬼にぶつけるためという。このときの歌は「明日の晩は、おみとうだ、つじゅう団子を食べらっしゃい」。（下高田字本村）

なお子供たちは

ツジュウダンゴ　ダサッセ
アシタノバンハ　オミトウダ

とうたってもらい歩いた。（下高田字新光寺）

ネズップサゲ　オミトウ（十二月十二日）の時に、焼餅をつくってふた股の木にさし（木はかまわないがふつうはコメゴメの木）「いいことを聞け、悪いことを聞くな」といいながら左右の目を交互にふさいでから戸袋にさした。ねずみが田を荒さないための行事という。（八木連）

十五日

屋敷神　毎年十二月十五日に祭る。（菅原）

屋敷祭り　ふつう十二月十五日にする。稲荷様で石宮がある。屋敷のイヌイ（西北）の隅に南向きにあるのが多い。赤飯、お頭つきの煮干しなど上げる。上げたものを猫でも犬でもすぐ食べばいいが、食わ

ないとつぐ日やり直す。行者に聞いたら、先祖がキツネの姿を借りて、屋敷を守ってくれるという。ウジ神とはいわない。オシリョウ様の名も聞かない。（諸戸）

屋敷神様は十二月十五日と決めて祭る。以前はいい日を見てやった。わらでオカリヤを作って赤飯とお頭つきを夕方上げる。篠にオンベロを切ってさす。供えものをしたら後をふり返るなと言った。犬などにとられないと翌日やり直した。篠のオンベロを子供が拾って歩いた。（行沢）

ヤシキ神は十二月十五日、昔は十二月の日のいい時に祭ったが、最近は十五日に祭る。わらのオカリ屋の家もあるが、石宮にしている家が多い。土台の高さについては何もいわない。きれいな所に祭る。（行沢）

屋敷神は十二月十五日、昔は暦でいい日をみて祭ったが最近は十五日にする。屋敷神はイナリ様を祭り、わらでカリ宮を作った。最近は石宮が多い。死後三十三年たつと、枝塔婆を立て、死者が仏から神になるという。しかし、ここでは屋敷神になるとはいわない。寺では、五十年祭・七十年祭・百年祭というが、する家はあまりない。（諸戸字日向）

屋敷まつりは、上八木連は十二月のトリの日のいい日にしたが、現在は十二月十五日ときまっている。栗の木の柱で、新わらを使ってお仮屋をつくる。赤飯をふかし、屋敷神さまに赤飯といわしのお頭付を進ぜたあと、年の小さい順にオテノコボをして食べ、帰りは後をふり返らずに帰るという。下八木連の岩井姓は十二月二十七日にする。やり方は同じである。（八木連）

屋敷まつりは、昔は酉の日や午の日、特にツチノエトリの日がよいといわれていた。現在は十二月十五日にきまっている。昔はお仮屋をつくるので、この日にはお仮屋のタテジの祝いとしてコモチ（うるちの米の粉ともち米をまぜてついた餅）を菱もちに切って、近所の子どもたちに分けてくれた。（上高田字上十二）

屋敷祭りには、子どもをよせて餅を投げてくれた。（上高田）

屋敷祭りは十二月十五日だが、昔は戌の日を避けた。オカリヤをつくった。市川マケでは赤いしめをする家例である。

赤飯を供えるが、供えたらうしろをふりむいてはいけない。翌朝、供えたものが残っているとやり直しをしなければいけないといった。（下高田字本村）

屋敷祭りは十二月十五日、屋敷稲荷様にこわ飯、頭付のいわしを進ぜる。供えたら後ろを向いてはいけない。供えた物が早くなくなるのが縁起がよい。（下高田字本村）

屋敷祭りは十二月十五日。わらでオカリヤをつくる。オカリヤにはしめを下げ、グシには御幣をさして、さらに餅の代りだからといって豆腐を菱形に切って二切れずつ組にして二組グシに載せる。半紙の上に赤飯、イワシをのせて供える。供え物はおぜんに載せてお供をつれて提燈をつけて行って供え、帰りは提燈をけして帰ってくる。後をふりむくなという。つぐ朝おきてみて供え物があるとよくない。供え物があったときは、神様にあやまって捨てるけれど、やりなおしはしない。（下高田字新光寺）

オシリョウ様　十二月十五日、屋敷稲荷を祭る時に、隣に並ぶ三角形の石（高さ七、八寸）にも赤飯を上げる。オシリョウ様とはいわない。稲荷様のご養族かと思っていた。（諸戸字日向）

ロジ（ツボ庭、庭の西側に花や木を植えて置く所）の中に自然石があり、屋敷祭りの時に笹竹二本立ててシメ縄を張って、一緒に祭る。三ガン日にも供え物をする。この家だけにあり、オシリョウ様と呼んでいる。（諸戸字日影）

若宮八幡　屋敷まつりと一諸にする。屋敷神様のそばに一段下げて石が置いてある。屋敷神様のお祭の時に竹を二本立ててしめ縄を張り同じものを上げておがむ。若宮八幡はご先祖を祭るという。（諸戸）

先祖まつり　八木連の松本家では屋敷まつりと一緒にする。赤飯を進ぜる。昔は暮になってからやった。（八木連）

二十二日

冬至　冬至十日前は、鍋釜がしみ割れるという。（菅原）

冬至にトウナスを煮て食べると、中気にならないという。ユズ湯を立てる。

ユベシを本家のヒネバアサンが作った。ユズの実の中身を出して、ソバ粉を詰めてふかしたものである。（諸戸字木戸・久保）

冬至にはトウナスを煮て食べる。ユズ湯をたてて入る。冬至にユズを漬けて豆マキに食べることはない。（諸戸字日向）

冬至は二十四日、一年中で昼が一番短い日。

とうなすを食べ、ゆず湯に入ると中気にかからない、という。（下高田字本村）

ユベシ　ユズができたころ作る。米の粉に砂糖やユズを入れてこね、ユズの実の中身を出した中に詰めてふかす。それを輪切りにして、焼いて食べる。ユズをヌカに入れて取っておき、正月ごろ作る家もある。（諸戸字日向）

二十三日

ダイシッケエ　大師粥。おひつに入れてあげる。「小豆を食べなきゃ、橋を渡るもんじゃない。河童にも食われる」という。この粥は長い萩の箸で食べる。（菅原）

十二月一日、この日小豆の御飯を食べないと、河童に食われる。大師粥という。（菅原）

ハイオイ　デェシッケェを食うと、ハエがいなくなるので、ハイオイという。ハエは「おれが帰ったあと見やがれ」という。寒くなるからいい気味だということで、ハエが捨てぜりふを残していくとのことである。（上高田字山下）

二十七日

女と馬の年とり　十二月二十七日のすすはきの日を、「女の年とり」といった。特別の行事はない。（菅原）

十二月二十七日は「女と馬の年取り」という。米飯・魚・野菜の煮しめで食べる。（諸戸字日影）

女と馬の年取りは十二月二十七日で、白飯にケンチン汁、焼き魚、芋・ゴボウの煮つけ物をつくって食べる。馬や牛にもご飯を一杯くれる。（諸戸字日向）

十二月二十七日を「女と馬の年取り」というのに対して、三十一日を「男の年取り」という。（諸戸字日向）

暮の二十七日は、「女と馬の年とり」といって、ちょっとしたものをつくる。岩井姓の家は、この日が屋敷まつりになる。（八木連）

十二月二十七日は馬の年とりで、この日は米の飯を煮て、釜のふたの上にご飯を盛って、まず馬に食べさせてから、家族の者が食べた。この日は馬が年をとるといった。（上高田字山下・川幡）。

松迎え　十二月二十七日に正月の松を山から取って来た。

松はどこから取って来ても、誰も何ともいわない。高棚（神棚）とお稲荷さん（屋敷稲荷）の分を四、五本取ってくる。三ガイ松を選ぶ。取ってきた松はロジ（ツボ庭）や屋敷稲荷の所など、人のまたがぬ所に置いた。（諸戸字日影）

松とり（松ムカエ）は暮のいい日をみてとって来る。方はかまわない。三階松を使う。（八木連）

松迎えは暮れの二十五日から二十八日の間に、オタケ山へ松を採りに行った。採ってきた松は日陰のような所においた。（上高田字上十二）

松迎えは十二月の末になり、よい日をえらんで山から迎えた。とってきた松は日陰に持っていき、オカシラツキを二匹供えて、手をあげ

ておがみ、三十日まで置いた。（上高田字下十二）

大掃除　十二月二十七日にする所が多い。大掃除をすませてから、正月様に供えるコジッコメをなったり、年取りをした。（諸戸字木戸・久保）

大掃除は十二月二十七日、ススタケは二本でも一本でもいい。葉をつけた竹の枝で作り、家の中のすすを払う。ススボウキともいい、必ず新しく作り、終ると燃してしまう。ス男とはいわない。（諸戸字日向）

煤はき・八丁ジメ、男が中心で家中を掃除し、その後しめ縄を飾る。此の日は二十七日、二十八日どちらでも良いが、「男の年とり」と呼んでいる。（下高田字本村）

三　十　日

餅つき　十二月三十日につく家が多い。二十九日は「苦」をつくというので、絶対につかない。三十一日は一夜餅を嫌うのでしない。

立臼はケヤキの木で、木戸の佐藤春吉氏が彫ってくれた。タマゴボリに彫ると一人でつく時に適している。ミカンボリに彫ると、米や麦をつく時に底が平たくて返りがよくないが、三人でつけるので量がつける。杵はサルスベリやフチの木で、大工にも作らせたが、二人用も三人用もあった。

正月用の餅をつく時は、立臼の回りにコジックメの縄を結び付けた。立臼の下には稲わらを十文字に敷いた。

餅をつく時は、立臼にふかした米を入れ、杵でよくこねてからつく。飛び散らないようによくこねた。三人づきもしたが、あまり力を入れないでつく。

ついた餅は、まず大根おろしに入れて、カラミ餅にして食べる。（諸戸字日影）

餅つきは三十日にする。臼の下にわらを十文字にして敷く。理由はわからないが中心を見るのだろう。石臼の時は、わらで輪をつくってその上に据える。早起きしてつくもので、女衆は二時起きをし、七時ころには七臼くらいつき上げてしまう。（八木連）

供え餅　お供え餅は二つ重ねて上げた。子供のころは、アワ・キビを作った時、下玉は白い米、上玉はキビの餅だったこともある。

ミタマノメシはしなかった。（諸戸字日影）

餅　餅は粉餅、アワ餅、キビ餅、ヒエモロコシ餅、草餅などがある。

粉餅は二番米を粉にして、こねて長丸形にしたものを、モチ米をふかす時に、上に立て並べてふかす。臼の中に一緒に入れて、杵でつきこむ。のし餅にして焼くと、モチ米の餅よりも軽くサクサクして、ポリポリと食えた。

アワ餅はモチ米一升にアワ二升くらいの割合で混ぜてついた。

キビ餅も同様についたが、真黄色で、のし餅にして焼いて食うと、サクサクしてかめばかむほど味があった。

ヒエモロコシ（ホモロコシ）の粉を入れて餅をつくと、直赤になって、よくねばってうまかった。トウモロコシの粉は餅にはしない。ヤ

神棚のシメ飾り（諸戸）（撮影　関口正己）

カマ神様のシメ縄
土間の裏口に張る。（諸戸）（撮影　関口正己）

キ餅にした方がいいが、まずい。（諸戸字日影）

餅つき・松飾りは三十日にする。（下高田字本村）

シメ飾り

カマ神様
カマドの傍の柱に幣束と神札とシメ縄を張る。（諸戸）
（撮影　関口正己）

十二月三十日。餅をつきながら、手のあいているものが、お飾りをする。床の間・仏様・荒神様・おえびす様など十二カ所に、十二カ月にかたどって飾る。

縁側に、お天道様の方に向けて飾る家もある。（菅原）

十二月二十七日にシメ縄をないあげる。太いものとコジックメとある。コジックメはわらでなって、松のしんと、オンベロ（幣束）を挟んだもので、三十本くらい作る。神棚・玄関・屋敷神・家の近所・畑のふちの観音様・墓地などに供えるが、余ったものは墓地に持って行って、墓に供える。

太いシメ縄（タイコ縄）は年神やえびす大黒に供えるが、真中が太いものを使う。

ていねいにすぐったわらを、うんとしめしてなう。（諸戸字日影）

お飾りは十二月三十日に作る。二十七日に山からお松迎えをしてきた松で、松飾りを作って飾り付ける。わらでコジックメを三十本もなって、家の中や屋敷稲荷、墓などへ供える。七五三の太いシメ縄も作って、神棚・年神棚・玄関などに下げる。（諸戸字日向）

コジックメは稲わらをなって、途中からわらを一本だけ外へ出した簡単なシメ飾りで、多い家は六十本くらいなって、家の内外の神々に供える。（諸戸字木戸・久保）

神棚に細い竹を吊して、ネギを下げる。根の白いのが、白髪（しらが）で長生きするように、二本吊すのは、友白髪になるようにという。（菅原）

お飾りは正月様の前に棒を渡して羽根・クリ・マワリ（まり）などをぶら下げた。

コジックメという縄をなって、オンベロ（紙）をさして、松といっしょに飾った。（諸戸字日影）

正月棚の前に竹竿をわたしてお飾りをする。山と海のものを供えるが、ミカン・栗・干し柿・コンブ・まり・鰯の頭付き、ユズ、ネギ、ヤブコウジ、ホオズキ、山百合、スルメ等である。栗とマリは繰りまわりよく、ヤブコウジは五両（千両、万両に対して）、山百合はもとはヨロといい、コンブと一緒にヨロコンブという。柿は買っても上げるものといい、ミカン（橘）は十両を意味しているという。（八木連）

年神様　神主が年神様や大神宮・三方荒神・お祓いなどの札を持って来るのを、各戸に配る。年神は男か女か不明である。（諸戸字日向）

三十一日

大晦日　早寝をすると、白髪が生える。（菅原）

十二月三十一日は全部の年取りで、オオミソカといった。

年越し魚にシャケを使う。（諸戸字日影）

大ミソカは家例によって違うが、汁粉やミソカソバを作って食べる。

年男は大ミソカの晩から、家の内外に供えて回る。正月は十二が単位で、松やオシメのお飾りがしてある所に、十二ケ所進ぜて回る。倉・物置・井戸・屋敷神・トボグチ・カマ神様などへ、ワリゴ（メンパ）に供え物を入れて供えて回る。ワリゴはあとで神棚に上げて置く。（諸戸字木戸・久保）

大晦日の晩、早く寝ると白毛になるといい、おそくまで起きている。最近は、テレビの紅白歌合戦を見ているので、すぐ除夜の鐘を聞くようになる。（八木連）

大晦日にソバを食べるという話はあるが、特にこだわらない。食べても食べなくもよい。（八木連）

大みそかに、早く寝るとシラガが生えるといわれた。また、十二月三十一日は、女の年取りといわれた。（上高田字下十二）

大晦日は三十一日、女の年とり、馬の年とりともいう。この日、御飯を正月棚へ進ぜる。年越そばを食べる。正月の食べもの等の用意をしておく。（下高田字本村）

オミタマ様　十二月三十一日と翌年の一月十四日に、仏壇に供えた。

十二月三十一日の場合は、米一合を炊き、むすびにしてメンパに二つに分け、それに箸を四本立てて仏壇にしんぜた。むすびにした残りの飯は「ハチナデ」といって、お椀の古いものにとり「コクゾウさんにしんぜます」といって神棚のすみの方へ供えた。コクゾウさんはネズミで、ハチナデはネズミにしんぜるのだといっている。

一月十四日の場合は、むすびにしないで、バラでしんぜる。やはり米を一合使い、炊いてメンパを使って供える。バラの場合は、箸は立てないで、四本をねせて供える。また、ハチナデもやる。

また、十二月三十一日のものは一月四日のお棚探しのときに下げて食べた。一月十四日のものは一月十六日に、オジヤにしてお昼に食べた。（八木連字大久保）

晦日の夕食前、オハツウをむすびにして二つ、皿に盛ってお盆に載せ、仏壇の中に入れる。供えると戸をしめきっておいて一月四日までは戸を開かない。むすびのひとつひとつに一ぜんずつ箸をたてる。これをミタマという。（下高田字新光寺）

トシトリ　十二月三十一日が男の年取りで、十二月二十七日が男と女の年取りだという。この日大掃除をして、白飯・豆腐汁のご馳走をした。

一月六日もオトシトリという。その前に嫁がお客に行っても必ず帰ってくる。

二月三日の節分もオトシトリといった。（下高田字新光寺）

一月六日は六日年。一月十三日―マルメドシ、二月―節分、十二月二十七日―馬の年取り、女の年取り、十二月三十一日―オオドシという。（上高田）